



Title	スウェーデン語と日本語における役割語の対照研究 ー〈時代ことば〉を中心にー
Author(s)	Lindskog, Sven Sebastian
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和 3 年度

博士学位申請論文

スウェーデン語と日本語における役割語の対照研究
— 〈時代ことば〉を中心に—

Sven Sebastian Lindskog

目次

序章.....	7
0. 要旨.....	7
1. 本論文の目的.....	9
2. 本論文の内容.....	10
第1章 役割語とは.....	10
第2章 調査方法と作品.....	10
第3章 調査結果.....	10
第4章 終章.....	10
第1章 役割語とは.....	11
1. 役割語の定義.....	11
2. 役割語における特徴と先行研究.....	12
第2章 調査方法と作品.....	14
1. 調査方法.....	14
2. 調査作品.....	14
第3章 調査結果.....	17
1. スウェーデン語の起源となる『赤い部屋』におけるスウェーデン語と日本語.....	17
1. 1. 先行研究.....	17
1. 2. 『赤い部屋』の調査結果.....	19
1. 3. 『海辺のカフカ』の調査結果.....	22
1. 4. 第1節のまとめ.....	24
2. 聖書におけるスウェーデン語と日本語.....	25
2. 1. 先行研究.....	25
2. 1. 1. 日本聖書の歴史.....	26
2. 1. 2. スウェーデン聖書の歴史.....	29
2. 2. 聖書の調査結果.....	31
2. 2. 1. 聖書の人称代名詞と呼称.....	31
2. 2. 2. 聖書の命令形.....	33
2. 2. 3. 聖書の打消し.....	35
2. 2. 4. 聖書の特殊な言葉遣い.....	35
2. 2. 5. フィクション作品における〈聖書語〉.....	37
2. 3. 第2節のまとめ.....	41
3. 翻訳作品におけるシェイクスピア劇の〈時代ことば〉.....	43
3. 1. 先行研究.....	44
3. 2. 調査作品と方法.....	45
3. 2. 1. 調作品と情報.....	45
3. 2. 1. 1. 調査作品.....	45
3. 2. 1. 2. 作品情報.....	45
3. 2. 2. 調査方法.....	51
3. 3. 調査結果.....	51
3. 3. 1. 『ハムレット』と『リア王』における人称代名詞.....	51
3. 3. 1. 1. 日本語訳.....	51
3. 3. 1. 2. スウェーデン語訳.....	58
3. 3. 2. 『ハムレット』と『リア王』における命令形.....	60
3. 3. 2. 1. 日本語訳.....	60
3. 3. 2. 2. スウェーデン語訳.....	63
3. 4. 第3節のまとめ.....	63

4. スウェーデン語から日本語への翻訳と〈時代ことば〉	65
4. 1. 先行研究	65
4. 2. 調査結果	66
4. 2. 1. あらない・ <i>ingalunda</i> の使用	66
4. 2. 2. <i>ty</i> の使用	68
4. 2. 3. 書き言葉的要素	70
4. 3. 第4節のまとめ	71
5. 日本語からスウェーデン語への翻訳と〈時代ことば〉 (1)	72
5. 1. 先行研究	72
5. 2. 『騎士団長殺し』の調査結果	73
5. 2. 1. 日本語に影響されたスウェーデン語	73
5. 2. 2. 不自然な日常会話（書き言葉要素）	76
5. 2. 3. 騎士団長の話し方	77
5. 3. 第5節のまとめ	80
6. 日本語からスウェーデン語への翻訳と〈時代ことば〉 (2)	81
6. 1. 先行研究	82
6. 2. 調査結果	83
6. 2. 1. 原文（日本語）におけるふかえりの特徴	83
6. 2. 2. スウェーデン語版におけるふかえりの特徴	84
6. 2. 3. 日典訳におけるふかえりの例外的な言葉遣い	85
6. 3. 第6節のまとめ	89
第4章 終章	91
参考資料と参考文献	94

序章

0. 要旨

本論文は、日本語とスウェーデン語それぞれの翻訳作品における〈時代ことば〉の実態調査と、それに基づく理論的考察を目的とするものである。〈時代ことば〉とは役割語の一種である。ここでいう役割語とは主にフィクション作品で出て来るキャラクターの「わしは博士じゃ」（老人）や「拙者は侍でござる」のようなステレオタイプの話し方を指す。日本語における〈時代ことば〉の研究としては金水（2012）があり、歴史的なキャラクターが、一人称「拙者」や動詞「ござる」「まいる」「もうす」という〈時代ことば〉を用いる武士キャラクターであることを指摘している。さらに、金水（2018）は、さまざまな種類の〈時代ことば〉のキャラクターを取り上げ、それらを以下のように分類する。

- ・性差で分類：書生
- ・職業・階層で分類：軍隊語、遊女ことば、王様ことば、お嬢様ことば
- ・時代で分類：武士ことば、忍者ことば、公家ことば、遊女ことば、町人ことば、股旅ことば

中でも翻訳における〈時代ことば〉の活用については金田（2012）が取り上げ、これを論じている。金田氏は、日本語から英語に翻訳されたテレビゲーム『ファイナルファンタジーVI』で登場するカイエンという武士キャラクターの発話分析を行った。そして、金田氏は、カイエンの話し方について、自称詞に「拙者」、語尾に「〜でござる」を用い、話し方は典型的な武士キャラクターのようになっていると述べる。また、英語版では、呼びかけ詞の *sir* を用いることに加え、単数 *you* の代りに古語の *thou* を使用するが、この *thou* がちょうど日本語の「でござる」語尾に相当する役割語要素になっていることがわかると述べる。

一方、スウェーデン語における役割語研究は不明な点が多い。スウェーデン語では、日本語のように豊富な人称代名詞と文末表現がないため、日典訳の大きな問題点とは役割語の翻訳である。例えば、人称代名詞の豊富な日本語では特定のキャラクターを表わすことは容易であるが、スウェーデン語では単複数形の一人称代名詞 *jag/vi* しかなく、人称代名詞で特定のキャラクターを表わすことは難しいため、キャラクターにどのように特徴づけるかは問題点となりうる。また〈時代ことば〉研究としては、王様による「尊厳の複数」（自分を複数形で自称すること）や聖書の古典的な要素を取り上げる Bergman（2013）があるが、スウェーデン語作品におけるキャラクターの発話分析を行う先行研究は非常に少ない。

このように、日本語、スウェーデン語ともに〈時代ことば〉の研究は未だ不十分な段階と言える。さらに、翻訳への影響ということになると、先行研究がほぼ見当たらない状況である。このような研究上の空白を埋めるため、本論文では次のような構想のもとに、研究を組み立てる。

まずスウェーデン語・日本語における〈時代ことば〉による翻訳の源泉として一候補とされる聖書の言葉を取り上げる。その理由は、スウェーデンでは、さまざまな聖書の翻訳がある。初の翻訳は1526年の新約聖書であるが、グスターフ・ヴァサ聖書という全聖書は1541年に刊行した。この聖書の翻訳は完成当時にも古語的な言語で記された。その後には訳された聖書は言葉の綴り方の改め以外、変更点はほぼなく、1541年の聖書（1703年からカール12世聖書と呼ばれた）は1917年まで日常的に使用されたものである。多くの人々は毎週日曜日、教会に行き、学校でこの聖書を学ぶため、聖書独特な表現を熟知しているらしい。それゆえ、聖書での表現を他ジャンルの作品の、特に〈時代ことば〉に対して、その表現が強く影響したと予測される。そこで、他ジャンルの作品は、広く読まれた聖書にどの程度に影響されているかを明らかにしたいと考える。

その一方、日本聖書としては文語体で記された2014年の『文語訳 新約聖書 詩篇付』を用いる。本訳の底本は、よく知られている1917年に刊行された『改訳 新約聖書』と1888年の『旧

約全書』の改訂版である¹。本訳は、1955 年までによく普及した影響により、その〈神様語〉の役割語が現在にも広く認識されている。例えば、人称代名詞「われ」と「なんじ」の併用や祈りの「たまえ」という命令形などの役割語を知る人は少なくなく、スウェーデン聖書のように日本聖書もまた他作品のことばへの影響力が強いと考えられる。

このような聖書翻訳の実態を踏まえながら、「他の言語→日本語・スウェーデン語」「スウェーデン語→日本語」「日本語→スウェーデン語」それぞれの翻訳における時代語の実態調査を行う。他の言語から日本語・スウェーデン語に翻訳された作品としては、シェイクスピア劇を取り上げる。日本語からスウェーデン語、及びスウェーデン語から日本語に翻訳され、〈時代ことば〉を用いる作品に相当の制限がある。その制限をクリアするため、世界中に高く評判され、近現代にわたって多くの翻訳者によって日本語とスウェーデン語に訳されているシェイクスピア劇の『ハムレット』（1603）と『リア王』（1608）の〈時代ことば〉を調査した。宗教や聖書の言葉からの影響が見られるシェイクスピアの『ハムレット』と『リア王』は、スウェーデン語版の Hagberg 訳では、特に文体で聖書から強い影響を受けていることが明らかであり、日本語訳でも「祈り」や神への呼びかけでは聖書の文語訳からの影響が想定されるため、聖書の言葉を源泉とする本研究にとって適切な作品だと考える。

しかし、聖書の言葉のみならず、シェイクスピア劇では王様キャラクターには大きな役割が担わされており、日本語とスウェーデン語訳にも〈時代ことば〉の一つである〈王様ことば〉の役割語が見られる。どのような〈王様ことば〉があるかを明らかにするため、Bergman（2013）や刈（2012）を参考にしながら、原文におけるシェイクスピア劇の近現代における日典訳の〈王様ことば〉は、それぞれの言語にどのように翻訳され、特にどのような人称代名詞の使用傾向があるかを分析した。

スウェーデン語から日本語への翻訳の例としては、スウェーデンの聖書で使用されている言葉と当時で出版されたスウェーデンのストリンドベリの自然主義の定義作品『赤い部屋』（1879）の登場人物が使用している言葉を取り上げる。当時のスウェーデンの社会で使用された言葉遣いが数多く見出される『赤い部屋』は、聖書の特有の〈時代ことば〉を特定するために適切な比較作品になると考える。さらに、『赤い部屋』は現代スウェーデン語に起源を持つものの、現代から見れば、古風な言葉遣いが数多く見られる。現代スウェーデン語との相違点を示すため、自然主義の『赤い部屋』と厳粛な言語の豊かなストリンドベリ劇の『父』（1887）、『令嬢と召使』（1888）や *Ett Drömspel*（『夢の劇』）（1901）の言語と比較する。

また、スウェーデン聖書（カール 12 世の聖書）は、1526 年から 1917 年まで使われたため、恐らく 1900 年代の当時の人にとって最も時代外れの言語を使った聖書だったと考えられる。この時代外れの言語は、聖書以外の作品に使用されたかを調べる必要があると考える。Teleman（2007:106）は、カール 12 世聖書を当時の 1900 年代の劇と比較する。劇は厳粛なスウェーデン語を用いる傾向があったが、20 世紀後半では劇の言語をはじめ、厳粛なスウェーデン語で行われた説教、公演やスピーチの言葉遣いも使わなくなっていたと述べる。このように取り上げられるストリンドベリ劇には厳粛な〈時代ことば〉がどのように表現されるかを論じ、聖書の言葉と共通点があるかを確かめる。

日本語からスウェーデン語への翻訳の例としては、村上春樹の現代小説『海辺のカフカ』、『1Q84』と『騎士団長殺し』がある。これらの作品の舞台は現代日本であるものの、古めかしいまたは奇妙な話し方をするキャラクターの出現が多いが、その現代設定での古めかしい要素や奇妙な言葉遣いはどのようにスウェーデン語に翻訳されているかを検討する。その目的は、翻訳者がこのような日本語の〈時代ことば〉、または古い言語の要素を、翻訳目的語のスウェーデン語にどのように置き換え、スウェーデン語の〈時代ことば〉に対してどのような概念を抱いているかを確認することである。村上春樹作品のスウェーデン語版の〈時代ことば〉は聖書の言葉に影響されていると想定されるが、言語のバリエーションが遥かに勝っている日本語では必ずしもそ

¹ 改定されたのは、明らかな誤記、誤植の箇所のみである。

うではないと考えられる。なぜなら、日本では聖書以外、『平家物語』の軍記物や江戸時代の文楽等の豊富な〈時代ことば〉を扱う資源があるからである。〈時代ことば〉はどのように翻訳されているかを調べることで、スウェーデン語にもどのような〈時代ことば〉の役割語があるか、予測しうる可能性があると考えている。また、日本語に翻訳されていないが、Guillou (1998) の執筆した *Vägen till Jerusalem* (『エルサレムへの道』) 等という 12 世紀を舞台とするスウェーデン語の騎士小説では、登場人物はどのような言葉遣いを用いるか、その話し方に〈時代ことば〉が含まれているかを明確するため、本小説を分析した。これによりスウェーデン語に翻訳された村上春樹の作品の〈時代ことば〉との間に共通点が認められるかどうか明らかなとなり、役割語としての立場も強くなると考える。

最後に、以上の実態調査に基づいて、翻訳に〈時代ことば〉が採用される場合の一般的傾向と、その個別性について考察を行う。それぞれの言語作品の実態調査によって、日本語から翻訳された作品にどのようなスウェーデン語の役割語が用いられるのか、またスウェーデン語から翻訳された作品には如何なる基準で役割語が使われているのか、明らかにすると予想される。

1. 本論文の目的

本研究のテーマは、「日本語とスウェーデン語における役割語の対照研究」であり、日本語とスウェーデン語の役割語・役割語の使用・翻訳を比較するものとなっている。日本語では役割語は非常に発達しており、日常会話・文学・メディアでもよく使用されている。例えば、用例としてよく見出せるのは、アニメや漫画の博士キャラクターの「わしは...じゃ」や武士キャラクターの「拙者は...でござる」等である。また、人称代名詞や助動詞の文末表現の組み合わせにより、特徴的なキャラクターに造型されている事例を多数確認することができる。

しかし、スウェーデン語では、日本語のような豊富な人称代名詞と文末表現が存在しないため、日典訳の大きな問題点として役割語の翻訳を挙げることができる。日本の役割語がどのように訳すべきか、スウェーデン語の役割語が一体どのように表わされているのかを明らかにすることが、本研究の目的である。

本稿者の 2018 年にイェーテボリ大学で開催された講義で発表した「スウェーデン語の役割語について」では、原文の漫画キャラクターは、知識キャラか非知識キャラかにより、スウェーデン語でもそれに応じて異なる言葉遣いを用いれることに注目した。

ケーススタディとして大場つぐみ、小畑健による日本の少年漫画『デスノート』で登場する高校生の夜神 月^{やがみライト}と死神リュークのそれぞれの話し方に関する調査を行った。「ぼく」か「おれ」の使用によって二人のキャラクターの性格が表現されるものの、スウェーデン語の一人称は単なる *jag* に訳されている。スウェーデン語では「ぼく」と「おれ」は単なる *jag* に翻訳されるため、翻訳者は「ぼく」と「おれ」キャラを表わすため、さまざまな工夫を用いざるを得なかったようである。例えば、ライトの父に指す際に、ライトもリュークも「父」を意味している言葉を用いるものの、ライトは中立的な *pappa* (お父さん) を用い、リュークは非知的な言葉とされる *farsa* (親父) を使うことを明らかにした。つまり、日本語の役割語に対して、スウェーデン語への翻訳では、これを類義語の使い分けによって表現しようと試みていたと考えられる。このような方法は役割を表現する在り方の一つだと考えており、本研究ではその使い分ける方法および日典翻訳におけるスウェーデン語の役割語について、より具体的な検討を実施する。

本稿の目的は、役割語の一種である〈時代ことば〉の実態調査と、それに基づく理論的考察をするものである。フィクションにおいて、〈時代ことば〉というのは、ある時代の特徴的な言語を表わすものである。〈時代ことば〉は基本的に当時の現代語と相当異なるため、ここに相違点を見出せると考える。人は、古い言葉または〈時代ことば〉の概念について考える際、キャラクターが使いそうな言葉を想像する。特に時代小説を読むと、登場するキャラクターの話し方があまり現代的ではなく、古風なものであっても納得するケースがあろう。それはたとえば日本語では、「拙者」や「でござる」は、時代劇の武士が用いる〈武士ことば〉としてよく現れ、〈時代ことば〉として認識されている。しかし、スウェーデン語では〈武士ことば〉等という言葉遣い

は、日本ほど明確に知られるものではないと考える。そこで、日本語から翻訳された〈時代ことば〉の作品や原文であるスウェーデン語の時代作品の言語は、存在しているか、どのように使われているかを調べるため、さまざまな作品の調査を行った。また、本稿では〈時代ことば〉を以下のように定義する。

キャラクターの発話の中で、ある当時の現代語が用いられる上で、古い言葉がともに使用されたら、その言葉遣いを〈時代ことば〉と呼ぶ。また、〈時代ことば〉と見なされる条件として、ある背景やキャラクターの発話を古風にする目的で現代語とともに古風な言葉が使われる必要がある。

2. 本論文の内容

第1章 役割語とは

本章では、役割語とはどのようなものであるかを説明し、言語的にどのような特徴をうかがうことが可能かを整理した。また、日本語の役割語・役割語の翻訳に関わる先行研究の傾向と本稿の方向性について述べる。そして、〈時代ことば〉の主な日本語とスウェーデン語における研究を取り上げ、翻訳における〈時代ことば〉の研究も示し、〈時代ことば〉における研究の欠点について述べる。

第2章 調査方法と作品

本章では、調査対象の作品を具体的に示し、調査対象として選ばれた理由を説明する。日本とスウェーデンでも、聖書が昔から広く読まれている作品であり、他作品やジャンルの言語に強い影響を与えているので、本稿の調査の源泉として用いる。さらに、他の調査作品は、どのように聖書と関わっているかを説明する。そして、検討作品における役割語・〈時代ことば〉をどういった方法で調査するかについての説明を行う。

第3章 調査結果

本章では、調査作品の分析、日典語の役割語について考察を行い、明らかになったことをまとめる。六つの調査で、それぞれの作品の役割語の注目点を取り上げる。

なお、六つの調査対象作品は以下のとおりである。

①ストリンドベリ『赤い部屋』（1879）と村上春樹『海辺のカフカ』（2002）、②日本文語体聖書（1917）とスウェーデン語聖書（1526-1917）、③シェイクスピア劇の『ハムレット』（1603）と『リア王』（1608）の翻訳における〈時代ことば〉、④スウェーデン語から日本語への翻訳作品、⑤村上春樹の『騎士団長殺し』（2017）と⑥村上春樹の『1Q84』（2009）である。

第4章 終章

本章では、第3章の調査結果で日本語とスウェーデン語の役割語・〈時代ことば〉に関して明らかになったことをまとめる。そして、検討結果から浮かびあがってくる理解について整理する。その後、今後の課題としてより詳細な検討を要する作品とテーマについても述べる。

第1章 役割語とは

1. 役割語の定義

役割語は、金水（2003:205）によって以下のように定義されている。

ある特定の言葉づかい（語彙・文法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

具体的にいえば、役割語は主にフィクションの中で登場するキャラクターのステレオタイプの言葉遣いである。例えば、老人のキャラクターは「そうなんじゃ、わしは知つとるんじゃ」、貴婦人のキャラクターは「そうですね、わたくしは存じておりますわ」のような一人称代名詞や断定の文末表現を用いる。このような言葉遣いを「役割語」と呼ぶわけである。金水（2003:v）は、以下のように具体的で、かつさまざまな役割語を示す。なお、その用例では、発話者は同じ内容の「そうです、わたしが知っています」という台詞を述べるが、使用される人称代名詞と文末表現がそれぞれ異なる事例を紹介している。

- a. そうよ、あたしが知ってるわ→女の子
- b. そうじゃ、わしが知っておる→老博士
- c. そや、わてが知つとるでえ→関西人
- d. そうじゃ、拙者が存じておる→お武家様
- e. そうですねよ、わたくしが存じておりますわ→お嬢様
- f. そうあるよ、わたしが知ってるあるよ→（ニセ）中国人
- g. そうだよ、ぼくが知ってるのさ→男の子
- h. んだ、おら知ってるだ→田舎者

金水（2011:8）は「役割語」とは、特定の社会的グループが共通に用いると広く考えられているステレオタイプの話し方の変種であると述べる。さらに、その話し方を現実の「位相（差）」として見るのではなく、人々が共通に持つ知識の問題としての見方だと述べる。だが、現実に近い話し方の場合もあれば、現実とは異なる場合もある。「わしは～じゃ」のような話し方をすると、日本で育った多くの日本語話者は〈老人語〉を想起するだろう。しかし、金水（2011）が述べるように、現実では、老人になると〈老人語〉を使用するようになるという事実は存在しない。それに対して、「おれは～だ」のような言い方を〈男ことば〉、「あたしは～よ」のような言い方を〈女ことば〉ということについては、多くの日本語話者が同意するであろう。そのように話す男女は実在する。したがって、これを現実の日本語の位相差と認めることはできるものの、同時に役割語として認めることも可能であると述べる。

また、金水（2017:246）は、受け手の自己同一化の度合（内面描写の分量）、登場頻度と、台詞の言葉遣いとの関連から、役割語を用いるフィクションの登場人物を三つのクラスに分類する。

クラス1: 主人公および準主人公。登場頻度が高く、また内面描写も豊富である。受け手の自己同一化はこのクラスのキャラクターに誘導しなければならないので、あまり奇抜な特徴づけは行われない場合が多い。したがって言葉遣いも、標準語を基調とする、役割語度の低い話し方となることが多い。

クラス2: メンター、同調者、敵対者、トリックスター、変貌者、影といったアーキタイプに属する重要なキャラクターがここに位置する。個性的であるが、内面描写はクラス1の人物よりも少なく、「他者」として立ち現れる人物たちであると言える。

言葉の面では、典型的な役割語（標準語を含む）が用いられる場合が多いが、一方で、通常の役割語からずらしたり、重ねたり、あるいはまったくそれまでに例のないユニークな話し方をさせる場合もある。

クラス3：ほぼ一回登場したらそれっきりの人物であり、従って名前が現れることもまれである。あらゆる属性において、環境になじんで目立たないことが一番の特徴である。言葉の面では、役柄に応じた一番無難な（典型的な）役割語（標準語を含む）を使用することが基本である。

2. 役割語における特徴と先行研究

本研究の目的の一つは、スウェーデン語では役割語が存在しているか、また、どのような役割語が表現されるかを調査することである。それゆえ、本節では日本語の役割語の特徴を取り上げる。

第3章で多数の作品における〈時代ことば〉を中心とする調査を行うから、ここでは金水（2012:13）が述べるような歴史的なキャラクターの話し方について取りあげようと思う。

金水（2012）は、歴史的なキャラクターの代表は〈武士〉であり、武士ことばの中で一人称代名詞「拙者」や動詞「ござる」「まいる」「いたす」「もうす」等の語彙が見られると述べる。現実の〈武士ことば〉は江戸時代初期に成立し、ある程度資料も残ってはいるが、鎌倉・室町時代のものについては資料が乏しく、その詳細は不明である。そして、戦国時代物の時代劇等では、江戸時代の〈武士ことば〉をアレンジした現実とは異なる、想像的な言葉遣いが用いられていると金水氏は述べる。

また、フィクションの中で平安貴族が「まろは〜でおじゃる」を使うことがある。この「おじゃる」は室町時代末〜江戸時代初期の京都近辺の庶民の言葉で、平安時代の言葉ではないと金水（2013）は指摘する。

もう一つの〈時代ことば〉の用例として、現代の文語訳の聖書にも使われる「われ」と「なんじ」の人称代名詞や命令形「たまえ」という〈神様語〉を挙げることができる。スウェーデンの聖書で使われる言葉は、〈時代ことば〉に強い影響を与えていると考えるため、本稿ではこれを最も重要な調査資料として位置づけている。

さらに、金水（2018:11）は、さまざまな種類の〈時代ことば〉のキャラクターを取り上げ、以下のように分類し、「時代」の分類以外に「性差」と「職業」の分類も見られる。

- ・性差で分類：書生
- ・職業・階層で分類：軍隊語、遊女ことば、王様ことば、お嬢様ことば
- ・時代で分類：武士ことば、忍者ことば、公家ことば、遊女ことば、町人ことば、股旅ことば

スウェーデン語の時代小説や劇にも王様キャラクターは現われるため、日本語の〈王様ことば〉と比較対象になりうると考える。そして、金水（2018）による分類には見えないが、スウェーデン語における〈時代ことば〉では聖書が重要な資料であるので、〈聖書語〉または〈神様語〉を調査対象とする。

調査方法に関しては、日本語の役割語の場合、人称代名詞や文末表現の組み合わせ等が中心となっているが、外国語の場合、人称代名詞や文末表現が日本語ほど豊かではないため、次のような調査方法が必要になると考えている。山口（2007）は、英語の役割語では「視覚方言」という言語の表し方を分析する必要があると論じ、スウェーデン語のテキストにもこのような調査方法の適用が求められるか。山口（2007）は、英語の役割語で最初に思いつくのは、方言話者の言葉であると述べる。例えば、『ハリー・ポッター』シリーズにはハグリッドという方言話者も登場し、彼の言葉は西部地方（West Country）の方言を反映しているらしいと述べる。

(a.) 'Las' time I saw you, you was only a baby,' said the giant. 'Yeh look a lot like yer dad, but yeh've got yer mum's eyes.'

(b.) ‘Anyway – Harry,’ said the giant, turning his back on the Dursleys, ‘a very happy birthday to yeh. Got summat fer yeh here – I mighta sat on it at some point, but it’ll taste all right.’²

山口（2007:13）は上記の用例について次のように述べる。小説で示される方言は、読者にそれと分かる程度に方言的要素を選択的に提示することが多い。これは仮に音声的特徴を忠実に再現すると、あまりに読みづらく、一般読者の理解に支障をきたすからである。このフィクション特有のスタイルは、目で読む方言という意味で視覚方言（eye dialect）と呼ばれる。たとえば英語の場合、視覚方言は非標準的なつづりによって示されることが多い。掲出例では、*you* が *yeh*、*your* が *yer* で示され、語尾子音の脱落（*Las’ time*）などの現象が見られる。そして、非標準的綴り以外にも、*be* 動詞の非標準的用法（*you was*）や方言的語彙（*summat=somewhat; something* の意）が用いられている。

しかし、非標準的綴りという正書法に対する破格を用いるため、当該の方言話者（登場人物）が教養に欠けるという印象をいやおうなく読者に与えてしまう。つまり、その登場人物は正確な読み書きができない、と想定されてしまうわけである。英語でも、強い方言を用いる人物は田舎者として見なされることがあり、〈田舎ことば〉の役割語として捉えるべきだろうと山口氏は述べる。本稿では〈田舎ことば〉に関して論じないが、翻訳されたテキストへ山口氏の「視覚方言」分析のアプローチが〈時代ことば〉の調査にも援用可能であると考えている。

続いて、〈時代ことば〉を扱う研究として金田（2012）を挙げることができる。金田氏は、現代英語では二人称は単複ともにもともと複数形であった *you* が用いられ、古語での単数形 *thou* は現代では話し言葉として使用されることはないと述べる。金田（2012）は、フィクションにおける *thou* 使用の用例として、人気を得ているテレビゲーム『ファイナルファンタジーVI』から以下の例を紹介する。

まあ、まあ、まあ、まあ、それはともかく、君は何者でござる？

Oh, dear... Do simmer down, sirs! And **thou**, o wild one... Who might **thou** be?

金田（2012）は、用例発話者のカイエンの話し方について、自称詞に「拙者」、語尾に「〜でござる」を用い、話し方は典型的な武士キャラクターのようになっていると述べる。そして、英語版では、カイエンのみ呼びかけ詞の *sir* を用いることに加え、単数 *you* の代りに使われる古語の *thou* が日本語の「でござる」語尾に相当する役割語要素になっていることが分かると述べる。さらに、金田氏は以上の用例について「実際（13）の台詞の後、カイエンは相手である野生児のガウに「ござる」と呼ばれ、この部分は英語版では“*Mr. Thou*”となっている。このことも、*thou* が「ござる」に相当する特徴的な要素であることが強調されている。」と述べる。英語（西洋語）は、日本語より人称代名詞を多用するため、他の特徴を表わす要素が少なくとも、人称代名詞の使い分けにより役割語として翻訳することができる。

以上のような研究（日本語からスウェーデン語への役割語の調査）は、スウェーデン語を対象としてはあまりなされていないが、時代的な言葉の研究としては、王様による尊厳の複数や聖書の古典的な要素を取り上げる Bergman（2013）が取り上げられる。また、Teleman（2007:106）も聖書の言葉を分析し、スウェーデンの 1900 年代の劇で使われた言葉と比較する。Teleman 氏によると聖書でも劇でも厳粛なスウェーデン語が使われていると述べ、本稿でも比較対象となる。

² 日本語訳は以下のようである。

a. 「最後におまえさんを見た時にゃ、まだほんの赤ん坊だったなあ。あんた父さんそっくりだ。でも目は母さんの目だなあ」と大男は言った。

b. 「なにはともあれ……ハリーや」

大男はダーズリーに背を向けてハリーに話しかけた。

「お誕生日おめでとう。おまえさんにちよいとあげたいモンがある……どっかで俺が尻に敷いちまったかもしれないが、まあ味は変わらんだろ」

第2章 調査方法と作品

1. 調査方法

研究の調査方法として、原文のテキスト（日本語・スウェーデン語）におけるキャラクターの話し方にはどのような特徴があるかを分析する。なお、その特徴は、原文から日本語かスウェーデン語へどのように置き換えられているかを調べ、相違点や共通点を示すため、主な用例を列挙する。そして、節ごとにそれぞれの調査作品の用例を掲げたのち、原文との共通点・相違点を表にまとめ、分析する。また、「日本語・スウェーデン語」と「スウェーデン語・日本語」の〈時代ことば〉における翻訳作品には限りがあるため、原文が英語で日本語とスウェーデン語に翻訳されている作品も調査対象とした。これにより他言語の原文を調査対象に入れた場合、それぞれの言語（日本語とスウェーデン語）は、どのような翻訳手法を使うのか、その検討が可能となる。

また、金田（2011）が見出した通言語的な対照が可能か検証すべき役割語要素の中から本稿では、太字の「特定語彙の使用」と「人称代名詞」に注目する。

- ・音韻変種の出現パターン
- ・特定語彙の使用
- ・単純形式による文法的破格
- ・人称代名詞
- ・文末形式

なぜなら、スウェーデン語では、日本語のように豊富な人称代名詞や文末表現の語彙がないため、スウェーデン語の役割語があるかを見極めるため、調査作品のキャラクターが用いる特定の言葉进行分析の必要があると考える。例えば、ある種の言葉は特有のジャンルのみで見られるか、そのジャンルのみで特別な文法活用形が使われるかを検討する。また、スウェーデン語の人称代名詞が少ないと述べたものの、作品によっては役割語度の高い人称代名詞の存在が想定されるため、人称代名詞も調査対象に入れる。特に聖書の登場人物と時代作品における王様キャラクターによる人称代名詞が特徴的であり、一考の余地があると考ええる。

2. 調査作品

本研究では役割語の一つである〈時代ことば〉の観点から研究を進め、日本語とスウェーデン語に翻訳されている作品の役割語・役割語の使用・翻訳を比較する。しかし、〈時代ことば〉は基本的に「当時の現代語」と異なるものであるため、まずは、その相違点を明らかにしておかねばなるまい。人は、古い言葉または〈時代ことば〉を思い浮かべるとき、特に時代小説を読むとき、登場するキャラクターの話し方があまり現代的でなくとも、これに納得するであろう。例えば、日本語では、「拙者」や「でござる」の組み合わせは、時代劇の〈武士ことば〉としてよく使用されるものの、スウェーデン語話者であれば、スウェーデン語の〈武士ことば〉等は、自然に思い浮かべることが出来ない。例えば、人称代名詞の豊富な日本語では特定のキャラクターを表わすことは容易であるが、スウェーデン語では単複数形の一人称代名詞 *jag/vi* しかなく、人称代名詞で特定のキャラクターを表わすことは難しい。そのため、日本語とスウェーデン語の作品から翻訳された〈時代ことば〉や古い英語から日本語とスウェーデン語に翻訳された作品は、どのように言葉が訳されているかを調べるため、さまざまなジャンルの作品における〈時代ことば〉を調査することとした。

上記の「0. 要旨」からの繰り返しとなるが、本稿では〈時代ことば〉の源泉として、聖書で現れ、〈聖書語〉と呼ばれる言葉遣いを想定した。スウェーデンでは、聖書の翻訳が複数あり、最初の翻訳は1526年の新約聖書であるが、グスタフ・ヴァサ聖書という全聖書は1541年に刊行された。グスタフ・ヴァサ聖書が刊行された当時にも古語的な言語で記された。その後に訳

された聖書は言葉の綴り方の改め以外、ほぼ変わらなかったため、1541年の聖書は、実際に1917年まで使用され続けた。スウェーデンの多くの人々は、毎週日曜日に教会に行き、学校でこの聖書を学んでいるため、聖書独自の表現をよく知っている。それゆえ、この言葉が他ジャンルの作品（以下に述べる作品等）の、特に〈時代ことば〉に対する影響力も相当強かったと予測される。そこで、他ジャンルの作品は、広く読まれた聖書にどの程度に影響されているかを明らかにしたいと考える。

また、日本聖書としては、『文語訳 新約聖書 詩篇付』（2014）を用いる。本訳の底本は、1917年に刊行された『改訳 新約聖書』と1888年の『旧約全書』の改訂版であり³、1955年までによく普及された影響により、〈神様語〉として知られる役割語が現在にも広く認識されている。〈神様語〉として、人称代名詞「われ」と「なんじ」の併用や「たまえ」の命令形等が取り上げられ、この役割語を知る人は少なくはないと考える。スウェーデン聖書のように日本の聖書も他作品の言葉遣いに影響力が強いと考えられる。

続いて、スウェーデンの聖書で使用されている言葉と、当時出版されたスウェーデンのストリンドベリの自然主義作品と位置づけられる『赤い部屋』（1879）の登場人物が使用する言葉を比較する。当時のスウェーデンの社会で使用された言葉遣いを多分に用いる『赤い部屋』は、聖書特有の〈時代ことば〉を特定するために適切な比較作品になると考えられるからである。さらに、『赤い部屋』は現代スウェーデン語に起源を持つものの、現代から見れば、古風的な言葉遣いも見られる。現代スウェーデン語との相違点を示すため、自然主義小説の『赤い部屋』と厳粛な言語の豊かなストリンドベリの劇『父』（1887）、『令嬢と召使』（1888）や *Ett Drömspel*（『夢の劇』）（1901）の言語と比較する。

また、スウェーデン聖書（カール12世の聖書）は、1526年から1917年まで使われたため、恐らく1900年代の当時の人にとって最も時代外れの言語を使った聖書だったと考えられる。この時代外れの言語は、聖書以外の作品に使用されたかを調べる必要があると考える。Teleman（2007:106）は、カール12世聖書を当時の1900年代の劇と比較し、劇は厳粛なスウェーデン語を用いる傾向があったが、20世紀後半では劇の言語をはじめ、厳粛なスウェーデン語で行われた説教、公演やスピーチの言葉遣いも使わなくなっていたと述べる。以上、取り上げたストリンドベリの劇には厳粛な〈時代ことば〉がどのように表現されるかを論じ、聖書の言葉と共通点があるかを確かめる。

古い作品のみならず、〈時代ことば〉が著しく現れるのは、やはり現代作品で使われる時であるため、〈時代ことば〉が用いられる現代作品としては村上春樹の小説を調査対象とした。村上春樹の小説『海辺のカフカ』、『1Q84』や『騎士団長殺し』の舞台は現代日本であるものの、古めかしいまたは奇妙な話し方をするキャラクターの出現が多い。現代設定での古めかしい要素や奇妙な言葉遣いは、どのようにスウェーデン語に翻訳されているかを検討する。その目的は、翻訳者がこのような日本語の〈時代ことば〉、または古い言語の要素を見たとき、スウェーデン語にどのように訳し、スウェーデン語の〈時代ことば〉に対してどのような概念を抱いているかを確認するためである。村上春樹作品のスウェーデン語版の〈時代ことば〉は聖書の言葉に影響されていると予測されるが、言語のバリエーションが遥かに勝っている日本語では必ずしもそうではないと考えられる。なぜなら、日本では聖書以外、『平家物語』の軍記物や江戸時代の文楽等の豊富な〈時代ことば〉を扱う資源があるからである。〈時代ことば〉はどのように翻訳されているかを調べたところで、スウェーデン語にもどのような〈時代ことば〉の役割語があるかを定める可能性があると考えている。また、日本語に翻訳されていないが、Guillou（1998）の執筆した *Vägen till Jerusalem*（『エルサレムへの道』）等という12世紀を舞台となっているスウェーデン語の騎士小説では、登場人物はどのような言葉遣いを用いるか、話し方に〈時代ことば〉が含まれているかを明確するために本小説を分析した。これによりスウェーデン語に翻訳された村上

³ 改定されたのは、明らかな誤記、誤植の個所のみである。

春樹の作品の〈時代ことば〉と共通点があるかどうかとも明白になり、役割語としての立場も強くなると考える。

最後に、日本語からスウェーデン語、及びスウェーデン語から日本語に翻訳され、〈時代ことば〉を用いる作品は、その数が多くなく、調査対象に自ずと制限がある。その制限の問題をクリアするため、世界中に高く評判され、近現代にわたって多くの翻訳者によって日本語とスウェーデン語に訳されるシェイクスピア劇の『ハムレット』（1603）と『リア王』（1608）の〈時代ことば〉を分析した。宗教や聖書の言葉からの影響を見られるシェイクスピアの『ハムレット』と『リア王』はスウェーデン語版の Hagberg 訳では、特に文体で聖書から強い影響を受けており、日本語訳でも「祈り」や神への呼びかけでは聖書の文語訳からの影響を示すため、聖書の言葉を源泉とする本研究にとって適切な作品だと考えている。

しかし、聖書の言葉のみならず、シェイクスピア劇では王様キャラクターは大きな役割を担うことが多く、それだけに日本語訳にもスウェーデン語訳にも〈時代ことば〉の一つである〈王様ことば〉の役割語が見られる。どのような〈王様ことば〉があるかを明らかにするため、原文におけるシェイクスピア劇の近現代における日典訳の〈王様ことば〉が、それぞれの言語でどのように翻訳されるのか、特にどのような人称代名詞の使用傾向があるかを分析した。

第3章 調査結果

本節では、以上に取り上げた対象作品を分析し、特に原文から目的語に翻訳された作品にはどのような特徴が見られるかを示す。本研究の目的の一つは、スウェーデン語ではどのような役割語があるかを明らかにすることであり、特に日本語と同じように、スウェーデン語にも〈時代ことば〉が存在するかを調査する。〈時代ことば〉は20世紀初期の文献で使用され、特に聖書で見ることが出来ると考えられる。この〈時代ことば〉がどのようなものであるかを示す前に、当時のスウェーデン語との相違点を明確にするため、まずは、現代スウェーデン語に起源を持ち、1879年に出版されたストリンドベリの『赤い部屋』のスウェーデン語と翻訳版の日本語で使われる言葉を確認する。本作品で見られる要素は、スウェーデン語に翻訳された村上春樹の2002年の『海辺のカフカ』にも多用されるため、近代と現代スウェーデン語の比較対照として取り上げる。さらに、原文における『海辺のカフカ』は新潮社より2002年に刊行されたが、本稿では2005年の新潮文庫のものをを用いる。

1. スウェーデン語の起源となる『赤い部屋』におけるスウェーデン語と日本語

1. 1. 先行研究

前述のように、役割語は、金水（2003:205）によって以下のように定義されている。

ある特定の言葉づかい（語彙・文法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

具体的にいえば、役割語は主にフィクションの中で出てくるキャラクターのステレオタイプの言葉遣いである。例えば、博士キャラクターが現れたら「わしは...じゃ」、武士キャラクターは「拙者は...でござる」のような一人称代名詞や断定の文末表現を用いる。このような言語は日本の小説、漫画やアニメでは豊富であり、非常に発達している。また、日本のフィクション作品で出て来るキャラクターは、用いる一人称代名詞によって性格や話し方が変わるため、人称代名詞とキャラクターの結び付きが強いと考えられる。例えば、前述の一人称「わし」は「老人」や「博士キャラクター」に使用され、年配者のキャラクターと強い結びつきがある。そして「僕」は「弱虫キャラクター」や「知的キャラクター」に使用されることが多いのに対し、よりタフなキャラクターや「非知的キャラクター」は「俺」を使い、武士キャラクターは「拙者」を用いる。日本語とスウェーデン語の一人称の数の差を示すため、以下の表1にさまざまな日本語とスウェーデン語の一人称をまとめた。

表1 一人称代名詞の用例（単数）

一人称	日本語	スウェーデン語
	金水（2014）	
	あたい、あたくし、あつし、うち、おいどん、おいら、己、おら、拙者、某、僕、麿、身共、我輩、わし、わたくし、わちき、わて、妾、我	jag (mig, min, mitt) (単)、vi (oss, vår) (複)
	その他	
	^{わたし} 私、俺、余、 ^{ごはい} 吾輩、 ^{だいこう} 吾人、乃公、此方人（等）、朕、此方、手前、不肖、我党、わい、わたい、小生、拙僧、 ^{やつがれ} 僕、 ^{わなみ} 我儕	

日本語では、容易にキャラクターと一人称を結びつけることが出来るものの、表1で分かるように、スウェーデン語では困難である。また、一人称の *jag* と複数形 *vi* の一つしかないが、文法上の異形の *mig* (目的語) や *min* (所有格) もある。スウェーデン語では、キャラクターと一人称の結びつきが比較的に弱いため、別の言葉を分析しなければなるまい。そこで、本節では敬語の観点から日本語とスウェーデン語の役割語に関する調査を行なった。

日本では、敬語が非常に発達しており、「だ体」「ます体」「でございます体」が使われている。現代のスウェーデン語では、日本語のような敬語と呼べるものが存在しない。しかし例外もあり、その一つは二人称代名詞の複数形 *ni* である。現代スウェーデン語では *ni* が敬語としてあまり使われていないため、スウェーデン人は主に単数形の二人称代名詞 *du* を用いる。スウェーデン語では複数形二人称 *ni* を単数形として使うと、丁寧な呼称となるものの、基本的にスウェーデンの王家のみに必ず *ni* の二人称や「陛下」のような呼称を用いなければならず、非丁寧な *du* を使ってはいけない。

続いて、現代のスウェーデン語では、二人称代名詞として単数形の *du* または、複数形の *ni* を用いる。しかし、1960 年代の終わりから始まった「あなた改革」(スウェーデン語では *du-reformen* と呼ぶ) 以前には、その後のものとは異なる呼称に関する理解があった。この改革によって、人々は階層や関係を問わず、他人に二人称代名詞 *du* を使うことが可能となった。Teleman (2007) によると、「あなた改革」の前に、同輩および、目上の人に対して、話し相手の苗字か地位を用いるのが最も相応しかったと述べる。さらに、目上の者に対して苗字と地位を合わせ、使用しなかった場合、これが失礼と見なされた。また、他人に対して礼儀や距離を示す方法として、相手に対して動詞の受身形を使うのも可能であった⁴。他人の地位が不明な場合では、会話の始まりに相手の名前に「～さん」が付けられ、*herr* (既婚/未婚男性を問わず)、*fru* (既婚女性) か *fröken* (未婚女性) が使われた。また、人と直接に会話をしているにもかかわらず、話し相手を三人称で呼ぶのが好ましかった。1900 年から、三人称制度を複数形の二人称代名詞 *ni* と交換する試みがあったものの、*ni* は結局目下の者に使用された。そして、目上は目下と話した際に、三人称代名詞の *han/hon* (彼/彼女) を使うことも多かった。

また、19 世紀では、単数形の二人称 *du* は、夫婦、カップルや友人のような親しい間柄の間にのみ使用された。話し相手は、家族の間では、呼称として「お母さん」「お父さん」や「お兄さん」で呼び合う制度があったようである。プライベートな際に、同じ階級の男性はお互いのことを苗字で呼び合い、女性はお互いのことを下の名前で呼んだ。しかし、女性は、男性より年上であったなら、男性を苗字で呼ぶことが許されたそうである。そして、目上は、目下に話しかけた際に、苗字か下の名前のどちらを使っても良かったものの、目下の者に対してでも *du* が使用されなかった。一般人の間で非丁寧な *du* 使用がより広まったのは、新聞が *du* の使用頻度を上げたからであり、1960 年代の「あなた改革」にともなって地位の呼び方が少なくなった。その後、相手へどのように話しかけるかをめぐって混乱が暫く起こったものの、結局より使いやすい *du* が一般的な使い方となった。「あなた改革」以前の人称代名詞の使用をまとめると以下のようになる。

- ▶ 同階級の男性→苗字
- ▶ 同階級の女性→下の名前
- ▶ 目上の人に対して→苗字と地位
- ▶ 目下の人に対して→三人称代名詞の *han/hon* (彼/彼女)
- ▶ 地位が不明な場合→「～さん」(*herr, fru, fröken*) または、三人称の「彼/彼女」(*han/hon*)
- ▶ 夫婦、カップルや友人の間→単数形の二人称 *du*
- ▶ 家族→「お母さん」「お父さん」「お兄さん」など

⁴ 礼儀を示したいとき、たとえば「コーヒーを飲みますか」ではなく「(彼/彼女は) コーヒーは飲まれますか」の言い方を用いた。

- ▶ 年上の女性から年下の男性に対して→苗字
- ▶ 目上から目下に対して→苗字か下の名前、複数形の二人称 *ni*

現代スウェーデン語では、以上の古い制度と様々な相違点がある。例えば、男女や年齢を問わず、人は一般的に非丁寧な二人称 *du* で呼び合ったり、下の名前呼び合ったりする傾向がある。そして、特に工場等で働く男性は、苗字で呼び合うこともある。相手を地位で呼ぶことは全くないとは言えないものの、使用は少し限られている。人は地位や「～さん」で呼び合う用例として政治会議が取り上げられる。そこでは首相等は「首相 (*statsminister*)」や「首相さん (*herr statsminister*)」と呼ばれている。

本節では調査の観点として、以上に述べた 20 世紀初期の古い呼称制度が「あなた改革」の前後でどのように使用されていたか、また、これらの人称代名詞を用いたキャラクターはどのような日本語が与えられ、原文の日本語で敬語を多用するキャラクターは、どのようなスウェーデン語が用いられるか分析する。後の節ではこのスウェーデン語を同時時代出版された聖書や劇のスウェーデン語と日本語で比較する。

1. 2. 『赤い部屋』の調査結果

上記の古い敬語制度を用いるキャラクターは『赤い部屋』では多く現われる。最初に調査したキャラクターは『赤い部屋』のファルク (典: *Falk*) という主人公の話し方である。ファルクは、二十年代後半の男性であり、『赤い部屋』は彼が役人をやめた時から始まる。ファルクは作家になりたい男である。このような彼が作家になる方法を知りあいのストルーベ (典: *Struve*) という男性へ相談しに行く。ストルーベは新聞会社で働いており、彼の年齢は不明であるが、作品内のファルクの描写によると「29 歳から 45 歳に見える」ため、ファルクより年上だと考えられる。ファルクのストルーベに対する台詞は以下のとおりである。

- (1) -I er egenskap av medarbetare i den frisinnade Rödluan är det som jag sökt er. (p.24)
- (2) Inte ett ögonblick; klockan slutade just att ringa sju. Jag tackar er för att ni var god och kom, ty jag måste erkänna att detta möte är av största vikt för mig; det gäller snart sagt min framtid herr Struve. (p.20)
- (3) -För det första måste jag bedja er icke vidare titulera mig häradshövding, upptog den unge herren samtalet, ty det har jag aldrig varit, utan endast extra ordinarie notarie, och detta senare har jag med i dag upphört att vara och är endast Herr Falk. (p.22)

用例 (1-3) の下線部で見られるように、ファルクは、単数形として複数形二人称代名詞 *ni* とその所有格の *er* を多用する。*Ni* は丁寧な言い方として市民階級に属する同輩間または、目上から目下に対して使用することが多かったが、目下は目上に *ni* を用いれば、失礼な言い方として見なされた。また、『赤い部屋』が出版された 1879 年の当時では、単数形として使う *ni* の人称は、上層階級の典型的な使い方であったと考えられる⁵。

続いて、ファルクは (2) で発言する *herr Struve* は「ストルーベさん」という意味であり、「～さん」(タイトルも)の使用は市民階級の会話の始まりのみに使われ、一旦使われると、*ni* か苗字などが代わりに用いられた。目下から目上に対して、このような省略は不可能であり、目下は目上のタイトルか「～さん」を使わなければならなかった。また、用例 (3) では、ファルクは自分のことを「判事補殿」(*häradshövding*) と呼ばないようにストルーベに頼み、日本語版

⁵Andersson (2012) によると、1930 年に *ni* を下層階級に広める試みもあったが、*ni* は尊大な言い方だと思われ、「権力者の印」の悪い印象を持ったため、広まらなかったという。

では「ただのファルクなんです」を呼ぶように頼んでいる。しかし、(3)の原文では *Herr Falk* (ファルクさん) と述べ、自分とストルーベの間の距離感を示している。

ファルクの話し方をまとめると、このような話し方は、Teleman (2007) が述べたような 1900 年代の市民の上層階級の話し方の代表的なものということになるか。上層階級の間で複数形の *ni/er* (あなたたち) を単数として使うのは、丁寧であったが、下層階級にとっては尊大な印象があった。また、ファルクは、ストルーベに「判事補殿」で呼ばれることによってキャラクターの上下関係が明らかとなり、単数形として *ni/er* や敬称 *herr* の呼び合いによって、親密な友人関係ではないことが分かる。より距離感の近い用例として、ファルクは自分の兄に対して二人称 *du* を用いており、ここから前述したように *du* が親しい者の間でのみ使用されたことが窺い知れよう。

ファルクの話し方は丁寧で、話し相手と距離感を置いていることも日本語版の翻訳では反映されている。以下の用例 (4) から (7) までは、ファルクによる敬語の多用が見られる。

(4) —自由な気風のレドルーバン新聞でのあなた方ジャーナリストの性格の中にあるもの、それが私が求めていたものなんです。(p. 24)

(5) —いえ、ほんのちょっとです。たった今、七時の鐘が鳴ったところですから。よくいらっしやいました。ストルーベさん、今日お会いしたことは私にとって、一番重要なことのひとつで、早くいえば私の将来にかかわるものだと考えています。(p. 20)

(6) —色々お話を伺いたいので、もし差し支えありませんでしたら、外で座ってお湯割りでも飲みましょう。(p. 20)

(7) —まず第一に、これから私のことを判事補殿なんて呼ばないように頼みますよ。私は判事補でもなんでもない、臨時雇いのただの書記に過ぎなかったのですし、それに今日はそれもやめて、ただのファルクなんです。(p. 22)

ファルクは、(4) と (7) の下線部で分かるように「なん/のです」の文末表現を多用し、用例 (7) の「頼みます」のような「ます体」も用いる。しかし、ファルクの話し方で最も特徴的なものは敬語の多用である。『赤い部屋』の日本語版では、ファルクは敬語動詞を多用し、

(5) の下線部では「いらっしやいました」と「お会いした」を使い、(6) では「伺いたい」の敬語動詞の使用も見られる。これらの敬語は、原文の *ni/er* 二人称の使用と同じく、話し相手との距離感を置いていると考える。

ファルクと話し相手のストルーベは、市民の上層階級に属している。その階級の中で (2) のあいさつの場面で見えるような「～さん」(*herr* 等) の敬称が多用されたのである。前述のようにストルーベは、ファルクに挨拶する際に、ファルクを「判事補殿」と呼び、当時では「～さん」や「タイトル」が一旦使用されると、市民階級に属する者は便宜のため、何回も繰り返さないように敬称を省略することが多かった。敬称を省略した後、苗字または、二人称代名詞か「兄弟」(*bror*) で呼ぶのは可能であった。そこで、日本語版のストルーベはファルクに対して年下に使うことが多い二人称「君」を用いるものの、ファルクはより丁寧な「あなた」を用いる。一人称代名詞としてファルクも、ストルーベも中立的な「私⁶」を使う。興味深いのは、ファルクは距離感を示す表現をストルーベに対して使うが、ストルーベは逆に相当親しい間柄を表すかのような表現を用いる点である。例えば、原文のストルーベ (8) は非丁寧な *du* をよく使い、*du* は前述の「君」に訳されている。さらに、ファルクは実の兄に *du* と言われるが、この *du* は例外的に「お前」に翻訳されており、『赤い部屋』では *du* は親しいキャラクターの間で主に「君」に訳

⁶ 振り仮名がないため、「わたし」か「わたくし」を用いるかは不明である。また、ファルクは、目下の者と話す際、「ぼく」使用の 1 例がある。

されている。従って、日本語版で該当する言葉はないものの、ファルクとストルーベは、用例 (9) と (10) のように *bror* で呼び合うこともある。直訳すれば、*bror* は「兄/弟」という意味であるが、日本語に訳せば「兄貴/兄弟」のような雰囲気という言葉である。前述通り、*bror* は当時の親しい上層階級男性の間で使われた〈男ことば〉であり、*bror* で呼び合うことは「兄弟の杯」(*bror-skål*) と呼ばれる。具体的にいえば、*bror* を呼び合うことで、話し相手の肩書きや敬称を使わなくてもいいことを祝った。しかし、日本語版では *bror* に相当する言葉が見られない。それゆえ、これが訳されていないのは日本語で少し不自然な文章となる可能性があったためと考えられる。西洋語（スウェーデン語等）のでは、同じ文章の中でより多くの人称代名詞を使う傾向があるが、日本語では人称代名詞の使用が比較的少ない。シュナイダー（1970:5）によると、文化における強調点が異なり、西洋では個人を強調し、日本では人間関係を強調していることに根ざしているのではないかと述べる。例えば、用例 (10) のスウェーデン語の文章では、六つの人称代名詞が見られるのに対し、日本語文章では一つしか使われていない。日本語では人称代名詞の代りに (10) の「お話した」のような話し手とその聞き手との関係を示す敬語が使われている。

(8) -Var du i det verket? (p. 34)

—君はあの役所にいたのかね。 (p. 35)

(9) -Kära bror, du har icke lärt dig livets konst ännu: du skall se huru svårt det är att få ett bröd först, och se huru småningom det blir livets huvudsak. (p. 70)

—ウン、君はまだ人生の行き方を学んでいない。君はまず第一に、パンを得ることがいかに難しいものであるか、そしてそれが少しずつ人生の主な関心事になっていくのが判るだろう。 (p. 71)

(10) -Jag nämnde nyss för bror, upptog Falk samtalet, att jag idag brutit med mitt förra och övergivit ämbetsmannabanan; nu vill jag blott tillägga att jag ämnar bli litteratör! (p. 28)

—さっきもお話したのですが、私は今日、今までの役人も職をやめました。実は作家になりたいのです! (p. 29)

最後に、知的なキャラクターのファルクに対して、少し乱暴な発言をする主計官がいる。ファルクは、仕事を探すために役所に行き、役所の上司である主計官と会話する。主計官は、会話で以下の (11) のような発言をする。日本語訳の主計官は〈上司語〉的な話し方をし、二人称として「君」、命令形「たまえ」や連語終助詞の「かね」を用いる。そして、敬語ではなく、「のだ」や「なんだって」の常体を用いる。なぜこのように翻訳されているかといえば、原文にも上司的または乱暴な言葉遣いをするからと考えられる。原文では、実際に二人称を使わないものの、冠詞が付き、*herrn* という「旦那」を意味している言葉を用いる。主計官の話し方には、山口（2007）が述べた通常の綴り方から外れる「視覚方言」を見られ、*herrn* は通常 *herre(n)* と記す。主計官が使う「視覚方言」は、通常より非丁寧な言い方だと考えられる。また、*Vaffa-en*（通常 *vad fan*）という失礼な罵り言葉も多用し、恐らく終助詞「かね」に翻訳されたのであろう。さらに、非知的キャラクターが多用する *va* という間投詞の使用も現れる。この *va* は *vad* から省略され、話し言葉に限って用いられる語である。命令形 *ut* は、〈上司語〉の「たまえ」に翻訳され、直訳すれば「外へ」という意味になり、命令形として *ut* は基本的に *gå*（「行く」や「歩く」等の「移動する」の意を持つ動詞）と共に *gå ut*（「外に出る」）のように併用される。主計官は省略形を用いるので、更に命令的な印象を与えるため、「たまえ」に翻訳されたと考えられる。主計官の発言で分かるように、日本語でもスウェーデン語でも、ファルクの礼儀正しい話し方と相当対立していることが分かる。日本語の役割語ほどではないが、ファルクの標準

語綴りの発話は、主計官の非標準語綴りの発話と対照的であり、日本語のような異なるキャラクターを表わす人称代名詞がなくとも、これらのキャラクターの発話を判別できる。

- (11) "Vaffa-en menar herrn? Vaffa-en vill herrn i mitt rum! Får jag inte vara i fred i mitt eget rum? Va!? Ut, ut, ut, herre! Vaffa-en ser herrn inte att jag är upptagen! Tala vid protonotarien om herrn vill något! Inte vid mig!"
君は何をいいたいのかね!君は私の部屋で何をしたいのかね!私は自分の部屋で静かにしたいのだ。なんだって!出ていきたまえ!私がいそがしいのが判らないのかね!何か言いたいことがあるなら、主書記局で言いたまえ!私では駄目だ! (p. 56)

1. 3. 『海辺のカフカ』の調査結果

以上の 1900 年代の『赤い部屋』で描写される敬語は、現代のスウェーデン語と比べてどのようなものであるかを示すため、村上春樹の『海辺のカフカ』で出て来るナカタという男性キャラクターの話し方と比較した。

ナカタは、『海辺のカフカ』の一人の主人公であり、子供の頃にあった事故の所為で、記憶を失い、知的障害を抱えている。そして、事故が起こってから、猫と会話ができるようになった。ナカタは、老人であり、話し方の大きな特徴として多くの敬語を用い、一般人より敬語を多用するとも考えられる。一人称として自分の名前「ナカタ」を使う。原文のナカタは、必ず話し相手の名前に「～さん」をつけ、話し相手は非生物の石にせよ、動物にせよ、「～さん」を用いる。

スウェーデン語版のナカタの分析に入る前に、まず原文における特徴的な台詞を取り上げる。以下の用例 (12) と (13) はナカタの代表的な台詞である。用例 (12) では、ナカタは「オオツカ」という猫と会話し、猫探し中のため、探している猫の行方についてオオツカに尋ねている。用例 (13) では、ナカタは、友人のホシノというトラック運転手の若い男性と会話している。

- (12) 「ほんとうにありがとうございました。オオツカさんのご意見はナカタにはまことに貴重なものでありました。どうかつつがなくお元気でお過ごしてください」 (K1-108-7)
- (13) 「はい。申し訳ありませんでした。しかしホシノさんは痛いのは平気だとおっしゃったものですから、それで、ナカタは力の限り思い切りやりました」 (K2-53-6)

ナカタの話し相手は、オオツカのような赤の他人にせよ、友人のホシノにせよ敬語を使う。

(12) のオオツカに対して「ご意見」や「お元気でお過ごしてください」を用い、(13) の友人であるホシノに対してでも「申し訳ありませんでした」や「おっしゃった」の敬語を使う。他人や友人を問わず、ナカタは、常に敬語を使う点が、前述の日本語版におけるファルクがストルーベに対して使った言葉遣いに似ている。また、ナカタは、ファルクのように「です/ます体」を用いる。ナカタとファルクの相違点は、ナカタが非知的キャラクターであり、難しい言葉をあまり理解できないのに対し、ファルクは、知的キャラクターであり、ナカタが分からなさそうな言葉を用いることが出来る点である⁷。

⁷ ナカタが分からない言葉は、カタカナで表されており、会社名や地位の意味を分からないことが多い。以下の①はその用例の一つであり、ナカタは父と兄弟の仕事について話している。②の下線部で見られるように、ファルクはより複雑な言葉に苦労しない。

① (中略) とくにナカタのお父さんは、もうとつくなりなくなりましたが、大学のえらい先生でありまして、キンユウロンというものを専門にしておりました。それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。一人はイトウチュウというところでブチョウをしておりますし、もう一人はツウサンショウというところで働いております。二人とも大きな家に住んで、ウナギを食べております。ナカタひとりだけが頭が悪いのです。 (K1-96-13)

② (中略) 何か仕事をしている人をみかけたことはありませんでした。酒造協同組合とか、課税事務局とか、公

スウェーデン語版のナカタの丁寧な話し方は、どのように翻訳されているかを以下に示す。以下の用例 (14) と (15) は、(12) と (13) の翻訳文である。

(14) Tack så hemskt mycket. Nakata sätter verkligen värde på era åsikter, herr Otsuka. Jag hoppas att ni får leva och ha hälsan länge. (K-60-5)

(15) Jag är verkligen ledsen, men du sa faktiskt att du var smärttålig och därför tryckte Nakata till allt vad han orkade. (K-286-23)

原文と同じく、スウェーデン語版のナカタも一般人より敬語を多用することが分かる。用例 (14) で見られるように、ナカタは、話し相手の名前に「～さん」に相当する敬称 *herr* をつけるものの、省略することではなく、会話が続けている間ずっと用いるため、話し方は非常に丁寧と分かる。また、下線部で見られるようにナカタは単数形として複数形の二人称 *ni/er* を多用する。本稿の執筆者は、『海辺のカフカ』の翻訳者の一人の Yukiko Duke 氏とのやりとりで、ナカタの話し方を翻訳した際に、どのような趣旨を持って訳したかを伺ったさい、Duke 氏は、以下のように答えてくださった。

(中略) 母と私は、作品を翻訳する際に、できるだけ原文に近い言語に翻訳する。(その所為で、英語版を読んだけど、日本語が話せない方から批判をうけた。スウェーデン語版は、英語版のようにヒップではないから。しかし、日本語話者は、スウェーデン語版は原文に近いと思っている。村上は、アメリカ人が翻訳するようにクールではない。)(中略)

ナカタは、少し古めかしい言葉遣いを用いるが、それは彼の丁寧な話し方の奇妙さに注目するためである。ナカタの話し方の古めかしさ以外、スウェーデン語の新しい敬語を作らず、翻訳した⁸。

ナカタの話し方は少し「古めかしい」と翻訳者が述べていることから、ナカタの敬語の古い要素は、1900年代の『赤い部屋』で用いられるようなスウェーデン語に似ていると考えられるか。なお、現代スウェーデン語で丁寧な二人称 *ni/er* や敬称 *herr/fru* 等の敬語はナカタの使うような頻度では用いられない。

また、『海辺のカフカ』の原文におけるナカタは、誰にでも敬語を用いており、(13) で取り上げたナカタの友人であるホシノに対しても非常に丁寧である。翻訳版のナカタも基本的には誰にでも敬語を使うものの、ホシノとの会話のみ例外である。ナカタは、(15) の下線部のように非丁寧な単数形二人称代名詞 *du* を用い、ナカタの話し方には古めかしい要素があるならば、前述通りに 19 世紀では、単数形の二人称 *du* は、夫婦、カップルや友人の間のみ使用されたため、この二人称はナカタとホシノの親しい関係を示すために使用されていたと考えることができる。さらに、(15) のような *du* 使用は、現代スウェーデン人の一般的に呼び合う二人称代名詞であり、ナカタが多用する *ni* や *herr* 等は比較的あまり使用されていないことが知られる。

かつて、執筆者は、金水 (2018) が担当した『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (1)』において、スウェーデン語版では、ナカタはホシノのみに敬称 *herr* (「～さん」) を用いず、敬称の省略は彼らの友人関係を示すと指摘したことがある。翻訳者は *du* の使用と *herr* の省略で、ナ

務員年金監督署」というような、頼りになる役所にいたにもかかわらずですよ。(中略)

(p. 32)

⁸ 原文は、以下のようである。

Mamma och jag har förhållningssättet att vi översätter så nära originalet som möjligt.

(Därför har vi också fått en del kritik av icke-japanskspråkiga som har läst de engelska översättningarna och menar att de inte är lika "hippa". Japanskspråkiga däremot menar att vi ligger nära originalet, Murakami är ju inte så cool som amerikanerna har gjort honom till.)

Nakata har lite ålderdomliga ordvändningar ibland för att markera att han pratar artigt på ett lite märkligt sätt. Annars har vi översatt utan att försöka hitta på något svenskt keigo.

カタとホシノの友人関係を示しており、日本の役割語のように、スウェーデン語にも話し相手が変わることによって人称代名詞も変わり、キャラクターの関係を示すことができる。また、Andersson（2012）によると、逆に *ni* の使用によってキャラクターの間の距離を示すことが出来ると述べる。Andersson 氏は、1997 年の『太陽の下の人間』⁹という劇の二人称代名詞の使用を調査し、本劇に出現するキャラクターはお互いのことを非丁寧な二人称 *du* で呼び合っているものの、人にあまり好かれていない年上の女性に対して距離感を示すために、二人称 *ni* と敬称 *fru* の使用で年上の女性を遠ざけようとしている。

1. 4. 第1節のまとめ

本節の目的は、19 世紀末～20 世紀初期のスウェーデン語を紹介し、当時の言語を紹介するため、ストリンダベリの『赤い部屋』（1879）を使用した。そして、比較作品として、スウェーデン語にも翻訳された村上春樹の『海辺のカフカ』（2002）を用いた。『赤い部屋』と『海辺のカフカ』の日本語とスウェーデン語を比較し、扱った作品の中では、どのような敬語が使用されていたかを分析した。特徴的に使われた言葉遣いは以下の表 2 でまとめ、明らかになった点の具体的な説明は、以下の点で取り上げる。

表 2 『赤い部屋』と『海辺のカフカ』のまとめ

	スウェーデン語		日本語		備考
	赤い部屋	海辺のカフカ	赤い部屋	海辺のカフカ	
人称	<i>ni/er</i>	<i>ni/er</i>	あなた	あなた	
	<i>du</i>	<i>du</i>	君/おまえ	N/A	
呼称	<i>herr (herrn)</i>	<i>herr/fru/fröken</i>	さん、殿	さん	「君」に訳された <i>herrn</i> の非丁寧な使用もあった。
	<i>bror, häradshövding</i>	N/A	N/A、判事補	N/A	『赤い部屋』の日本語訳では <i>bror</i> に該当する言葉がない。
敬語（動詞）	N/A	N/A	伺いたい、お会いした等	お過ごし、おっしゃった等	スウェーデン語では尊敬語や謙譲語と呼べる動詞は特にない。

- 日本語版の『赤い部屋』の主人公ファルクは、多くの敬語動詞を使用し、話し相手のストルーベに対して「～さん」を一回用い、丁寧な二人称代名詞「あなた」を使用する。
- 原文のファルクも、ストルーベに一回のみ敬称 *herr* を用いる。しかし、ファルクの敬語は敬語動詞によって表されておらず、主に単数形として使用される二人称代名詞の複数形 *ni/er* は代表的な敬語となっている。会話中に敬称と肩書きを一回使用してから、*ni/er* を用いることは、上層階級の典型的な使い方であった。そして、*bror*（兄貴/兄弟）で呼び合うことも可能であり、*bror* は当時の親しい上層階級男性の間で使われた〈男ことば〉であった。*Bror* を使い始めたこととは「兄弟の杯」(*bror-skål*) と呼び、具体的にいえば、*bror* を呼び合うことで、もう話し相手のタイトルや敬称を使わなくてもいいことを祝った。しかし、現代スウェーデン語では *bror* はこのように使われておらず、二人称代名詞 *ni/er* を単数丁寧形として使うことも少ない。
- 原文では『海辺のカフカ』の一人の主人公のナカタは、赤の他人や友人を問わず、誰にでも敬語を多用することが分かる。原文のナカタは一般人より敬語を用いると考えら

⁹原文のタイトルは *Människor i solen* である。

れ、スウェーデン語訳の敬語使用は二人称 *ni/er* や敬称 *herr* の多用で反映される。

- ナカタは、ファルクと同じく、人の名前に敬称として *herr* をつけるものの、省略せず、会話が続けている間、これを用い続けている。あまり敬称を使わない現代スウェーデン語としてこの使用は不思議な言葉遣いであると考えられる。また、ナカタも単数として複数形の *ni/er* を誰に対してでも用い、敬称の使用と同じく少し異なる言語感覚だと考えられる。ナカタは例外的にホシノのみに敬称を省略し、単数形の二人称 *du* を使用するが、これは二人の友人関係を表すためであると考えられる。しかし、原文にはこのような親しい言葉遣いが見られない。そこで、スウェーデン語にも人称代名詞の使用によって僅かな範囲でキャラクターの関係を示すことができる。

2. 聖書におけるスウェーデン語と日本語

本研究の主なテーマは、スウェーデン語では、日本語のような役割語が存在しているかどうかを調べるのが一つの目的である。役割語の有無を調べるため、特徴的な言語を使う日本とスウェーデンの聖書の〈時代ことば〉を調査することにした。日本のキリスト教における聖書の特別な言葉遣いの用例として人称代名詞「われ」と「汝」の語彙が挙げられる。これらの人称代名詞は、日本の聖書以外、漫画等のポップカルチャーにも使用されることが多く、さまざまなジャンルに広く使われている。しかし、スウェーデン語にも似たような〈時代ことば〉の種類があるのだろうか。例えば、スウェーデンの聖書は、実際に 1541 年のグスタフ・ヴァサ聖書からカール 12 世による 1703-1917 年までに使われ、翻訳された当時には既に古語的な内容であったため、同じ当時の『赤い部屋』等の他の作品と比べ、相当印象的だったと考えられる。スウェーデンの聖書では特徴的な言葉遣いがあるか、日本聖書のように他の作品にも同じような言葉遣いが広まっているかは、本節および次節で明らかにしたい。

2. 1. 先行研究

日本の聖書で使用される言葉について、藤本（2014）の「なんじ」に関する項目では、次のように記されている。「なんじ」は話し相手を指し示す二人称代名詞である。また、明治以降の二人称代名詞である「汝」は、特にキリスト教の聖書の神の言葉と結び付けて用いられることが多い。しかし、神が人に呼びかける場合に使用が限られたわけではないと述べ、神から人、人から神の互いの呼称の例も見られる。また、文語体の重々しい文章に適していたために選ばれたという当時の実態の一つを表しているとも述べ、書き言葉的な文語体との結びつきもあったようである。さらに、「なんじ」とよく併用される一人称代名詞として「われ」を取り上げられる。室町時代の古い文献の『羅葡日対訳辞書』では、ラテン語の二人称代名詞「*Tu*」は「*Nangi*」（なんぢ）として翻訳され、『日本大文典』には、「*Nangi*」に関して、「話しことばに於ける肯定第二種活用」の章では、一から三人称代名詞までが取り上げられており、「*Vare*（われ）」

「*Nangi*（汝）」「*Are*（あれ）」と記されている。そして「*Nandachi*（なんだち）」「*Nangira*（汝ら）」について次のような記述が見られる。「汝その他の者。書きことばに用ゐ、敬意は持たないで、尊大さを示す」言葉だと記されている。興味深いことに『日本大文典』の本章のタイトルは「話しことばに於ける肯定第二種活用」であるものの、以上の引用によると「なんだち（汝達）」と「汝ら」は、書き言葉に用いる尊大な言葉だとある。また、〈神様語〉の命令形として「たまえ」が見られ、藤本（2014）は「たまえ」について、「たまえ」の形にも、「与えたまえ」や「恵みたまえ」「導きたまえ」など神に対して恩恵をを求めるような、一部、尊敬の意味を残した用い方が認められると述べる。日本語では、「われ」「なんじ」と「たまえ」は〈神様語〉の主な聖三位一体となっていると考えられる。そして、他の言葉遣いとして、体言に付き、詠嘆の気持ちをこめての呼びかけを表わす「よ」という間投詞等もうかがえる。

スウェーデンの聖書の言葉の特徴について、Bergman（2013）は、さまざまな用例を取り上げる。例えば、Bergman（2013:200）はカール 12 世の聖書では、主語が複数だった場合に述語動詞（命令形等）の複数形が使用されたと述べる。20 世紀のスウェーデン語では、動詞の複数形

は、書き言葉の中でほぼ消滅していたから、〈聖書語¹⁰⁾〉に古めかしく謹厳な印象を与えたと述べる。また、複数形二人称代名詞 *I* とこの二人称に伴う動詞 *Kommen till mig, I alla som arbeten och ären betungade* について同じことが述べられ、普段の日常会話では *kommen*→*kom*、*arbeten*→*arbetar*、*ären*→*är* 等が使用され、当時の既に廃れた動詞の複数形が聖書では多用される。また、『赤い部屋』やスウェーデン語訳の『海辺のカフカ』で多く見られる複数形二人称代名詞 *ni* は 1541-1917 年の聖書で全く現れず、代わりに二人称 *I* が用いられた。そこで、Bergman 氏は *ni* について、*ni* は単語境界の誤りで、複数二人称代名詞 *I* から発生した言葉だと述べる。例えば、17 世紀では *kommen* ^{来 い あなた方} *I* のような文章があり、*kommen* の末尾字 *n* は *I* と結合し、新たな *ni* という二人称代名詞となった。*Ni* がより一般的に使われるようになったのは、18 世紀であるものの、丁寧な二人称代名詞として *I* はまだより相応しいと見なされた。1836 年の資料によると、*ni* は主に知りあいや、発話者より階級が低い者に対して使用され、親しい人に単数形二人称代名詞 *du* と単数形として用いられた複数二人称代名詞 *I* が使われた。このような人称代名詞の上下関係の制度は聖書の中でほぼ見られないため、登場人物の発言はより親密に感じる。また、20 世紀に二人称代名詞 *I* 等は、ほぼ聖書の専用言葉として使われ、日常会話ではあまり用いられなかったため、役割語度が高い言葉だと考えられる。また、スウェーデン聖書では二人称 *I* 以外、日本聖書のように他の特徴的な言葉遣いもあるため、これがどのようなものであるかを本節の調査結果で取り上げたいと考える。

2. 1. 1. 日本聖書の歴史

本節で取り扱う『文語訳 新約聖書 詩篇付』の「解説」執筆者の鈴木 (2014:763) は、日本語版の聖書の歴史を次のようにまとめる。聖書の最初の日本語訳は、室町時代に見られ、イエズス会宣教師バレット (1590 年来日) の遺した「バレット写本」には、四福音書の約三分の一の訳文が認められると述べる。そして、日本聖書協会のウェブサイトの「キリシタン時代の初期の聖書」¹¹⁾の欄では、聖書の和訳史について、日本における聖書の歴史は、1549 年にフランシスコ・ザビエル (1506-1552) が初めて鹿児島に上陸した際に持って来た日本語に訳された「マタイ福音書」に始まると言われているものの、現在記録は残っていないと記されている。

また、プロテスタントによる最初の日本語訳聖書は、ドイツ生れのギュツラフにより、1837 年にシンガポールの堅夏書院から刊行された『^{ヨハネ}約翰福音之伝』と『約翰上中下書』であったと述べる。ギュツラフは、中国で伝道を行い、マカオのイギリス商務庁の中国語通訳官として在勤中、船が難破し日本に送還のため、マカオに送られて来た三人の日本人を託される。日本への伝道も志していたギュツラフは、前述の日本人から日本語を学び、同人から協力を得てから、最初の日本語訳聖書を刊行したと鈴木氏は述べる。

続いて、1859 年に C.M. ウィリアムス (アメリカ聖公会)、ヘボン (アメリカ長老教会)、S.R. ブラウン (アメリカ・オランダ改革派教会) という宣教師が来日した。いずれもアメリカ人宣教師であり、ギュツラフのように中国伝道の経験者であったと鈴木氏は述べる。また、この三人は来日したものの、日本ではキリスト教は、未だ禁制であったため、近い将来の伝道に備え、日本語の学習と聖書の日本語訳の準備を開始した。ヘボンとブラウン共訳の『新約聖書馬可伝』、

『新約聖書^{ヨハネ}約翰伝』は 1872 年に刊行された。そののち、1873 年にキリシタン禁制の高札が撤去されたことから、キリスト教の伝道は黙認されていたものと思われる。従って、宣教師会議によって設けられていた新約聖書翻訳委員会の公然とした活動が始まった。その中心人物には、ヘボンやブラウンがおり、日本人の助手として奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎がいた。訳了した部分から分冊として刊行され、新約聖書全巻の翻訳は 1879 年に完成され、翌年一冊本として刊行さ

¹⁰⁾ 日本語では〈神様語〉という表現があり、聖書以外のさまざまなジャンルに渡って使用される言葉である。しかし、スウェーデン語では聖書で使われる言葉は聖書と特に強い結びつきがあるため、本研究で〈神様語〉以外、〈聖書語〉も記すことが多い。

¹¹⁾ <https://www.bible.or.jp/known/know14.html>

れた。本訳と 1887 年に完成された旧約聖書とを合わせて「明治元訳」と称されていると鈴木（2014:764）が述べる。

翻訳は、ギリシア語の『公認本文』とも言われる *Textus Receptus* を参考としたものの、宣教師たちは、いずれも中国での伝道経験者であり、日本人協力者も漢文に通曉した識者であったことから、結果として中国で刊行されていた中国語訳聖書が大きな影響を与えたようである。鈴木（2014:765）は中国語訳からの代表例的な用例は「カミ」の訳語であると述べる。中国では「カミ」の訳語をめぐり、カトリックでは「典礼問題」が起ったものの、プロテスタントにおいても「用語問題」が生じた。結局、プロテスタントでは、委員の間で意見が分かれ、主としてアメリカ側は「神」、イギリス側は「上帝」を用いた聖書を刊行する。そこで、アメリカ人のヘボンやブラウンが参考にした中国語訳聖書は前者であったので、日本語の「元訳」は最終的に「神」となった。

また、鈴木（2014）によると、「元訳」をどのように訳すべきかのさまざまな議論があったと述べる。できるだけ平易な、誰にも読みやすい文体を主張する宣教師側がおり、聖典らしい重々しい漢文体を主張する日本人側がいたために彼等の間で対立が生じたようである。結果として、出来上がった聖書には、双方の主張の妥協が見られた。鈴木（2014:765）は用例として「^{マルコ}馬可伝福音書」14 章のイエスが捕らえられる場面を取り上げ、「逮捕の者」（51 節）の「逮捕」には「とりて」という振り仮名が付されており、漢字と振り仮名との分離があるため、漢字だけ読めば日本人側、振り仮名だけ読めば宣教師側、それぞれの主張が通った表記になる。

本節で取り扱う新約聖書は、『改訳新約聖書』であるものの、「元訳」から「改訳」への実務は、1910 年に霊南坂教会の牧師館にある小崎弘道牧師の書斎を借りて開始されたようである。鈴木（2014:771）は、改訳の特徴として、特に次の二項を挙げている。

- 一、敬語の増加とそれにとまなう代名詞の減少。本来日本文では代名詞はあまり必要でない。
- 二、歴史的現在形の使用による鮮明な表現。

試訳の『マルコ伝福音書』はある程度高い評価をもって迎えられ、学問的成果を反映した翻訳である点は当然として、「元訳」では漢語に無理な振り仮名をふった例が目立ったのに対し、それが大幅に減少し、日本文としての読みやすさが歓迎されたと鈴木氏が述べる。このようにして 1917 年に『改訳新約聖書』が刊行された。

鈴木（2014:774）は、日本聖書の「元訳」と「改訳」による相違点を示し、『マルコ伝福音書』の冒頭の第一章～三節から以下の用例を取り上げる。

「元訳」

これ神の子イエスキリストの福音の始なり 預言者の録して視よ我なんぢの面前に我使を遣さん彼なんぢの前に其道を設くべし 野に呼る人の声あり云く主の道を備へ其経すちを直せよと有が如く

「改訳」

神の子イエス・キリストの福音の始。
預言者イザヤの書に、
『見よ、我なんぢの顔の前に、わが使を遣す、彼なんぢの道を設くべし。』
荒野に呼はる者の声す「主の道を備へ、その路すちを直くせよ」
と録されたる如く

鈴木氏は、それぞれの翻訳について、「元訳」は、「仮名が本文であつて漢字の方ではない」、「振漢字はあるが振仮名は無い」と引用する。そして、それが改訳においては、

「^{かほのまへ}面前」は「^{かほ}顔の^{まへ}前」、「^{みち}其経すぢ」は「^{みち}その路すぢ」のように改めている。ほとんど振り仮名が無くても読むことができ、そのうえ簡潔でリズム感があると述べる。

「元訳」はブリッジマン・カルバートソンの中国語訳聖書によつたため、キリスト教のキーワードにあたる言葉は、そのほとんどが中国語訳聖書にならっている。また、「改訳」においても、その大半は継承されたが、独自の細かい言葉遣いも見られると鈴木（2014:775）は述べる。例えば、「改訳」では同一の「栄光」と記されている言葉が、神様に用いるときには「栄光」を、人間に対しては「光荣」として使い分けている¹²。御法川（1965）では漢訳からの影響が詳しく記されているが、人称代名詞「われ」と「なんじ」や「たまえ」に関する記述がない。御法川（1965）は、漢訳とヘボン訳を以下のように分類する。

第一類 漢訳聖書の訳語と同一のヘボン訳語……3.5%

第二類 漢訳の訓読と思われるヘボン訳語……42.2%

第三類 その他

a 漢訳の意識と思われるヘボン訳語……14.0%

b 漢訳に類似しているヘボン訳語……6.9%

c 漢訳と異なるヘボン訳語……33.4%

しかし、吉野（2019）によると、明治の聖書翻訳委員会による日本語訳新旧約聖書以前に刊行されたヘボン訳福音書は漢訳聖書に基づいて訳されたことが通説だと述べる。そして、吉野（2019）はこの通説について、詳細に訳文を検討すると、ギリシャ語原文を正文としつつ、英訳聖書に拠って訳されたものであり、漢訳聖書は日本文を整える際に利用されたに過ぎないと述べる。

続いて、聖書の口語訳について、日本聖書教会のウェブサイトの「文語訳から口語訳へ」の欄では、次のような記述がある。1950年ごろになると戦後の現代かなづかい、当用漢字の制定などによる国語の変化や聖書学の急速な進歩で、聖書改訳要求が次第に高まってきた。そして1951年4月になると、翻訳が始まった。この翻訳は、初めて日本人の聖書学者によって行われ、1954年に新約、1955年に旧約が完成し出版されたと記されている。

また、日本聖書教会の『口語新約聖書について』（pp. 25-26）では、「聖書の口語と文語訳について次のように記されている。現に、キリスト信者の中には、聖書の神聖を守る心持から、その口語訳なるものに賛成しない人々のあることを、われわれも知らないではない」と記されている。さらに「しかし、聖書協会が、このたび、このような口語訳を敢行したことは、確かに、多くの人々の応募に応じ、時代の必要に添い、かつ新約聖書そのものの本質にかなった壮挙であると信じる」とも記されている。

また、具体的な相違点について、口語体の文が文語体のに比して、文章が長くなり、引きしまりがなくなりがちであり、漢文調のもつ簡潔さや荘重味を、それに求めがたいのは、事実である。しかし、その反面、口語文には、いかめしい漢文調の文章には見出されない読みやすさ、わかりやすさ、親しみ、じかに訴えるものがある。

日本聖書教会は文語訳の敬語について、敬語の動詞の使い方は、特に難しいと述べ、口語体では典型的な「給う」の敬語はないことになったため、その代わりに「られる」「される」を用いたようである。そして、受動形と混同されそうな場合には「お」「ご」で始まる敬語を用いるよ

¹² 鈴木（2014:775）は用例として以下の用例を取り上げる。

ひと えいくわう みつかひ とも きた
人の子は父の栄光をもて、御使たちと共に来らん
ひと くさ くわうえい くさ はな ごと
人はみな草のごとく、その光荣はみな草の花の如し

（マタイ 16-27, p. 47）

（ペテロ前 1-24, p. 524）

うになった。たとえば、「お答えになった」「ご存じである」といった表現にした。代名詞の使い方も、なかなか難しいと述べる。例えば、欧米文では、代名詞が数多く用いられ、それは別に耳ざわりではないものの、日本語では、さほど代名詞を用いないのが常であるため、できるだけそれを省くことにした。それでも、口語体で「わたしたち」とか「あなたがた」とかいう代名詞は、文語の「我等」「汝等」等よりは目立ちもし、たどたどしく響くのはやむを得ないと述べる。なお、翻訳の委員は、は、第一人称代名詞には、「わたし」「わたしたち」第二人称には「あなた」「あなたがた」を用いることにし、ごく稀な場合に、「おまえ」を用いた。日本語には、色々な代名詞があるものの、口語訳においては、できるだけそれを統一することにした。これが、やがて一般日常の会話や文章においても、代名詞の統一化に資するところとなれば、幸いだと思うと述べる。

2. 1. 2. スウェーデン聖書の歴史

スウェーデンで初めて出版された聖書は、1526年の新約聖書である。そして、1541年にグスタフ・ヴァサ聖書と呼ばれている全聖書も出版された。1526年の新約聖書の翻訳者は不明であるものの、グスタフ・ヴァサ聖書は委員会を率いた大司教ラウレンティウス・ペトリによって翻訳された。1526年版新約聖書の序文では、翻訳者は、なぜ聖書をラテン語からスウェーデン語に翻訳したかを説明する。簡潔に言えば、教会の説教に参加した人のラテン語の知識はあまりなかったため、多くの人が聖書の内容をより理解できるよう、スウェーデン語に翻訳した。聖書の翻訳はもともと牧師向けだったが、神父の説教を通してしか聖書の言葉を知ることができなかった人にも聖書の内容が届いたことになる。Bergman (2013:88) が述べるように、毎週日曜日に、全国で同じ形で現れた聖書の言葉は、教会で説教を聞きに行った人の記憶に深く刻み込まれたに違いない。そこで、聖書の特徴的な言葉遣いと活用形は当時にも既に古語的な雰囲気を持ち、人によって尊敬すべきで、厳粛として見なされるようになった。

続いて、聖書は当時の書き言葉にとっても重要な作品であった。例えば、同じの作品の中で一人称代名詞の *mig* は、*mig*、*migh*、*mik*、*mic*、*mich* と *mech* の六つの方法で記されることがあったものの、聖書で初めて *migh* に統一された。また、スウェーデン語の書き言葉が成長するうえで重要と見なされたのは、聖書翻訳の語尾母音の軟弱化の阻止であった。語尾母音の軟弱化は、当時の重々しい〈官庁ことば〉の特徴であった。1541年版聖書の言葉は、〈官庁ことば〉より古めかしく、1526年の新約聖書の言葉遣いよりも古語的だったようである。そして、他の点では、〈聖書語〉と〈官庁ことば〉の共通点も見られる。Lukas 23 r. 32 f. (ルカ伝福音書 23-32) で分かるように複数二人称の命令形は、*-er* (*gråter icke*) で終わり、より古い語尾の活用形 *-en* (*gråten icke*) は新約聖書で使われた。複数一人称の活用形は、基本的に〈官庁ことば〉のように *-e* (*skole, kunne*) 末尾で終わるが、1526年の新約聖書は古い活用形の *-om* (*skolom, kunnom*) を用いた。1526年の新約聖書でよく見られた、ラテンの分詞は 1541年聖書では継承されなかったようである。

1541年版聖書の書き言葉に対する強い影響が長く続いたのは、実際的に 1917年まで使用されたからである(興味深いことに日本とスウェーデンの聖書は同じ 1917年に改訳された)。1618年聖書の序文で記されているように「前聖書のテキストと同じく」、本聖書は新しく翻訳されておらず、1703年版聖書もほぼ同じであり、綴り方のみ少し現代化された。

Sundgren (2013:92) は、スウェーデン語の書き言葉について、書き言葉の資料を研究すれば、ある当時の言語を知ることが出来ると述べ、用例として聖書を取り上げる。聖書の翻訳を比較すれば、統語論、語形論や語彙の変遷を調べられるものの、書き言葉はどの程度話し言葉を反映するか、この点については分かりにくい。従って、聖書の翻訳は、古い表現を用いる傾向があるため、更に分かりにくくなる。とはいえ、複数の翻訳の同じ個所を比べれば、さまざまな相違点を注目できるようになる。また、参考のために、日本語版も以下に併記して掲げる。

マタイ伝福音書 20-8 (p.54)

ゆふべ ぶどうぞの あるじ いへつかさ い はたらきびと よ あと もの はじ さき もの
八 夕 になりて葡萄園の主人その家 司 と言ふ「労働人を呼びて、後の者より始め先の者にま
ちんぎん
で賃金をはらへ」九斯て五時ごろに雇はれしもの来りて、おのおの一デナリを受く

Matteus 20, 1541 年

När afttonen kom/ sade wijngårdsherren till sin **Skaffare**/ Kalla fram arbetarenar/ och giff dem the ras löön/ **begynnandes på the sijdsta/ in til the första**. Och när de komo fram/ som widh elloffte stundena komne woro/ fick hwar thera dagspenningen.¹³

Matteus 20, 1917 年

När det så hade blivit afton, sade vingårdens herre till sin **förvaltare**: 'Kalla fram arbetarna och giv dem deras lön **men** begynn med de sista **och gå tillbaka** ända till de första.' Då de nu kommo fram, som voro lejda vid elfte timmen, fick var och en full dagspenning.

1541 年訳と 1917 年訳は似ているものの、相違点もある。例えば、綴りの改めが見られ、語彙の変更や挿入もある。古い語彙の ^{経営者}skaffare は förvaltare に改めており、1541 年版になかった接続詞 ^{けれど}men と説明文 ^{そして}och ^{戻る}gå tillbaka が追加されている。1541 年の *begynnandes på the sijdsta/ in til the första* は日本訳の「後の者より始め先の者にまで」に似ており、1917 年の *och gå tillbaka* の追加で「後 ^{あと}の者より始め、^{もの}そして ^{はじ}先の者にまで ^{さき}戻り」のような意味になる。

最後に 1999 年の最も新しい翻訳では、同じ箇所は以下のとおりである。本訳は、非常に現代的なスウェーデン語で記されており、前の聖書訳のような重々しい言葉はあまりうかがえない。現代的な部分は、下線部で示されている。

Matteus 20, 1999 年

På kvällen sade vingårdens ägare till förmannen: 'Kalla samman arbetarna och ge dem deras lön. Börja med dem som kom sist och sluta med de första.' De som hade lejts vid elfte timmen kom fram och fick en denar var.

1541 年訳と 1917 年訳では「夕べ」の意味をしている *afton(en)* が使用されるが、1999 年訳では現代的な *kvällen* に改められている。現代スウェーデン語では *afton* は少し重々しい言葉遣いで、*kväll* が一般に使用されているものの、『スウェーデン辞書』の記述によると 19 世紀までの中期までは逆であった。また、1541 年訳と 1917 年訳も葡萄園の *herre* という「主」の言葉を用いるが、1999 年訳では現代的な「オーナー」の意味を持つ *ägare* が代わりに用いられている。そして、重々しい動詞 ^{あける/与える}*g i v* は、日常的な *ge* に変更されている。つまり、1999 年訳ではさまざまな言葉は現代化されている可能性があるといえよう。文章自体が単純化されている点も押えておかねばなるまい。例えば、以上に取り上げた 1917 年訳の接続詞 *men* があつた箇所は、1999 年訳では句点で区切られている。また、*och gå tillbaka* のような説明文も不要とされ、より直接的な書き方で記されている。

Teleman (2007:216) は 1917 年と 1999 年の聖書について次のように述べる。1917 年と 1999 年聖書の翻訳に伴い、厳粛な言語の有無の必要性が課題になったと述べる。20 世紀のスウェーデン人は、聖書に関する意見が多かった。例えば、前者の 1917 年版聖書は、箇所によって口語的な統語論を類似し、意図的に宗教的で古語的な言葉を用い、「おしゃべりすぎ」な聖書として見なされた。後者は、より簡潔な統語論を用いたものの、前の翻訳で使われていない現代的な言

¹³現代綴りは次のようである。 När afttonen kom, sade vingårdsherren till sin skaffare: Kalla fram arbetarena, och gif dem deras lön, begynandes på de sista, intill de första.

葉を使ったため、読者から不満を招いた。また、*näpsas* や *allenast* のような言葉や仮定法が新しい聖書の翻訳では使われなかったことで、聖書の言葉（“神の方言” / “教会の母語”）は軽視されていたという意見を持つ聖書の読者もいた。1999 年版聖書の聖歌も「日常すぎ」や「幼稚すぎ」と批判され、以上に取り上げた「マタイ伝福音書 20-8」でも分かるように言葉と文章は現代・単純化されているため、聖書で使われる言葉は、一般的に知られる言語だったと考えられる。しかし、20 世紀初期の実際に教会に行った人数は少なかったようである。スウェーデン教会（Svenska Kyrkan）のウェブサイトで読める調査¹⁴によると、1927 年 11 月に人口の 5% は毎日曜日に教会を訪れていたから、一般の人は聖書の言語についてどの程度詳しくあったかは不明だと考えられる。

2. 2. 聖書の調査結果

2. 2. 1. 聖書の人称代名詞と呼称

まず、日本とスウェーデンの聖書における人称代名詞と呼称の用例を取り上げる。日本聖書では、「われ」と「汝」が多用され、以下の用例（1-2）はそのような用例の代表例である。そして、スウェーデン聖書では特別な一人称代名詞が使われないため、用例（3-4）の下線部は、スウェーデンの聖書におけるさまざまな二人称代名詞のみである。¹⁵

(1) 『ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖霊によるなり。かれ、子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり』
(マタイ 1-20、p. 10)

(2) 『往きて幼子のことを細にたづね、之にあはば我に告げよ。我も往きて拝せん』
(マタイ 2-8、p. 11)

(3) Du skall äta af allahanda trä i lustgården. (Mose 2-16, p. 3)

(4) Man vill hemta eder litet af vatten och två edra fötter, och hviler eder under trät. Och jag vill lägga för eder ett stycke bröd, att i vederqveckan edor hjerta; sedan går i då fram bätter, förty derföre ären i komne till edar tjenare. (Mose 18-4, 5, p. 20)

用例（1）の発話者は、主の使（天使）であり、天使は人間のヨセフに話しかけている。日本聖書では、「ヨセフよ」のように詠嘆の気持ちを表わす呼びかけとして「よ」が多用され、一つの特徴となっている。また、後ほど取り上げるが、「よ」のもう一つの特徴的な用い方があり、命令形の「見よ」や「せよ」も多く見られる。掲げたように、『日本大文典』には、*Nangi* に関する「話しことばに於ける肯定第二種活用」の章では、一から三人称代名詞までが取り上げられており、*Vare*（われ）、*Nangi*（汝）、*Are*（あれ）と記され、*Nandachi*（なんだち）、*Nangira*（汝ら）について「汝その他の者。書きことばに用ゐ、敬意は持たないで、尊大さを示す」と記されている。さらに、『日本国語大辞典』の「なんじ」に関する記述によると「汝」は中世以降から、目下の者に対する、もっとも一般的な代名詞として用いられていたとされている。そこ

¹⁴ <https://www.svenskakyrkan.se/kyrkohandboken/gudstjanstkris-i-atminstone-100-ar>

¹⁵ 元々の Lindskog（2019）の調査では、2001 年の「新体詩聖書讃美歌集」から用例を集めたが、調査の信頼性を高めるため、本節では 2014 年の『文語訳新約聖書詩篇付』の台詞を用いた。Lindskog（2019）で使った用例は以下のようである。

されどエホバよ、なんぢは我を囲める盾わが榮わが首をもたげ給ふ者なり (p.232)

エホバよ帰りたまへ、わが靈魂を救ひたまへ、なんぢの仁慈の故をもて我を助けたまへ (p.233)

で、聖書は、厳粛な言語を使いながら、より馴れ馴れしい言葉や表現を使う傾向があるため、

(1) や (2) で使われる「われ」と「なんじ」の話し言葉的で敬意が低い要素は、文語体の重々しい文章に適していると考えられる。林 (1974:3) は、文語訳と口語訳の人称代名詞について、文語体にはある意味での長所があるのに対し、こなれた口語となると、敬語などでも、いかにも生々しい、さまざまな問題を含んで来ることになる。例えば、文語は現在使っていない言葉であるため、抽象度が高く、「なんじ」は煩わしいよりも、一種の独特の調子を形作るのに対して、「あなた」は生々しいから気になる、といった問題があると述べる。そこで、口語訳は、親しい文体であるため、キリスト教を広めるためには好ましいものの、文語訳の「われ」や「なんじ」は抽象的であり、フィクション等で出て来る神様キャラクターの神秘的な存在に相応しい話し方だと考えられる。

一方、シュナイダー (1970:3) は聖書の人称代名詞について、ヘブライ語やギリシア語で記された聖書を綺麗な日本語で忠実に翻訳するにあたり、問題となるのは人称代名詞だと述べる。そして、欧米語では、代名詞が数多く用いられるが、日本文では、さほど代名詞を用いないのが常であるとも述べる。シュナイダー氏は、日本語における代名詞は、なるべく使わず、敬語を用いて人称を表わしたり、文脈から分かるようにしたりすると述べる。そこで、日本聖書における人称代名詞の過剰使用は、人が神に最も親しく語りかける際に表されているとシュナイダー氏は述べる。さらに、シュナイダー (1970:5) は、聖書翻訳の人称代名詞について、文化における強調点が異なり、西洋では個人を強調し、日本では人間関係を強調していることに根ざしているのではないかと述べ、日本聖書では人称代名詞が多いのは他文化からの影響だとする。

続いて、スウェーデン聖書では *du/I* の単複数形二人称が使われている。1917 年のスウェーデン語では、*du* は話しと書き言葉として使われたものの、Bergman (2013:168) が述べるのように、話し言葉のスウェーデン語では *vi älskar*, *ni älskar*, *de älskar* が使われ、書き言葉のスウェーデン語では、*jag skall*, *du skall*, *han skall*, *vi skall*, *i skall*, *de skall* と書く述べる。そこで、話し言葉では *ni* が使われるが、日本聖書の書き言葉の「汝」のようにスウェーデン聖書にも書き言葉 *i* を使いながら、用例 (3) の馴れ馴れしい二人称 *du* も多用されていることが分かる。用例 (4) の下線部で見られる複数形二人称は、書き言葉の要素が強く、日常会話では現れることが少ない。当時の会話での言葉における二人称代名詞に置き換えると、用例の二人称は順番に *eder*→*er*, *edra*→*era*, *eder*→*er*, *I*→*ni*, *edor*→*ert*, *edar*→*er* となる。聖書の人称代名詞について、もう一つ述べるべき点は、カール 12 世の聖書の中では、当時の定められた敬語制度がほぼ無視されているということである。例えば、上記の『赤い部屋』等では敬語制度のルールは保たれているものの、聖書の非丁寧な二人称代名詞 *du* は、上下関係や、友人か赤の他人にもかかわらず、人間の間で使用されている。1900 世紀のスウェーデンでは、目上や赤の他人に地位と苗字または、単数形として二人称代名詞 *ni* で呼び合う習慣があったものの、聖書ではそのような習慣が見られない¹⁶。聖書で語られる人間も、神様に対して *du* を用いており、神様と人間の間の親密な関係を

¹⁶ 繰り返しとなるが、Teleman (2007) によると、「あなた改革」の前に、同輩および、目上の人に対して、話し相手の苗字か地位を用いるのが最も相応しかったと述べる。さらに、目上の人に対して苗字と地位を合わせを使用しないことは、失礼な行動として見なされた。また、他人に対して礼儀や距離を示す方法として、相手に対して動詞の受身形を使うのも可能であった。他人の地位が不明な場合は、会話の始まりに、「～さん」

(*herr, fru, fröken*) が使われた。「あなた改革」前の人称代名詞制度をまとめると、以下のようであった。

- ▶ 同階級の男性→苗字
- ▶ 同階級の女性→下の名前
- ▶ 目上の人に対して→苗字と地位
- ▶ 目下の人に対して→三人称代名詞の *han/hon* (彼/彼女)
- ▶ 地位が不明な場合→「～さん」(*herr, fru, fröken*) または、三人称の「彼/彼女」(*han/hon*)
- ▶ 夫婦、カップルや友人の間→単数形の二人称 *du*
- ▶ 家族→「お母さん」「お父さん」「お兄さん」など
- ▶ 年上の女性から年下の男性に対して→苗字
- ▶ 目上から目下に対して→苗字か下の名前、複数形の二人称 *ni*

表わすため、これが使用され、この用い方こそ聖書における特徴的な使い方だと考えられる。また、丁寧な言葉の単数形として用いられた *ni* の代りに使われる *I* は、聖書では敬語としてではなく、単なる *du* の非丁寧な複数形二人称代名詞として現れる。

2. 2. 2. 聖書の命令形

日本の聖書では有名な命令形として「たまえ」が多用される。藤本（2014:121）の「たまえ」に関する項目では、「たまえ」の形にも「与えたまえ」「恵みたまえ」「導きたまえ」など神に対して恩恵を求めるような一部、尊敬の意味を残した用い方が認められると記される。また、人は神様やイエスに対して「たまえ」を用いるものの、イエス等は人に対して「たまえ」ではなく、「せよ」や「留れ」を命令表現として使う。

(5) 『^お起きて、^{おきなご}幼子とその^{はは}母とを^{たづき}携へ、エジプトに^{のが}逃れ、わが^つ告ぐるまで^{かしこ}彼処に^{とどま}留れ。へ
^{をきなご}ロデ幼子を^{もと}求めて^{ほろぼ}亡さんとするなり』（天子）（マタイ 2-13、pp. 11-12）

(6) イエスは^{こた}答へて^い言ひ^{たま}給ふ『^{いま}今は^{ゆる}許せ、われら^か斯く^{ただ}正しき^{こと}事をことごとく^し為^と遂ぐるは、
^{たうぜん}当然なり』（イエス）（マタイ 3-15、p. 14）

(7) イエスは^い言ひ^{たま}給ふ『^{たれ}つつしみて^{かた}誰にも^{ゆる}語るな。ただ^ゆ往きて^{おのれ}己を^{さいし}祭司に見せ、モーセが
^{めい}命じたる^{そなへもの}供物を^{きさ}献げて、^{ひとびと}人々に^{あかし}証せよ』（イエス）（マタイ 8-4、p. 24）

(8) 『^{しゅ}主よ、^{まづ}先づ^ゆ往きて^わ我が^{ちち}父を^{ほうむ}葬ることを^{ゆる}許したまへ』（弟子）（マタイ 8-21、p. 25）

日本聖書では「イエスは^い言ひ^{たま}給ふ」のように、地の文ではイエスや神様等の「天国」の者の動作に対して「給ふ」が使用される。また、イエス等は尊敬されるべき存在であるため、敬意を持つ命令形「たまへ」を他人に使わない。また、偉大な存在として位置づけられるため、「たまえ」のような尊敬語でもって敬意が表わせることになる。なお、イエスや天子は代わりに「せよ」や「留まれ」のような強い命令形を用いる。また、聖書の文語訳を口語訳と比較し、日本聖書協会のウェブサイトを通して「聖書本文検索」¹⁷で検索すると、次のような用例を拾うことができる。(5)「立って、幼な子とその母を連れて、イスラエルの地に行け。幼な子の命をねらっていた人々は、死んでしまった」、(6)イエスは答えて言われた、「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」、(7)イエスは彼に言われた、「だれにも話さないように、注意しなさい。ただ行って、自分のからだを祭司に見せ、それから、モーセが命じた供え物をささげて、人々に証明しなさい」、(8)「主よ、まず、父を葬りに行かせて下さい」のようになり、文語訳とさまざまな相違点が見られる。(5)の命令形は「逃れ」から「行け」に変更されているが、まだ強い命令表現が使われている。しかし、(6)では強い「許せ」は「受けさせてもらいたい」の和らげた表現となっている。用例(7)も相当和らげられており、「誰にも語るな」と「証せよ」は「だれにも話さないように、注意しなさい」と「証明しなさい」のよりやさしい日本語に訳されている。そして、(8)で使われる有名な命令表現「許したまへ」は敬意を持つため、より丁寧な「行かせて下さい」に翻訳されている。シュナイダー（1970:3）は、口語訳では人称代名詞として「わたし」や「あなた」が使われ、上記の用例で見たように、口語訳の命令形も文語訳より現代的となっており、結果として中立的な印象を与えると考える。

続いて、1917年のカール12世の聖書にも、「たまえ」と似たような特別な命令形が多用されたものの、日本聖書の「たまえ」や「せよ」と異なり、話し相手と聞き手を問わず、イエスは人

¹⁷ https://www.bible.or.jp/read/vers_search.html (2020-11-15 確認)

間に対し、人間もイエス等に対しても同じ命令形を用いる。(9-11)の発話者は、それぞれ神様、エサウとイエスであり、天の人も人間も同じ命令形を使うことが分かる。

- (9) **Gack** utur arkenom, du och din hustru, dine söner och dina söners hustrur med dig. Allahanda djur, som när dig äro, utaf hvarjo och eno kötte, både i foglar och fänad, och det som på jordene kräker, det gånge ut med dig. Och förkofrer eder uppå jordene, och varer fruktsamme, och föröker eder på jordene. (Mose 8-16, p. 9)
- (10) Jag är Esau, din förstfödde son; jag hafver gjort som du hafver sagt mig: **statt upp**, sätt dig, och ät af mine villebråd, på det din själ må välsigna mig. (Mose 27-21, p. 35)
- (11) Då sade Jesus till honom: **Gack** bort, Satan; ty det är skrifvet: Herran din Gud skall du tillbedja, och honom allena skall du tjena. (Matteus 4-10, p. 4)

Bergman (2013:199)によると、以上の下線部の聖書で見られるような命令形の *gack* や *statt upp* は当時のスウェーデン語では既に消滅していたと述べる。当時の日常会話の命令形として現れるのは、*gack*→*gå*¹⁸や *statt upp*→*stå upp* であった。これらの古い命令形は主に聖書のキャラクターによって使用されるから、聖書語の特徴的な使い方であると考えられる。Bergman

(2013:92) は、1703-1917 年年聖書と同じテキストを使う 1526 年版新約聖書について次のように述べる。他の点では、〈聖書語〉と〈官庁ことば〉の共通点も見られる。Lukas 23 r. 32 f.

(ルカ伝福音書 23-32) で分かるように複数二人称の命令形は、*-er* (*gråter icke*) で終わり、より古い語尾の活用形 *-en* (*gråten icke*) は新約聖書で使われた。複数一人称の活用形は、基本的に〈官庁ことば〉のように *-e* (*skole, kunne*) 末尾で終わったものの、1526 年の新約聖書は古い活用形の *-om* (*skolom, kunnom*) を用いた。以下の (12) では *-er* で終わる命令形が見られる。

- (12) **Farer** dit, och **bespörjer** granneliga efter barnet; och när I det finnen, så **säger** mig det igen, att jag kan ock komma, och tillbedja honom. (Matteus 2-8, p. 2)

新訳の 1917 年聖書から、古い訳との間にさまざまな共通点と相違点があるものの、2000 年の聖書との相違点が相当数ある。例えば、(11) の命令形 *gack* は、以下の (a) から消えており、1917 と 2000 年聖書の両方は、*gack* の代りに *gå* という現代命令形を用いる。しかし、(b) で分かるように、命令形が完全に現代化されておらず、複数命令形 *Faren* が使用されているのに対し、2000 年訳では現代的な *bege* が使用される。さらに、1917 年聖書はまだ古い二人称代名詞 *I* を用い、2000 聖書¹⁹では *I* や *eder* 等は、*ni/er* に現代化されていることが見られる。

(a) イエス、1917 年聖書 (p.12)

Då sade Jesus till honom: **Gå** bort, Satan, ty det är skrifvet: Herren, din Gud, skall tillbedja, och honom ensam skall du dyrka. (Matteus 4-10, p. 12)

2000 年聖書

Då sade Jesus till honom: **Gå** din väg, Satan. Det står skrifvet: Herren, din Gud, skall du tillbe, och endast honom skall du dyrka. (Matteus 4-10)

¹⁸ ストリンドベリの *Fröken Julie* (『令嬢と召使』) では、当時に使われた命令形の用例がうかがえる。

"Gå sin väg!" (p.8)

¹⁹ 2000 年聖書による用例は、スウェーデン教会 (Svenska Kyrkan) のウェブサイトにおける検索ツールを用いた。
<https://www.bibeln.se/visa?q=gen.1@b2k>

(b) ヘロデ、1917 年聖書 (p.6)

Faren åstad och undersöken noga om barnet, men när **I** haven funnit det, så underrätten mig, på det att även jag må komma och tillbedja det. (Matteus 2-8, p. 6)

2000 年聖書

Bege er dit och ta noga reda på allt om barnet», sade han, »och underrätta mig när **ni** har hittat honom, så att också jag kan komma dit och hylla honom. (Matteus 2-8)

2. 2. 3. 聖書の打消し

スウェーデン語の最も日常会話的な打消しの表現 *inte* は〈聖書語〉では見られず、*ej*、*icke* や *ingalunda* が代りに打消しとなっている。以下の用例 (13-15) ではそのような打消しの用例を掲げたものである。そして、日本聖書では、(16) のような打消し「ぬ/ん」が多用される。

(13) **Ingalunda** skolen I döden dö. (Mose 3-4, p. 3)

(14) Hvi hafver du sådant gjort mig? Hvi sade du mig **icke**, att hon var din hustru? (Mose 12-18, p. 14)

(15) Gack hit, min son, att jag tager uppå dig, om du äst min son Esau, eller **ej**. (Mose 27-21, p. 35)

(16) 『神の子よ、われら^{なんぢ}らと何の^な関係^{かいはり}**あらん**、未だ^{いま}時^{とき}**いたらぬ**に、我ら^{われ}を責めんとて
此^こ処^こにきたり^{たま}給ふか』 (マタイ 8-29、p. 25)

以上のスウェーデン語における打消しは古めかしいというより、一般的な打消し表現 *inte* が用いられないことで特徴的となる。以上の用例を現代または当時のスウェーデン語に言い換えれば、(13) *Ni ska/skall inte/icke döden dö*、(14) *...Varför sa/sade du inte...*、(15) *...om du är min son Esau, eller inte/ej* のような書き方も出来るが、*inte* が使われなくとも必ずしも古語的な雰囲気を与えない。また、*inte* の不使用の特徴は 2000 年聖書でなくなっており、(13) 等の同じ箇所は *Ni kommer visst inte att dö* のように訳されており、他の特徴として動詞の複数形もなく、二人称 *ni* が *I* に改めている。

しかし、日本聖書では打消しの古語的な文語文が使用されている。金水 (2014:214) は、(16) で使われるような未然形「ん」について、古語の否定の助動詞「ず」の連体形「ぬ」が変化した形であり、動詞の未然形に接続して打消しを表わすと述べる。それゆえ、聖書の古語的な文語体の重々しい文章に相応しいと考えられる。さらに、日本聖書では打消し「ず」も使われることが多いので、文語的な要素が強調される。

2. 2. 4. 聖書の特殊な言葉遣い

1917 年までのスウェーデン聖書の他の特徴として、*ho* (だれ) という *wh* 疑問文が取り上げられる。Bergman (2013) によると、*ho* は、1815 年にはほぼ廃れた言葉だと述べるものの、カール 12 世の聖書では、この *wh* 疑問文を含め、他の廃れた疑問詞とともに使用される言葉が多く見られる。例えば、(18) では、*ho* が見られ、用例 (17) の発話者は、*hvi* (どうして) の疑問詞を用いる。そして、(19-20) の通り、日本聖書では、現代的な「どこ」や「誰 (だれ)」ではなく、古い疑問詞の「いづこ」と「誰 (た)」が多用され、両聖書には重々しく古語的な言葉遣いが見られる。

(17) **Hvi** kommen I till mig? Haten I mig dock, och hafven drifvit mig ifrån eder. (Mose 26-27p. 34)

(18) Här är jag;ho äst du, min son?

(Mose 27-18p. 35)

(19) 『ユダヤ人の王として生れ給へる者は、何処に在すか。我ら東にてその星を見たれば、拝せんために来れり』

(マタイ 2-2、p. 11)

(20) 『蝮の裔よ、誰が汝らに、来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。

(マタイ 3-7、p. 13)

用例 (17) の下線部 *hvi* は理由を表わす「どうして」という意味の語であり、(18) の *ho* は前述の通り「だれ」という *wh* 疑問文である。カール 12 世の聖書は、1917 年まで使われたが、*hvi/ho* は当時の会話言葉として既に廃れており、*hvi*→*varför* と *hø*→*vem* が当時と現代のスウェーデン語にも一般的に用いられる疑問文となっているため、聖書の専用言葉として見なせる。さらに、1917 年以後の聖書の以上と同じ個所では *Varför* *kommen I till mig* と *Vad vill du? Vem är du, min son?* のように改められており、僅かに現代化されていた。

Bergman (2013:200) はカール 12 世の聖書 (1703-1917) では、他の特徴的な言葉遣いがあり、原文のギリシャ語の新聖書の影響や、文章をより上品にするため、1703-1917 年の聖書では、接合言葉の *ju*、*nu* や *då* が多用された。また、1917 年の聖書では古いことわざや古語が多用される。聖書で使用する古語は、以下のとおりであり、() の中の言葉は当時の日常会話で使われた言葉遣いである。

allenast (bara) だけ/のみ、*begabba (håna)* あざける、*begynna (börja)* 始まる/始める、*förgäta (glömma)* 忘れる、*förlåten i templet (förhänget)* カーテン、*hane (tupp)* 雄鶏、*hanegället (tiden då tuppen börjar gala)* 雄鶏が鳴く時間、*hövitsman (chef)* 上司、*konungason/konungadotter (prins/prinsessa)* 王子/姫様、*konungslig (kunglig)* 威風堂々たる、*krigsman (soldat)* 兵士、*ljungeld (blix)* 稲妻、*misskunda sig (förbarma sig)* 宥赦する、*näpsa (bestaffa)* 罰する、*änkans skärv (liten slant, som offergåva)* 献金、*slem vinning (usell)* 価値のない、*tillstādja (tillåta)* 許可する、*tordön eller dunder (åska)* 雷、*tunga (börda)* 負担、*två sina händer (tvätta)* 洗う、*ulv (varg)* 狼、*upphäva sin röst (tala)* 話す、*vedermöda (besvärlighet)* 苦勞、*vädur (bagge)* 雄羊、*åkerman (bonde)* 農民、*åthävor (sätt att skicka sig)* 振る舞い、*örtagård (trädgård)* 庭

Bergman (2013:95) は、単語も活用形も 1541 年版聖書ではもう古語的であったと述べる。この古語的な要素は 1703 年版聖書では恐らくより著しかった。1703 年版聖書の出版者は、聖書とともに古い言葉のリストも添付した。出版者は「今は廃れているが、我々の聖なる聖書ではまだ残されている」と述べる。

上記の「日本聖書の歴史」でも述べたように、日本聖書の「改訳」にも特殊な言葉遣いが見られる。例えば、鈴木 (2014:775) は「改訳」では同一の「栄光」と記されている言葉が、カミ (神) に用いる際には「栄光」を、人間に対しては「光荣」として使い分けていると述べ、用例として以下の用例を取り上げる。本稿で扱う『文語訳 新約聖書 詩篇付』も「改訳」に基づく聖書であるので、全く同じ用例が見られる。

(21) 人の子は父の栄光をもて、御使たちと共に来らん

(マタイ 16-27、p. 47)

(22) 人はみな草のごとく、その光荣はみな草の花の如し

(ペテロ前 1-24、p. 524)

最後に、聖書は強い書き言葉的でより重々しい要素を与える印象として、話し言葉 *ska* (英語の単純未来/意志未来等を表わす *shall* と同じく) という動詞が一切使われず、代わりに書き言葉 *skall* が多用されている。

- (23) Ty den sig upphöjer, han skall varda förnedrad; och den sig förnedrar, han skall varda upphöjd. (Matteus 23-12, p. 35)

小説等における会話の言葉では、*skall* ではなく、*ska* が使われることが最も多い。そのため、(23) のような用例は書き言葉的で古めかしい印象を強める。そこで、日本とスウェーデンの大きな共通点として、文体の面では日本聖書は書く言葉向けの文語体を用い、スウェーデン聖書の書き言葉要素も強い。

2. 2. 5. フィクション作品における〈聖書語〉

上記の聖書における特徴的な言葉はストリンドベリの 1902 年の劇 *Ett Drömspel* (『夢の劇』) で見る事が出来る。本劇は、日本語に訳されていないので、日本語とスウェーデン語の対照比較ができない。

〈聖書語〉を使うキャラクターは、「インドラの娘」として紹介されている。このインドラとは、ヒンドゥー教の雷神であるのだが、このインドラの娘は「アングネス」(Agnes) という名前が与えられ、彼女は〈聖書語〉を使うことがある。アングネスは、人間生活のさまざまな苦しみを経験するために地球に降り、劇は神の世界いる頃から始まる。従って、(24) ではアングネスは、雷神である父のインドラと会話しており、聖書における特有の言葉遣いが見られる。そして、アングネスは、インドラに人間と時間を過ごすべきと促され、人間界にいる間、当時のスウェーデン語を用いるものの、彼女は神の娘であることが明らかになる際に、(25-27) のような〈聖書語〉が混じった言語を人間に対して使う。

- (24) Jag följde blixstens stråle ifrån höga etern och tog ett moln till resvagn... Men molnet sjönk, och nu går färden nedåt.. Säg höge fader, Indra, vilka regioner jag råkat i? Vi är så kvavt så tungt att andas? (p. 84)

- (25) Alla! Varför tron ! icke era profeter? (p. 131)

- (26) Icke?... Jag har lidit alla edra lidanden, men hundrafalt, ty mina förnimmelser voro finare... (p. 132)

- (27) Låt om oss upplysa dem! Vill du! Tillsammans med mig! (p. 99)

用例 (24) ではアングネスはインドラを *höge fader* (神様に使う「父」という言葉または、「父なる神」) と呼ぶことが分かる。*Fader* は、神様や神父に対する専用の言葉であり、子供は自分の父親に対して基本的に *far* という呼称を使う。また、以上の聖書の用例にも取り上げたように、(24) ではアングネスは、神のインドラのみに疑問視 *vi* (上記の聖書用例は *hvi* と記す) を用いる。逆に、アングネスは人間界にいる間、次の文章のような *Jo, jag ser! Säg far, varför växer blommorna upp ur smuts?*²⁰ の言葉を用い、インドラに使った *fader/vi* は、話し言葉的な *far/varför* に変更されている。また、アングネスは、人間界にいる間、人間と同じ話し方をするものの、彼女がインドラの娘であると明らかになるとき、〈聖書語〉と「普通」のスウェーデン語を併用するようになる。例えば、(25-26) の通り、打消しは一般的な *inte* ではなく、より古めかしい使い方の *icke* となっている。そして、アングネスの正体が知られる前は 19 世紀に使われたスウェーデン語を使っており、*Farväl! Det ni kan, skall väl jag kunna!*²¹ の下線部のように複数二人称代名詞 *ni* を単数形として用いるため、丁寧な印象を与える。しかし、(25) のように *ni* の代りに〈聖

²⁰ p. 86

²¹ p. 93

書語)のIの使用が見られ、この二人称代名詞は、聖書の使い方通り単数形ではなく、本来の複数形として用いられていると分かる。また、二人称Iは、廃れた動詞の複数形(-n 末尾)の *tron* と併用されるので、さらに古語的な印象を与える。

聖書の言葉の使用は(4)と同じであり、用例(26)にも非常に古めかしい所有格複数二人称代名詞 *edra* をうかがえ、(25)で表われる日常会話の *era* と併用されていることが明らかになる。また、*ni/I* も併用するようになり²²、普通語と〈聖書語〉の併用の使用がかなり対照的となるから、当時の〈聖書語〉は、役割語度が高かったと考えられる。

また、Bergman (2013:92)によると、複数一人称の活用形は、基本的に1526年の新約聖書では古い活用形の-*om* (*skolom, kunnom*) となったと述べるように、神キャラクターのアングネスの(27)の発言にも-*om* の活用形が見られる。アングネスは、人間生活を経験するために地球に降り、本用例では人間だと思われる「弁護士」と呼ばれるキャラクターに対して *Låtom oss upplysa dem* (苦しむ人間を啓発しよう!)と発言する。更に、用例(25)ではアングネスは人間に対して話しかけ、*Alla! Varför tron I icke era profeter?* (皆! 汝らは、なぜ預言者を信じない?)のように、動詞を複数化した-n 末尾(*tron*)を用いる。

また、人間は神様に限って話しかける際の言葉も現れる。例えば、アングネスは、オルガンを弾く場面もあるものの、音の代りに人間の声がオルガンから出ており、-*Evige, vi är du i fjärran?*²³ (神様よ、何故遠方にいらっしゃいますか?)と発言する人間は、聖書特有の疑問詞 *vi* を用いる。そして、炭鉱夫の人間がアングネスに話しかける場面、アングネスは炭鉱夫に「神の娘」と呼ばれる。さらに、炭鉱夫は、自分たちは社会に不可欠な存在であるのに、なぜ苦しまなければならないと聞き、*Vad gen I oss igen?*²⁴ (汝ら(上の人)は、われわれ(下の人)に何を与えてくださる?)と述べ、聖書のI 二人称と動詞複数形-n 末尾を用いる。

Ett Drömspel (『夢の劇』)等で見られる言葉について、Nordberg (2013:36)が述べるように、歴史的位相語を研究する際に、原作の当時言語に対する誠実性に頼らなければならないため、言葉のやり取りや会話のパターンを調べるのは、困難である。主に間接的に言語を示す裁判のプロトコル、個人の手紙、劇、小説の会話や旅行日記の会話の描写に頼らなければならない。現実に最も近い言語は、恐らく演劇の会話であると考えられるが、これは芸術作品での言葉であるため、会話の純粋な復元にならないと Nordberg 氏は述べる。また、Pahlm (2007:4)は、スウェーデンの学校でのキリスト教学について、1842年の義務教育が定めるところから、キリスト教学は重要な役割を果たしたと述べる。当時の聖書の読書者や学校で熱心に勉強した学生は、恐らく *Ett Drömspel* (『夢の劇』)の聖書的な要素を認識することが出来たのであろう。そこで、ストリンドベリは、当時の〈神様語〉を思わせるため、以上のI、*vi*や動詞の複数形使用等を神様のキャラクターや神様に話しかける人間に使用させたと考えられる。しかし、このような〈神様語〉は、当時、どの程度に広まっていたかは、いまだ不明であるため、さらなる検討が必要である。

聖書の言葉遣いに強く影響されている作品のもう一つとして、Hagberg (1847-51)によるシェイクスピア劇の1603年の『ハムレット』(*Hamlet*)と1608年の『リア王』(*Konung Lear*)の翻訳が取り上げられる。用例の発話者は、『リア王』の(28)コーディーリア、『ハムレット』の(29)ハムレットと(30)クローディアスであり、彼等の発言の下線部には〈聖書語〉との共通点が見られる。

(28) Gode herre, Ni aflat, fostrat, älskat mig; och jag Gengäldar denna huldhet vederbörligt, Jag lyder, älskar er och vördar er. Hvi togo mina systrar män, om de Er ensam älska? Blir jag gift, så får Den man kanhända, som jag trohet svär, Min halfva kärlek, halfva tro och huldhet. Jag gifter mig ej, jag, som mina systrar, För att min fader ensam hålla kär. (p. 4)

²² 例えば、*Elak, alltid elak, men det är ni alla!*... (p. 133) という台詞があり、*ni* と *I* の二人称を切り替えることが増える。

²³ P. 100

²⁴ P. 119

(29) Min faders ande klädd i stål! Det står ej riktigt till, jag anar svek. O, att det vore midnatt! – Intill dess **stätt stilla** du min själ! Ond gerning bryter I dagsljus fram och blir af menskor spord, Om ock den skyldes af vår hela jord. (p. 14)

(30) Se, detta var ett huldt, ett älskligt svar. Blif såsom vi i Danmark! Kom, min fru. Vår Hamlets milda, oaftvungna bifall Invid mitt hjerta sitter leende. – Ej kungen någon skål i dag **skall** dricka, Som ej kanonen **skall** för skyn förkunna; Vid kungabärgarnas klang **skall** himlahvalfvet På jordens **thordön** svara. – Kom, vi gå. (p. 10)

上記の用例(28)では、スウェーデン聖書にも *Ett drömspel* (『夢の劇』) にも使用された古い疑問詞の *hvi* (どうして) が見られる。同用例では古語的な要素として、*togo* という動詞が用いられている。この動詞は、古語の過去形を使用し、Bergman (2013:109) が述べるように、16世紀では動詞の複数過去形を表わすのに *-o* が語末に追加され、現代スウェーデン語では動詞の複数形が使われていない。使用数が少ないものの、(29) の〈聖書語〉のような *stätt stilla* の古語的な命令形が見られる。Bergman (2013:200) はカール 12 世の聖書 (1703-1917) における古語の語彙を取り上げ、その中で (30) の *thordön* (「雷」を意味している「トール神の雄叫び」) が見られる。また、劇とは俳優が舞台上で身振りや台詞によって物語や人物を演じて見せる芸術であるため、話し言葉を多用すると考えられる。しかし、『ハムレット』と『リア王』は古い劇 (1603 と 1608 年) であり、Hagberg (1874-51) はこれらの劇に古い雰囲気を与えさせるために登場人物に書き言葉的で重々しい語彙を使わせる。例えば、聖書のように話し言葉 *ska* (英語の単純未来/意志未来等を表わす *shall* と同じく) という動詞が一切使われず、代りに書き言葉 *skall* が全体的に用いられる。また、聖書との相違点として、Hagberg 訳のシェイクスピア劇では当時の 1900 年代の敬語利用の在り方が尊重されている。例えば、目下のキャラクターは、目上の王様キャラクター等に話しかけると、単数形として丁寧な複数二人称 *ni* を用いる。

日本語訳の『ハムレット』と『リア王』にも聖書的な言葉遣いが見られるものの、スウェーデン語訳と異なり、全体的に用いられていない。例えば、野島 (2000) の『リア王』では、以下の用例 (31) の恩恵を求めるような「聞き給え」は、〈神様語〉の使用に限られている。

(31) 愛する女神よ、**聞き給え**！ (p. 73)

シェイクスピア劇の日本語とスウェーデン語の翻訳については、次節で取り上げ、これらの劇で使われる人称代名詞と命令表現をより詳しく分析する。ここでは聖書ではなく、時代背景として王様キャラクターが用いる〈王様ことば〉を検討する。

本研究で取り扱う日本聖書は、1917 年に刊行された『改訳新約聖書』と同じ文章を用いており、同じ当時の 1907 年に (明治 40) 出版された子供向けの『少年パック』という漫画雑誌にも、聖書のような「我」や「汝」の使用を以下に見られる。用例 (32-35) は昔の偉いお坊さんの一休和尚が子供だった頃の話である。一休は、同じお寺にいた師匠と会話しており、師匠は人称代名詞として「我」と「汝」を用いる。(32) の「汝」の振り仮名は「そち」であるものの、(33) で引導する際に、「なんじ」に変わっている。『日本国語大辞典』の「そち」に関する項目によると、「そち」は、中世以降使用された語で、多く下位の相手に用い、主として武士・男性が用いたことから、少し時代的な雰囲気を与える。また、(34) にも「汝」は武士に使われる用例があり、この用例は江戸時代の舞台となっており、徳川頼房と息子の光国の間の会話である。頼房は最初に一人称「わし」を使うが、途中で何故か「我」に変わり、「汝」と併用する。最後に、(35) の舞台は戦国時代となっており、発話者の織田信長による「汝」等の使用が見られ

る。この話では、織田信長は、折々小性²⁵共の試験をしたという設定になっている。話し相手の小性は森蘭丸である。また「汝」以外の聖書との共通点として、聖書では尊敬すべき存在のイエス等の動作に対して、動詞の連用形に「たまふ」が使われるように、(35)の地の文の織田信長の動作に対して「呼び留めたまひ」が見られる。

(32) 師匠「汝は小供のくせに小賢しきことを申す、我等老僧とて御佛の御許しはないが、併し我等は、夫れに引導をして喰ふから、決してお咎めはない」
「鯉の引導」『少年パック』第3巻第4号 (p. 10)

(33) (引導) 汝元来、生木の如し、助けんとすれば逃んとす、生きて水中に遊ばんよりは、如かず、愚僧が糞を為れ、……喝……
「鯉の引導」『少年パック』第3巻第4号 (p. 10)

(34) 頼房「俺が、若しも、戦争に出て居て、創を、受けた時には、汝は、我を、肩に負て退ぞく、事が出来るか、どうだ、」
「七歳の光国」『少年パック』第3巻第4号 (p. 11)

(35) 信長はこれを見て、蘭丸を呼び留めたまひ、
信長「蘭丸、人は総て心と氣を働らかすことを忘れてはならぬ、汝の唯今の退きやうは実によろしい、」
「森蘭丸の智」『少年パック』第3巻第11号 (p. 6)

藤本 (2014:143-144) の「なんじ」に関する項目では、キリスト教の神から人への語りが発展し、あらゆる世界の絶対的上位者の台詞に用いられるようになると、ロールプレイングゲーム等に登場する、その世界の神、創造主、主人公を導くような役割を持った人物や智者、長老タイプの老人の発話にも使用される（〈老人語〉〈神様語〉）と記されている。更に、この場合も聖書の影響を受け、西洋的な作品に多く見られるが、東洋的なものでも、神仏のお告げなど神に関連する使用例は見られると藤本氏が述べる。前述の発言は、特に老僧である発話者の (32-33) の発言に当てはめられると考える。(34-35) では、何故「汝」が使われるかは、不明であるものの、藤本 (2014:142) が述べるように、「なんじ」は中世期に入ってから、広く目下の者に対して用いられ、以上の「われ」と「なんじ」は明治期の〈時代ことば〉または〈武士ことば〉として使われた可能性がある。また、『日本国語大辞典』の「な - んじ [・んぢ] 【汝・爾】」にも記されているように、「なんじ」は中世以降は、目下の者に対する、最も一般的な代名詞として用いられ、上記の用例と同じ使い方であるため、古い言葉遣いを反映するため使われたと考えられる。ブラウン (1863:xxxvi) の以下の引用でも分かるように天皇という上の存在は、部下に対して「なんじ」を用いた。

For the second person, the emperor is addressed by the courtiers, with Shin, meaning your majesty. Addressing his attendants, the emperor uses Nanji, which is derived by contraction from na-mochi, having a name, or illustrious.

また、藤本 (2014:144) は、漫画やアニメでも、その世界での神や何らかの特別な力司った者の言葉や呪文に用いられると述べるように、『少年パック』では「汝」は催眠術の言葉として使われる例もある。凸坊という少年は小遣いで催眠術の本を購入し、中に催眠術を懸ける方法につ

²⁵ 小姓とは、お側にいて色々な用事をする子供のことでありと話の中で説明される。

いて読書する。以下の催眠術の本の「第三」で分かるよう、まじないの文句として「汝」が使われる。発話者の凸坊という少年は、友人の茶目君に催眠術をかけてみる。

(36) 第三、第一と第二に書いてあることが、能く出来たならば被術者は施術者の顔を注意して見ます、施術者は被術者の眼を睨みます、そして十五分程の後に（汝は今催眠術にかゝった。漸々眠くなる）（中略）
「汝は今催眠術ニ懸った、直に眠る」 「催眠術」『少年パック』第4巻第2号（p.3）

2. 3. 第2節のまとめ

本節の日本語とスウェーデン語における聖書で出て来る聖書語について明らかになったことは以下のとおりである。扱った〈聖書語〉と実際に使われたスウェーデン語の日常会話の言葉を以下の表1でまとめ、より詳しい説明は以下のとおりである。

表1 聖書語と日常言葉

	聖書語	日常言葉	文語訳	口語訳	備考
一人称	N/A	N/A	我/我等	わたし/わたしたち	スウェーデン聖書では、特有の一人称をうかがえないが、日本聖書では「われ」の使用がある。
二人称	du	du	汝	あなた/おまえ	Du の古語的/書き言葉的要素はないが、ni 等は I で表せる。日本語では、有名な「汝」が使われる。
	I/eder/edra	ni/er/era	汝等	あなたたち	
呼びかけ	N/A	N/A	よ	よ	体言に付いて詠嘆の気持ちをこめての呼びかけを表わす間投助詞が多用される。「ヨセフよ」。
命令形	gack/statt upp	gå/stå upp	許したまへ/せよ/留まれ	行け/もらいたい/しなさい/て下さい等	スウェーデン聖書の命令形は神⇄人間のように使われている。しかし、日本聖書では話し手によって命令形も変わる。神＝「せよ」等、人間＝「たまへ」。
打消し	ingalunda/ic ke/ej	inte(icke/ej)	ぬ/ん/ず	ない/ません	スウェーデン聖書の打消しに特徴を付けるのは、一般的な打消し <i>inte</i> が使われないことである。
疑問詞	hvi/ho	varför/vem	なにゆゑ ²⁶ /た/たれ/いづこ	どうして/どこ等	疑問詞 <i>ho</i> や複数形動詞- <i>en</i> (<i>skolen</i>) 等は、当時既に廃れた言葉遣いである。
動詞	skolen	ska	N/A	N/A	
	skall	ska	N/A	N/A	日本聖書の文語体のように、地の文だけでなく、会話文にも書き言葉の <i>skall</i> のみ用いられている。

- スウェーデンの 1526-1917 聖書の人称代名詞は、書き言葉の要素が強く、日常会話ではあまり見られない言葉である。聖書で使用された人称代名詞（左）と当時と現代スウェーデン語による日常会話の二人称代名詞（右）は、I→*ni*、*eder*→*er*、*edra*→*era*、*eder*→*er*、*edor*→*ert*、*edar*→*er* の通りである。また、カール 12 世（1917 年まで）の聖書の中で

²⁶ 『なにゆゑ臆するか、信仰うすき者よ』（イエス、p. 25）

は、当時の定められた敬語制度がほぼ無視されており、非丁寧な二人称代名詞 *du* など、上下関係や、友人か赤の他人にもかかわらず、人間の間や神様に対して使用されている。1900 世紀のスウェーデンでは、目上や赤の他人に地位と苗字または、単数形として丁寧な二人称代名詞 *ni* で呼び合う習わしがあったものの、聖書ではそのような制度が見られない。

- 日本聖書の文語訳では「われ」と「汝」の人称代名詞以外、体言に付く呼びかけとして「よ」も多用されることが分かる。これらの人称代名詞は、他のジャンルにも見られ、役割語度の高い〈神様語〉として見なすことが出来るが、口語訳聖書では、人称代名詞は「わたし」や「あなた」に変更され、命令形も「しなさい」や「(て) ください」に改められ、かなり現代化されているので、文語訳のような他作品に対する影響力を持たないと考える。
- 聖書で見えるような命令形の *gack* (行け) や *statt upp* (立て) は当時のスウェーデン語では既に消滅していた。当時の日常会話の命令形として現れるのは、*gack*→*gå* や *statt upp*→*stå upp* であり、古い命令形は主に聖書のキャラクターによって使用されるため、聖書語の特徴的な使い方だと考えられる。また、日本聖書の「たまえ」と異なり、*gack* 等は、神様の人間に対する命令形または、人間が神様に対して用いる言葉遣いである。
- 命令形として「たまへ」は主に神様やイエス等に対して用いられ、神様等から人間に対する命令形として文語的な「せよ」や「留れ」のような表現が見られ、神と人間の使用する命令形が区別されることが分かる。
- 聖書では、日常会話の打消し *inte* が見られず、*ej*、*icke* や *ingalunda* が代りに打消しとなっており、打消しに特徴づけるのは、使われる打消しより、使われない打消しだと考える。しかし、古語的な言葉遣いではないことから、〈時代ことば〉として見なされないと考える。
- 日本聖書は、文語体で記されているため、本文体に相応しい打消し「ぬ」や「ん」が多用され、口語訳では「ない・ません」の現代的な打消しが見られる。
- カール 12 世 (1917 年まで) の聖書で使われる *hvi* は理由を表わす「どうして」という意味であり、*ho* は「だれ」という *wh* 疑問文である。カール 12 世の聖書は、1917 年まで使われたが、*hvi/ho* は当時のスウェーデン語では既に廃れており、*hvi/ho* ではなく、*varför/vem* が日常的な疑問詞として用いられる言葉であったから、役割語度が高い言葉だと考えられる。また、日本語の疑問詞として「なにゆゑ」「た/たれ」や「いづこ」の古語的な疑問詞をうかがえ、スウェーデン聖書のように相当古い言葉である。
- 日本聖書では、書き言葉的な文語体が全体的に使われ、重々しい雰囲気を与えており、スウェーデン聖書にも話し言葉 *ska* ではなく、*skall* 等の書き言葉は全体的に使われる共通点が見られる。
- 聖書に影響されたと思われる作品では、いわゆる〈神様語〉を用いるキャラクターもうかがうことが出来た。例えば、ストリンドベリの 1901 年の *Ett Drömspel* (『夢の劇』) では、アングネスという神の娘は、二人称 *I*、疑問詞 *(h)vi* や動詞の複数形 *Låtom* 等を用いた。そして、人間からアングネス等に対する *I* や *(h)vi* の使用も見られた。聖書で使われる言葉は、当時の人によってよく知られたと考えられるため、アングネスに限る言葉遣いや人間から神様に対する発話は、スウェーデン語の〈神様語〉または〈聖書語〉として捉える可能性がある。そして、1909 年の『少年パック』における少年向けの漫画雑誌の用例では、老僧による「我」「汝」(そち/なんじ)の使用があり、少年は催眠術の呪文として「汝」の使用も見られた。また、戦国と江戸時代が舞台となっており、武士が子供に「我」と「汝」を用いた用例もあった。明治期では、特に「汝」は聖書との結びつきが確認されるものの、室町江戸時代の武士や老僧キャラクターによる用例もあったから、〈時代ことば〉としての認識もあったかもしれない。

- ストリンドベリの1901年の *Ett Drömspel* (『夢の劇』) 以外、Hagberg (1847-51) による『ハムレット』(*Hamlet*) と『リア王』(*Konung Lear*) では同じような〈聖書語〉の使用が見られた。例えば、古語的な疑問詞の *hvi* (どうして)、*togo* という古語の過去形が使用され、使用数が少ないが、*statt stilla* の古語的な命令形の使用もあった。Bergman (2013:200) によって取り上げられ、カール12世の聖書(1703-1917)における古語の *thordön* (「雷」を意味している「トール神の雄叫び」) も使われた。最後に、劇とは俳優が舞台上で身振りや台詞によって物語や人物を演じて見せる芸術であることから、話し言葉を多用すると考えられる。しかし、『ハムレット』と『リア王』は古い劇(1603と1608年)であり、Hagberg (1874-51) はこれらの劇により古い雰囲気を与えさせるために登場人物に書き言葉的で重々しい語彙を使わせる。例えば、聖書のように話し言葉 *ska* (英語の単純未来/意志未来等を表わす *shall* と同じく) という動詞が一切使われず、代りに書き言葉 *skall* が全体的に用いられる。

以上から分かるように、日本聖書との結びつきや〈神様語〉の役割語として使用される「汝」や「たまえ」があるように、1526-1917年の聖書にも〈神様語〉に似たような〈聖書語〉の役割語が存在していると考えられる。上記のように、当時の人々は、聖書の言葉に詳しく、Hagberg 訳の『ハムレット』や『リア王』に時代背景を与えさせ、ストリンドベリの *Ett Drömspel* (『夢の劇』) のような劇で容易に役割語として使用できたと考える。

3. 翻訳作品におけるシェイクスピア劇の〈時代ことば〉

日本語における役割語は豊富であり、さまざまなジャンルにおいて数多くの種類が存在している。その一つに〈時代ことば〉というものがある。〈時代ことば〉の中には〈武士ことば〉や〈公家ことば〉といった古風な言葉遣いが存在し、これは日本の時代劇やフィクション作品等で古めかしい印象を与える言葉遣いとして用いられており、よく知られている言葉遣いであると言える。

時代劇はスウェーデンでも人気があるが、〈時代ことば〉自体は、日本語の役割語ほど豊富ではない。しかし、〈時代ことば〉がある程度存在している。例えばそれは、時代作品でしばしば現れる王様キャラクターが使う〈王様ことば〉が該当する。日本語におけるフィクション作品にも〈王様ことば〉はたびたび使われるが、それぞれの言語で、この〈王様ことば〉がどのように使用されているかを比較する²⁷。

現代や当時のフィクションにおける〈時代ことば〉とは、登場人物が使う、ある時代の特徴的な言語または、ある時代のステレオタイプの言葉遣いをいう。〈時代ことば〉を表わす方法としては、現代語では廃れてしまった古風な語彙や文法を登場人物に使わせたり、現代語と併用されたりするといったものがある。例えば、日本語では「拙者」や「でござる」は、時代劇の武士が用いる〈武士ことば〉としてよく現れ、〈時代ことば〉の一つとして認識されている。しかし、スウェーデン語では人称代名詞や文末表現が比較的に限られており、〈武士ことば〉等という言葉遣いは、日本語のように明らかではない。そこで本節では、どのような〈時代ことば〉がスウェーデン語にあるかの整理を行う。

王様キャラクターの有名な一人称の語法として「尊厳の複数」(英: "royal we") があるから、日本語における〈王様ことば〉にもどのような人称代名詞の役割語が使われているかを見極めるためにも発話者がどの一人称を用いているかを検討することからはじめる。

²⁷ 金水 (2018:11) では、〈時代ことば〉は「時代で分類: 武士ことば、忍者ことば、公家ことば、遊女、町人ことば、股旅ことば」として分類され、〈王様ことば〉は「職業・階層で分類: 博士語、上司語、お嬢様ことば、奥様ことば、やくざことば、ヤンキー語、スケバン語、軍隊語、遊女ことば、王様ことば、お姫様ことば」で分類される。

また、スウェーデン語の人称代名詞が非常に少ないため、人称代名詞を検討する方法が基本的には難しいが、〈王様ことば〉における一人称の使用は例外であることから、日本語とスウェーデン語における〈王様ことば〉を比較する。

日本語からスウェーデン、スウェーデン語から日本語へ翻訳され、〈時代ことば〉を扱う作品が限られているため、本節の調査対象として英語から翻訳されたシェイクスピア劇の『ハムレット』（1603）と『リア王』（1608）でしばしば出現する王様キャラクターの発話を調査することにした。

3. 1. 先行研究

本節では、調査対象の言葉遣いを〈時代ことば〉と呼ぶものの、刈（2012:8）では、「疑似古語」と名付けられ、以下のように定義されている。

「疑似古語」とは、現代人が書いた或いは制作した、古い時代を舞台とするフィクション作品の中で、登場人物の台詞で古めかしさを感じさせられる場合、あるいは現代人がある言葉づかいを聞いて古い時代の人間を思い浮かべる場合に用いられる言葉づかいのことである。例えば「そなた、名はなんと申す」という台詞の中に用いられている「そなた」と「申す」の二語は「疑似古語」に当てはまる。

実際に使われた言葉というより、〈時代ことば〉（疑似古語）は、明らかに古風的な雰囲気を与えさせるためにフィクション作品において用いられていると考えられる。

そして、そのような〈時代ことば〉は、金田（2012）が日本語から翻訳された英語の二つの言語の〈時代ことば〉を取り上げ、それらの比較・検討を既に行っている。金田氏は、現代英語では二人称は単複ともにもともと複数形であった *you* が用いられ、古語での単数形 *thou* は現代では話し言葉として使用されることはないと述べる。*Thou* がどのように使用されているかを示すため、金田氏は、人気を得ているテレビゲーム『ファイナルファンタジーVI』から役割語要素として使用されている以下の例を紹介する。

まあ、まあ、まあ、まあ、それはともかく、君は何者でござる？

Oh, dear... Do simmer down, sirs! And **thou**, o wild one... Who might **thou** be?

金田（2012）は、用例発話者のカイエンという武士キャラクターの話し方について、自称詞に「拙者」、語尾に「〜でござる」を用い、話し方は典型的なサムライキャラのようになっていると述べる。そして、英語版では、呼びかけ詞の *sir* を用いることに加え、単数 *you* の代りに古語の *thou* を使用し、*thou* は、ちょうど日本語の「でござる」語尾に相当する役割語要素になっていることがわかと述べる。さらに、金田氏は以上の用例について「実際（13）の台詞の後、カイエンは相手である野生児のガウに「ござる」と呼ばれ、この部分は英語版では“*Mr. Thou*”となっている。このことも、*thou* が「ござる」に相当する特徴的な要素であることが強調されている。」と述べる²⁸。

金水（2003:182-184）は、過去の人物（時代劇のキャラクター）に付ける話し方について述べ、用例として「西洋の中世の武士」等のように外国人でかつ過去の人というキャラクターの言葉は、どのように表現されてきたかについて論じる。また、武士キャラクターならば、〈武家ことば〉という歴史的に根拠のある言葉遣いが日本語として準備されているわけであるが、その他は、たいていどれも日本語を話すのを聞いたことがないか、本来日本語を話さない人たちであると述べる。このようなことばが用いられることについて、大きく分けて二つの理解がある。一つは「言語の投影」、もう一つは「ピジンの適用」とであると金水氏は述べる。

²⁸ 実はこの発言には間違いがあり、野生児ガウはカイエンの話し方に影響され、“*Mr. Thou*”と発言するものの、“*Mr. Thou*”と呼ばれるのはカイエンではなく、彼らと同じ場にいるマッシュ（英：Sabin）である。マッシュは、ガウに何度か“*Mr. Thou*”と呼ばれ、自分（マッシュ）が“*thou*”と言っていないのに結局ガウに怒って“*Mr. Thou is that one over there!*”のような発言をする。

金水（2003:183）は「言語の投影」について説明し、用例として「西洋の中世の武士」を取り上げる。このようなキャラクターであれば、〈武家ことば〉が投影されることが多いであろうと述べ、用例として以下の十四世紀フランスの領主オリヴァー卿の発話を取り上げる。

「しかし——まあよい、ここでこじれては元も子もない。わしとしては、あらんかぎりの礼節と敬意をもって、賢者どのの助言をもとめるのみじゃ。そなたは賢い。また、わしはそなたの叡智をおおいに必要としておる——と、こやつらはぬかしおる」

（マイケル・クライトン/酒井昭伸（訳）「タイムライン」352頁）

下線部から分かるように、人称代名詞の〈時代ことば〉として使われるのは「わし」と「そなた」である。本節の調査対象の作品は、近世（17世紀）のシェイクスピア劇から翻訳された作品であり、原文は古い英語作品であるため、古語的な二人称 *thou* や尊厳の複数 *we* といった人称代名詞がどのような方法で翻訳されているのかを調査する。日本語版は、上記のような〈武士ことば〉に翻訳されているが、スウェーデン語版では、現代語の逐語的な訳か、古語的に翻訳されているかを明らかにしたいと考える。

3. 2. 調査作品と方法

3. 2. 1. 調査作品と情報

3. 2. 1. 1. 調査作品

本節で取り扱う作品は、シェイクスピアによる1603年の『ハムレット』と1608年の『リア王』である。これらの作品は、好評を博し、発表されて以来、いくつかの言語に翻訳されてきた。日本語やスウェーデン語にも近現代における複数の翻訳があるから、それぞれの言語ではどのような翻訳方法を用いられていたかは、より見極めやすいと考える。また、本節の調査対象は王様キャラクターが用いる〈王様ことば〉である。このことばがシェイクスピア作品では多く出現するため、分析データも多い。それゆえ、調査作品として選択した。

それぞれの言語ではシェイクスピア作品の翻訳版が多く、本節で取り扱う訳は次のとおりである。

日本語訳：

『ハムレット』：戸沢（1905）、坪内（1909/33）、福田（1959）、三神（1964）小田島（1973）、野島（2002）、大場（2004）

『リア王』：戸沢（1906）、坪内（1912/34）、福田（1962）、小田島（1974）、木下（1989）、野島（2000）、大場（2005）

スウェーデン語訳：

Hamlet（『ハムレット』）：Hagberg（1847-51）、Pyk（2014）

Konung Lear（『リア王』）：Hagberg（1847-51）、Ristarp（2010）

3. 2. 1. 2. 作品情報

ここでは調査作品に関する情報と、作品を選んだ趣旨について出版年ごとに説明する。それぞれの作品を取り上げた。なお、荒井（1972）のシェイクスピア劇に関する研究を特に参考とした。

戸沢訳：

戸沢訳（1905/6）を選んだのは、翻訳の文章は、文語文で記されており、他の口語的な訳と比べたとき、対照的な訳だからである。本訳は文語文で記されているため、文語的な人称代名詞や文末表現が多く、当時の現代的と古語的な要素がより見極めにくいと考えられる。しかし、この訳で使われる文語的要素を他の翻訳と比較すれば、何が現代語であるか、何が〈時代ことば〉であるかはより著しくなると予測され、比較作品として相応しいと考える。

坪内訳：

坪内（1909/33、1912/34）は、シェイクスピア劇訳者の中で、最も影響力を持つ訳者であるために選んだ。荒井（1972:265）によると、坪内逍遙は、日本最初のシェイクスピア劇全集の完訳者として、演劇史や翻訳史に偉大な業績を残した。また、坪内逍遙とシェイクスピアについて、坪内士行は以下のように述べる。

逍遙が初めてシェイクスピアの作に接したのは16才の頃であるが、その訳に筆を染めた明治16年、25才の時から数えても、77才の死に至るまでは50余年、もちろんその間に幾度か他の仕事の7ために中断はしたが、折にふれ時につれ、シェイクスピアに立ち戻り、又そこから出発する。逍遙にとってはシェイクスピアは、いわば心の故郷であったのである

荒井氏は、これほど坪内がシェイクスピアに打ち込んだ目的は、坪内自身の言葉によると、「わが国劇の向上に資する為」だと述べ、シェイクスピア劇は「劇としての様式の上には歌舞伎と不思議な相似性を有しており」、シェイクスピアを研究することが坪内自身のためばかりでなく、「広く邦人の為にも、国劇向上の最も適当な手段であると感じた」からであったとも述べる。坪内はシェイクスピアの作劇術を「桐一葉」などの新歌舞伎脚本の創作に生かし、シェイクスピア全訳の仕事で世界的な大劇作家の全作品を日本へ紹介する偉業をなしとげたのであったと荒井（1972）が述べる。

また、翻訳にあたっては、「脚本の翻訳者は単なる文士であってはならない。是非とも劇の実際に精通していて、舞台におけるセリフの受け渡しの呼吸をよく心得ている者であらねばならない」と坪内が考えたようである。それには自分が最適任だと確信して翻訳を進め、明治42年の「ハムレット」にはじまり、大正15年の「心の骨折損」に至る21篇の「沙翁傑作集」に続き、昭和3年には「沙翁全集」40巻を完成した。そして5年後の75歳の時から改訳の仕事に取りかかり、「新修シェイクスピア全集」40巻が完結した昭和10年に77歳で世を去った。

荒井（1972:267）によると、坪内は「新修シェイクスピア全集」の最終稿にいたるまで、翻訳態度は「五変遷を経ている」と述べ、シェイクスピア劇翻訳の第1から5期まで、それぞれの翻訳手法があった。本稿では、その中でも第3と5期の訳を手に入れられ、それぞれの翻訳手法は、以下のとおりとなっている。

第1期：明治15、6年の坪内の学生時代に試みた訳で、「ジュリアス・シーザー」を「自由太刀余波鋭鋒」と題して「浄瑠璃」まがいの七五調に訳した。

第2期：明治29年に「早稲田文学」に逐語訳、散文訳による「注釈を本位と立てた翻訳」を載せたが、これは「主として学生らに原作を読みこなしめるための講義体のものであった」ようである。

第3期：明治41、2年頃に、「文芸協会の試演用に」「実演を目的として試訳した時代」の時期である。坪内はこの頃の訳文について、「現在の新劇風の自然な、自由な台詞廻しなぞは仮にも望まれない時代であったので、『ハムレット』の訳詞が知らず知らず歌舞伎式となり、75調となり、其後改訳して完結する段になっても、なお能の狂言口調だけは捨てかねた」と述べている。

第4期：この時期では「文語口語錯交時代」で、ラフカディオ・ハーンの「今日シェイクスピアを訳すなら、口語体で訳するのが当然だ」という説もあって、口語体を採用しつつあったが、坪内は「実演上の一種の主張」から、文語体を捨てかねていた。その理由は「原作が律語と散文的詩語と全くの口語との錯綜から出来ているから、その方法でなら、多分うまく原作の情味や調子が出されるであろうと思った」からであったと荒井（1972:268）が述べる。

第5期：この時期では、更に文語体を減じ、口語を一段と現代へ近づけるようにして「シーザー」を訳し、実演させて見て、「成るほどハーンの言った通りだな」と思う心が強くなり、第5期の「現代語本位訳の時代」となった。坪内は、シェイクスピアを訳すのに、「比較的現代語が最良だという自覚」に達した結果、以下のように述べている。

文語や、よし文語でなくも、特殊の聯想の伴う語で訳すると、とかく解りにくくなったり、日本臭味が勝ったり、古臭を帯びたりするが、現代語で訳して見ると、そうでない。あの複雑な、時としては、怖ろしく簡約な、故事にからんだ、比喩沢山な、しかも古い文法で啜られていて、イギリス人にさえ註釈なしでは読みこなせないような名文句が、不思議にも活々と躍動して、其語の一々が、どうやら直接にわが心線に触れるように感ぜられる。境には、それを口にしてはいるポーシャやクレオパトラやビヤトリスやブロスペローやステファノーやボットムやマクベスやマクベス夫人が、わが昭和の今日に、どこかそこいらにいるのではないかとさえ思われる。現代口語の含有している現代味と自然味とがシェイクスピアの作中に籠っている不易の自然味を呼び出すのでもあろう。（『シェイクスピア研究栞』の「自分の翻訳について」より）

坪内は、明治、大正、昭和にわたってシェイクスピアを翻訳し続けており、常に時代の変化に敏感であったことは、坪内の翻訳が「5 変遷」を経たのち、第 5 期の現代語訳に定住するに至った経過に現れていると荒井氏が述べ、後の翻訳者の訳にも影響を与えたと考えられると考えられる。

福田訳：

福田訳（1959/62）のシェイクスピア劇上演は、文学座の「ハムレット」で出発したと荒井（1972:306）が述べる。昭和 30 年 4 月に福田訳の仕事は、第 2 期に入っており、さらに他の作品が訳され上演されていき、日本における本格的なシェイクスピア劇連続上演は、福田訳によってようやく始まったとみていいであろうと荒井（1972:306）が述べる。それは福田訳の出発点となり、日本のシェイクスピア劇上演史における画期的な出来事ともなったようである。

荒井（1972）によると、昭和 29 年秋、ヨーロッパ旅行から帰国した福田氏はシェイクスピア劇を日本へ紹介するために新訳を決意し、河出書房版シェイクスピア全集の翻訳を開始し、その第一回配本に「ハムレット」を選び、昭和 30 年 5 月に出版すると同時に、文学座公演「ハムレット」を演出した。「ハムレット」の主演を演じた芥川比呂志は、福田訳の演出で稽古に入ったときの印象を以下のように記している。

「ハムレット」の稽古は、私たちにとって速力とのたたかいであった。あんなに速いテンポで芝居をしたこと、それに苦しんだことは、それまでになかったし、その後も一度もない。

坪内逍遙訳で読みなれていた「ハムレット」のイメージは、はじめて上演台本を読んだ時、たちまち粉碎された。せりふは簡潔で力づよく、律動的で、歯ざれがよかった。これは、かなりテンポの速い芝居になるだろうという予想を、私たちは稽古にはいる前から興奮して話しあったものだ。（荒井、1972:307）

福田訳の「ハムレット」は坪内訳よりテンポが速く、台詞も簡潔であったことから、坪内訳より現代語に近い翻訳だったと考えられる。また、福田演出の意図に移ると、演出者は初演のパンフレットに次のように書いたと荒井（1972:308）が述べる。「オールド・ヴィック座から盗んだ『ハムレット』の演出ノートがなかったら、モーリス・エヴェンズの『ハムレット』演出ノートがなかったら、友人たちから提供された数々の資料がなかったら、このシェイクスピアという大物は、到底こなしきれなかったろう」。

荒井（1972:310）では福田氏は自身の訳について以下のように説明している。

「シェイクスピア劇といへば、なんとなく歌舞伎を想像し「月はおぼろに白雲の」式の朗唱調で演られるやうにおもふが、それはとんだまちがひである。妙な形容だが、目にもとまらぬ快速調で喋る。が、耳にはとまる。

私のシェイクスピア翻訳の原則はその辺にある。現代の新劇俳優が喋れるぴちぴちした日本語でシェイクスピアを再現したいといふことだ。それはかならずしも現代口語訳を意味しない。私の訳を読むひとのうちには、もっと私たちの日常会話に近いものを予想していた人もいたかもし

れない。が、私のいふ現代語訳といふのは、あくまで、現代の舞台で喋れ、かつ聴きとれる日本語といふ意味である。もちろん、早く喋らなければいけない。それには俳優がせりふを早く喋ることに快感を感じるものでなければいけない。つまりリズム感がなければいけないのである。現代日本語ではほとんど不可能なことを目指しているやうなものである。」

（「シェイクスピアの翻訳について」より）

荒井（1972:311）は、福田訳では出来るだけ原文通りの語順を追うように心がけ、緊張感のある文体を作り出していると述べる。そして、福田氏は「原文の各行が翻訳の各行にそれぞれ一致し、行内の語句が他行のそれと交錯したり後出の行が前に来たりしていないという点では、私のが一番よく出来ている」と述べる。体言止めが多く使われているのは、「話し手の心理や情念がせりふの弾みで折角ある水準まで高まって来ているのを、国語動詞の悠長で説明的な語尾で落してしまいたくないからだ。体言止めにとすると、その後は休めないのである」と説明している。

荒井（1972:312）によると、福田訳で最も重視されているのは、単に台詞の意味を伝えるのみならず、台詞の持つ身振り、台詞に内在する弾みを、弾みのある日本語に移す点である。「劇における言葉は行動そのものであり、行動の尖端において発せられ、さらに行動を生み出すものであるがゆえに、最も行動的でなければならぬ」という福田氏の考えから、「言葉は身振りだ」

「語順を無視して身振りは伝えられぬ」という線で進められているのである。それゆえ、福田訳において、特に王様キャラクターは、行動的かつ強くて命令的な表現を用いると予想されよう。

三神訳：

荒井（1972:288）は、三神訳（1964）についてシェイクスピア劇でこれまでに上演されたのは、「ウィンザーの陽気な女房たち」「ハムレット」「ロミオとジュリエット」「真夏の夜の夢」「十二夜」「オセロ」の六本であるが、そのうちに三本までは千田是也の演出で上演されていると述べる。

荒井氏は、千田是也がまず坪内逍遙訳シェイクスピアの根底に置かれているものは、団十郎、菊五郎的な歌舞伎の俳優術あるいは逍遙一流の朗読術であり、シェイクスピア的俳優ではないと考え、生きた人間の音声、身振り、表情、動作が人間の内的な働きののっぴきならぬしであるということを土台にした「近代的演技術」ではないため、「逍遙的シェイクスピアは古臭すぎる」と考えたと述べる。

続いて、荒井（1972:290）は、三神による『ウィンザーの陽気な女房たち』新訳について以下の三つの点を取り上げる。

- ① ウィンザーの女房たちを飽くまで当時の市民階級の健康な「おかみさん」としてはっきり特徴づけること。そこで、役割語にも重視されている社会階層に意識しており、敏感だと考えられる。
- ② この作品の登場人物の身分関係、階級関係を日本の封建時代の身分関係にそのまま当てはめるのではなく、当時の英国の身分関係を日本の見物に理解させるように努力して、できるだけはっきりさせること。三神訳以外の訳についても同じことが述べられると考えるものの、訳者は、シェイクスピア劇を翻訳する際に言語を古語化し、わざと〈時代ことば〉的にする傾向があるようである。
- ③ 全体を平易な現代日本語に直すこと。特にシャレや地口を耳で聞いてわかるような、現代の日本人にわかるものにすること。
- ④ 言葉の末にこだわらずに、作中の人物の心理の働きや、原作の全体のテンポ、リズムを生かすこと。この四点に特に注意がはらわれたという。その結果は「舞台用のテキストとして、これまでの訳よりはるかに優れていたということは自信をもって云い得ると思う」と演出者自身は語ると荒井氏が述べる。そこで、三神氏は、社会階級に関して詳しく、特定の階級に使用される言葉遣いにも精通していると考えられる。

荒井（1972:296）は三神訳について、先述の六本の作品の他に、「じゃじゃ馬馴らし」「トロイラスとクレシダ」「マクベス」「シンペリン」を訳しており、さらに他の作品の翻訳も着々と進められていると述べ、昭和12年の「ウィンザーの陽気な女房たち」を共訳して以来、一貫してリズム感のある耳で聴いてわかる台詞を目安にして続けられている年季の入った訳業であると述べ、劇中で使われる言語を現代語化し、常に分かりやすくすることに努力したようである。

また、荒井氏によるとシェイクスピア劇を日本の舞台にのる上演台本として訳す場合、訳者が劇作家であって、かつシェイクスピアの英語が正確に読める人か、あるいはシェイクスピア研究家であって、しかも芝居に精通していてドラマを正面から受けとめている人かに限られ、坪内逍遙、木下順二、福田恆存は前者に属し、三神勲は後者のタイプであるといえると述べる。

小田島訳：

小田島（1973/74）のシェイクスピアの個人全訳は、坪内訳について二人目であり、1980年に芸術選奨文部大臣賞を受賞していることから、本稿の調査対象作品として選び取った。また、小田島（1974:7）はシェイクスピア劇について以下のように述べる。

私は、近松の作品よりシェイクスピアのそのの方が、作品が優れているというつもりはないし、また、それとこれとの劇構造が、いちぢるしく異なっているせいであるとも思わない。にもかかわらず、近松の作品がパロディーとなり得ず、シェイクスピアのそれがパロディーとなり得るのは、恐らく、その国が古典を古典として養いつづけてきた文化的な実力の差、もしくは、文化そのものの構造の差であると考え。つまりもし、シェイクスピアの作品が古典として偉大なものであるとしたら、それは、彼の作品がそれ自体優れたものであったこともさることながら、それをそれとして養い上げてきた文化が偉大なものであり、その文化の構造自体が優れていたのである。

つまり、シェイクスピア劇は、引用で記されるようにいつも古典の作品として扱われているのであれば、どの時代にせよ、シェイクスピア劇の現代訳もそのようなわけで古風的な要素が与えられると考えられる。

木下訳：

荒井（1972:300）によると、木下訳（1989）は、既に「ハムレット」と「マクベス」の訳が完成しており、今後も特にシェイクスピア悲劇の翻訳に期待するところが大きいと述べる。

そして、木下訳で最も重視されるのは、原文のセリフが本来持っているエネルギーのうねりを日本語としてどう再生産するかという点であると荒井氏が述べる。

シェイクスピアが無韻詩の形式で人間の語る言葉を書いた「その詩形から受けた質感を等量の日本語にどう置き換え得るか」が木下訳では重視されたようであり、俳優には「訓練された声」による歌舞伎式でも新劇でもないデクラメーションによる表現が要求されることになるのである。先述のことについて、荒井（1972:301）は訳者自身の言葉を引用しつつ、以下のように詳しく説明する。

まず「シェイクスピアが詩形式で人間の語ることばを書くという事情は、シェイクスピアが自覚していたといえないとにかかわらず、シェイクスピアにとっては制約であったはず」なのだが、「無法則的な日常の会話というものを、詩形式というワクの中にはめこんでしまういわば無理さというものから生まれてくる、そこからほとぼしり出てこざるを得ないある力」がシェイクスピアのセリフにはあるので、「邦訳する場合、訳文のどこにどういう制約を置かかという問題が出てくる」わけである。詩形の移植という点については訳者は絶望的ようであり、シェイクスピアの翻訳にあたって守ろうとした原則がいくつかある。そして、その一つに「原文のセンテンスは、それをいくつかに切って訳すほうが分かりやすい場合でも切らないで、やはり一つのセンテンスに訳す」というのがあり、この原則を守ることによって「原文の激しいヴォリュームやうね

り」つまり「原文とできるだけ等量のエネルギーを日本語として成立させる」ようにしようという試みである。

荒井（1972:302）では木下訳の特徴について、土方与志は木下訳のセンテンスが長すぎるのではないかという意見を持っていたそうであり、ある俳優はしゃべりにくいといったそうだが、木下訳を検討してみると、原文で短かいところは、ちゃんと短かく訳してあると述べる。長くなっているところは、原文とできるだけ等量のエネルギーをいかに日本語として成立させるかに苦心している箇所、いわばそこに訳者とドラマとの格闘があるわけだと荒井氏が述べる。三神訳等と比較すると、全体的により複雑な翻訳となっていた。

野島訳：

本節では、シェイクスピア劇のどの現代訳を用いるべきかについて考えた上で、岩波文庫にて出版された野島訳を選択した。その理由として、岩波文庫は出版社として信憑性が高く、研究に相応しい学術的な作品を出版するとの判断がある。また、岩波文庫でシェイクスピア劇を翻訳した訳者が複数おり、本節は王様キャラクターが用いる〈王様ことば〉を検討するため、王様キャラクターがよく出現する野島（2000/2）による『ハムレット』と『リア王』を調査対象として選んだ。

野島（2000:344）は自信の『リア王』の訳について次のように述べる。「初めは私はすべて散文訳にしようと思った。無韻詩型の原文を行わけに訳して詩めかしてみても、なんの意味もないと思えたからである。しかし、『リア王』のテキストは無韻詩型の科白のみで出来ているわけではない、散文の科白も俗謡ふうの戯れ唄もある。それらの文体が入り混じっている」と述べる。「たとえばリア、ケント、グロスター、道化、哀れなトムの中に展開する場面に見られるような、詩と散文と歌の断片が一見でたらめに混じり合っているさまを、とくにご覧になるがいい。一見でたらめにみえても、しかしこれらの場面の劇的妥当性は、主としてこのような多用かつ均衡した〔文体の〕オーケストレーションにあるのである」。先述の括弧の言葉は、シェイクスピア劇の屈指の演出家だったグランヴィル＝バーカーの言葉であり、まさにその通りであると野島氏は考えている。いかに拙劣なものであろうと、私（野島）は詩めかした文体の形を臆面もなくそのままに残したと野島氏が、文体にある古めかしさを与えると考えているのである。

また、野島（2002:412）は『ハムレット』の訳について、「訳出に当っては拙訳『リア王』（岩波文庫）の場合と同じ方針にしたがった」と述べる。「そして今回もまた、まずは“読者”を念頭において訳した。注釈が厩大なものになったのもいたしかたない。なにしろ『ハムレット』はシェイクスピア劇で最長のものであり、その幾重にも重層する科白の意味内容、文体からしても比類なく複雑・難解なものだから。筋だけ読み取るなら注釈など、なにも必要としない。が、少しでも綿密に読もうとしたら、注釈なしではすまされない。（中略）拙訳『リア王』の一読者から、「脚注はおおせの通り『いやでも目に入り』ですが、いやでも他者の眼で読むことを強制されているみたいで、ちょっと目ざわり」という便りがあつた。さもありなんと思う。そういう読者はなんらかの方法で脚注の部分を目隠しして、読みすすめられればよい」と野島が述べる。野島（2002）が先述の通り、訳出にあたって『ハムレット』では『リア王』と同じ翻訳方針を用いているので、両訳は同じ言葉遣いの古めかしさも共通していると考えられる。

大場訳：

本節で大場訳（2004/5）を調査対象として選んだのは、本作品が対訳であり、原作と日本語訳を容易に比較できるからである。また、作品内に訳者は、シェイクスピア劇のあらゆる面（当時の英語や文化等）に関して、詳しいようであり、翻訳者として信憑性が高いと考える。

大場（2004:xii）は、『ハムレット』と『リア王』の翻訳について、テキストの行分けに詩行を揃える「韻文訳」としたと述べる。そして、シェイクスピアの台詞のリズムを伝える方法として、形式面でもテキストに従い、韻文の部分にテキストと対訳との行数表示をそのまま一致させることができたとも述べる。大場氏は、これまでの主な日本語訳のほぼ半数が表面的には韻文訳

の試みを行ってきており、日本語訳として独自の詩行を立てた試みもあると述べる。そうした既訳の中であって、「本訳者は、みずからの責任において原文の行分けを編纂・確定した上で、他の訳よりも舞台のリズムを強く意識した韻文訳を心がけた」と大場氏が述べる。また、「韻文でも特に脚韻のある台詞は、無韻詩の中で、その分目立って突出した形になる。その呼吸を訳に盛り込むのも必要な工夫でなければならない。それとしばしば現れる歌の訳の工夫。これはこれまでの訳で最も改善すべきところであるように思われたと」大場氏が述べる。そして、散文については、「散文の訳口語的な調子に加えて時事言及の含みもあり、日本語訳の分量が幾分多くなりがちである。散文の部分の行数表示についても原文と一応一致させたが、実際の行数では量的に必ずしも一致していないとも述べる。

3. 2. 2. 調査方法

日本語における役割語の研究は、人称代名詞と文末表現に注目するものが多く、ヨーロッパ（スウェーデンを含め）では昔から王様による「尊厳の複数」（英：royal we）が存在しているため、以上の日本語とスウェーデン語のそれぞれの訳で現れる王様キャラクターの〈王様ことば〉とは、どのようなものであるかを明らかにしておく必要がある。それゆえ、王様キャラクターの用いる人称代名詞を比較した。役割語では文末表現も重要な役割を果たしており、王様キャラクターは、しばしば命令する立場にいることから、彼等が用いる命令表現を調査対象に入れる。また、〈時代ことば〉とは「現代語の中で古い言葉遣いを用い」るため、本節で王様キャラクターの人称代名詞と命令表現の使用が古風であるか、〈時代ことば〉であるかについて論じる。

日本語にもスウェーデン語にも翻訳版が多く、近代から現代訳にかけて王様キャラクターは、どの人称代名詞と命令表現を用いたかを統計的な観点から分析し、最も使用の多い人称代名詞と命令表現を図表にまとめる。

3. 3. 調査結果

3. 3. 1. 『ハムレット』と『リア王』における人称代名詞

3. 3. 1. 1. 日本語訳

まず、日本語訳の分析に入る前に、原文における『ハムレット』と『リア王』における一人称代名詞の使用を以下に示す。用例（1）の発話者は、『ハムレット』のクローディアス王であり、用例（2）の発話者はリア王である。

(1) **We** pray you, throw to earth This unprevailing woe, and think of **us** As of a father; for let the world take note, You are the most immediate to **our** throne; And with no less nobility of love Than that which dearest father bears his son Do **I** impart toward you. (King, p. 22)

(2) And here are to be answer'd. Tell me, my daughters,— Since now **we** will divest **us** both of rule, Interest of territory, cares of state,— Which of you shall **we** say doth love **us** most? That **we our** largest bounty may extend Where nature doth with merit challenge. Goneril, **Our** eldest-born, speak first.²⁹ (King Lear, p. 9)

²⁹ 大場（2004: x）は、シェイクスピアの英語について、英語史では時代を大きく3つに区分すると述べる。三つ目の Modern English (ModE, 近代英語)の区分は、1500年頃→現代に使われた。現代英語 (Present-day English, PE) に至る5世紀を Modern だけで区分するのはあまりに粗雑であるとして、1700年頃を境に前半を Early Modern English (初期近代英語)、後半を Late Modern English (後期近代英語)とする場合もあると大場が述べる。シェイクスピアの英語は Early Modern に属する。

大場（2004）は、ModE以前の文献を読むために訓練が必要であるものの、基本的にModEの作家のシェイクスピアの場合、そうした訓練を必要としないと述べる。語法的にも語彙的にも現代英語の基本を習得した日本の高等学校卒業生にも十分に読みこなせる英語である。ここで読むという面からやや乱暴に日本語との比較を持ち出せば、言文一致の文化「運動」によって近代化に向かいつつあった明治期、その運動の文学的洗練の当事者である、たとえば漱石、鷗外を読むのに似ていると言ってよいのかもしれないとも述べる。

原文における王様キャラクターは、両方とも一人称として *we*、*us* や *our* のような“royal we”（尊厳の複数）を用いることが分かる。“Royal we”とは、複数形の一人称を一人の自分のみに指して使う一人称であり、王様や女王様のような王家に使われる尊大な語法である³⁰。そして、本節で扱う日本語訳の原文と同じ個所の“royal we”は、それぞれ以下のように翻訳されている。用例の翻訳者は、戸沢（3-4）、坪内（5-6）、坪内の改訳（『新修』）（7-8）、福田（9-10）、三神（11）、小田島（12-13）、木下（14）、野島（15-16）と大場（17-18）は次のとおりである。

（3）（省略）朕（わ）が願ぢや程に、その無益（むやく）な愁傷を地に擲ち、朕をば父と思ひてよさて世人おして卿こそ朕（わ）が王位を襲ふべき人なる由を知らしめよ朕（われ）將たまことの父にも劣らざる、恩愛の情（なさけ）を卿に捧げむ、（國王、p. 23）

（4）さて此間（ま）に一同へ、申聞ける一事がある。それなる地圖を彼方へ遣せ。見られよ、予は王國を此通り三分致せしぞ。（中略）さて三人の王女達—今日以後、此父は王位を去り、領内の政治國事の懸念を悉く抛たむ覚悟なるが、さてそれに就き汝等三人の中、此父を愛すること尤も深きは誰なるぞ、同じ親子の間なれど、孝心優れし者にこそ、一の賞與（めぐみ）は許すべけれ。先づは姉姫ゴ子リルより、心中を語つて見やれ。（リア王、p. 4）

（5）（省略）こりやハムレットよ、詮無きを地に抛つて予（われ）をば真の父とも思やれ。すなはち國民（くにたみ）に、御身は即（やが）て王位を継ぐべく、まつた予（よ）が恩愛は慈父に異ならずと知しめ給へ。（王、pp. 17-18）

（6）（省略）女どもよ、今や予（よ）は、支配をも、所領をも、國事に関する心労をも悉く脱ぎ棄てゝしまはうと存するによつて、聞かいくれ、其方たちのうちで誰れが最も深く予（わし）を愛してをるか。真に孝行の徳ある者に最大の恩恵を與へようと思ふ。・・・・・・長女ゴネリルから申せ。（リヤ、p. 5）

³⁰ Brown & Gilman（1972:254）では“royal we”について次のような記述がある。現在、殆どの人は単複二人称代名詞として *you* を用いる。二人称 *thou* は、祈りと素朴な詩に限るが、昔は親しい関係の人に対して用いた。昔の *you* は、尊敬や丁寧な距離感の単数二人称として使用され、複数の人に話しかけるためにも用いられた。フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語等では、現在も丁寧と非丁寧な二人称の語法がまだ存在している。このような二人称語法に関する興味深いことは、社会生活の分析の二つの位相との近い関係である。その二つの位相は、権力と結束の位相である。ヨーロッパ語における二人称の二つの語法は、ラテン語の *tu* と *vos* から始まった。イタリア語では *tu* と *voi* となった（結局、*Lei* が *voi* とだんだん取り換えた）、フランス語では *tu* と *vous*、スペイン語は *tu* と *vos*（後は *usted*）、ドイツ語では区別は *du* と *Ihr* から始まったが、*Ihr* が立場を *er* に譲り、結局 *Sie* となった。最初、英語話者は区別するため *thou* と *ye* を用いたが、*ye* は *you* と入れ替わった。そして、非丁寧と丁寧な二人称語法を区別するために、便宜的な呼び方として *T* と *V* の記号を用いる（ラテン語の *tu* と *vos* から由来）。

古代のラテン語では単数の二人称として *tu* しか存在しなかった。複数形 *vos* を単数形として使うようになったのは、皇帝に対して話す時から始まった。どうしてこのようになったのかは諸説あるが、皇帝に対する複数形の二人称語法は四世紀に始まった。この当時には二人の皇帝がおり、その二人の皇帝は東にいたコンスタンチヌス（ノールプルの皇帝と西にいたローマの皇帝である。二人の皇帝がいたが、行政上に統一されていたので、一人の皇帝に対する言葉は二人の皇帝に対する言葉として見なされた。また、他の意味でも皇帝は複数の意味を表わした。皇帝は、市民の総括な存在であるため、彼らの代表として話すことが出来るので、自称として *nos* を用いられた。尊敬の *vos* は *nos* の対等として使われた。

他の説として、尊敬の *vos* は単なる皇帝の権力を示すために使われたと思われる。結局、ラテン語の単数形としての複数二人称の語法は、皇帝から他の権力者にも及んだ。

(7) こりゃ、ハムレットよ、詮無き哀傷を地に抛って予(よ)をば真の父とも思やれ。すなはち、国民に、御身は即て王位を継ぐべく、また予(よ)が恩愛は真の父に異ならずと知らしめ給へ。
(王、pp. 18-19)

(8) 女どもよ、今や、予(よ)は、支配をも、所領をも、国事に関する心労をも、悉く脱ぎ棄てゝしまはうと存するによって、聞かしてくれ、其方達のうちで、誰が最も深くわしを愛してをるか。真に孝行の徳ある者に最大の恩恵を與へようと思ふから。……長女ゴナリルから申せ。
(リヤ、p. 6)

(9) その詮無き悲しみを、おもひきって大地に投げ棄て、この王を真の父親とおもうてはくれぬか。さうだ、この機に広く中外に知らせよう。
(王、pp. 18-19)

(10) さあ、銘々言ってみるがよい、娘達、今や権力、領土、煩はしき政の一切を、みづからかなぐり捨てようとしてゐる私(わし)だが、お前達のうち、誰が一番この父の事を思うてをるか、それが知りたい、最大の贈物はその者に與へられよう、情においても義においても、それこそ当然の権利と言ふべきだ。ゴネリル、長女のお前から先に答へて貰はう。
(リア、p. 11)

(11) どうか無益な嘆きを振り捨てて、余をまことの父と思ってくれ。余はこの場で宣言してもよいぞ、お前こそ余の王位を継ぐべき人だ、そして余はもっとも慈愛深い父親に劣らぬ深い愛情をもってお前を愛しておるのだと。
(王、p. 152)

(12) その無益な悲しみをすて、わしのことを父親と思ってくれ。そうだ、この機会に公に宣しよう、わが王位を受け継ぐべきものはハムレットと。おまえにたいするわしの愛情は、実の父親の息子に対する気持にくらべて、いささかも劣らぬぞ。
(王、p. 224)

(13) どうだな、娘たち、わしは国家の統治権も、領土の所有権も、政務のわずらわしさもかなぐり捨てたいのだが、おまえたちのだれがわしをいちばん愛してくれるかな？親を思う心のもっとも深いものに、わしはもっともゆたかな情愛を示したいのだ。まずゴネリル、長女としておまえから言うがいい。
(リア、p. 246)

(14) そのあいだに、この胸の内に秘めて来た思いを明らかにしよう。その地図をここへ。よい、わしはわが領土を三つに分った。(中略) さあ娘たち——今から父は領土の支配権も所有権も、国事の煩わしさも総て棄て去ろうとしておるのだが——お前たちの誰が一番この父を愛しておるといえるか、気立てと取柄次第では、望みにまかせてこちら最高気前を見せてやるぞ。ゴネリル、長女としてまず答えてみる。
(リア、pp. 11-12)

(15) (省略) お願いだ、その詮(せん)ない嘆きを打ち棄てて、わしを父だと思ってくれ。お前がわしの王位を継ぐ者であることを、そして実の父親が息子に抱く愛に劣らぬ気高い愛情を、私人としてふんだんに注ぐさまを、とくと世間に見せてやりたいのだ。
(王、p. 33)

(16) (省略) 娘たち、(わしは今ここで支配の権力も領土の所有権もわずらわしい政治のことも、すべてかなぐり捨てるのだから) お前たちのうち、だれが一番、父としてのこのわしを愛しているか？言ってみよ。親の自然な愛情と子としての自然な孝心が合致したところに、当然の権利として最大の贈物が与えられよう。ゴネリル、お前は長女であるから、まず先に言うがいい。
(リア王、p. 17)

(17) (省略) だからどうか無益な悲しみはいさぎよく地に抛って、国王であるこのわたしを実の父親と思ってくれ。わたしの方も今ここで、お前をわが王位に直近の後継者であるとひろく宣言しよう。溺愛する父親が息子に抱く愛情にけして劣らぬ純粋高貴な愛情を、わたしはお前に寄せているのだから。(クローディアス、pp. 33-35)

(18) (省略) 予はいま王国の統治権、領土の所有権、政務の諸配慮、それらすべてを脱ぎ棄てるぞ、さあ言え、お前たちのうちだれがいちばんこのわしを愛しているか、子としての情が言葉の実とともにその権利を主張するところ、そこに当然親としての恩恵も最大に及ぼされる。ゴネリル、お前が長女だ、最初に言え。(リア王、p. 11)

上記の用例で分かるように、『ハムレット』と『リア王』の原文における“royal we”のさまざまな翻訳方法がある。例えば、明治期の戸沢訳の(3-4)では、文体の書き言葉的な要素が強い文語文が使われるので、(3)のクローディアス王は「朕(われ)」を用い、(4)のリア王は「予(よ)」を用いると考える。クローディアス王以外、「われ」を用いるキャラクターがいるものの、クローディアス王の表意文字は「朕³¹」であり、他は基本的に「我」で表される。坪内訳(5-6)にも「予(よ)」と「予(われ)」の使用が見られ、(7-8)の改訳もほとんど「予(よ)」となっている。三神訳の(11)にも同じ傾向の「余」が見られ、より古い訳では王様キャラクターは、“royal we”として「よ(余/予)」を使わせることが多いように見える。刘(2012:48)では「よ」に関する以下の引用がある。

実際戦前までは身分を問わず一般的に使用されていたが、戦後は口語ではほぼ使用されなくなった。現代日本語コーパスの用例を見ると、その多くは時代もののフィクション作品の台詞の中に用いられ、時代もののフィクション作品ではない用例も、その作品の作者の生年代は1900年前後の者が多い。つまり、戦後における「余・予」の使用は、「疑似古語」としてのみであると言える。「余・予」を用いるキャラクターを見てみると、[27]～[30]の用例のように、ほとんどは將軍や藩主のような身分の高い男性が自称する時に用いられている。[30]の場合、発話キャラクターの年齢は幼いが、徳川家当主という身分であるため、「余・予」と自称している。しかし、「疑似古語」としての「余・予」は尊大なイメージを持っているため、「余・予」と自称していい場面とそうでない場面が存在すると言える。

本稿では「疑似古語」を〈時代ことば〉と呼び、「よ」は尊大なイメージを持つようであるから、王様キャラクターに相応しい語法と考えられる。そして、刘氏によると、「よ」は必ずしも高齢のキャラクターに使われるのみならず、身分が高く、若いキャラクターに使われることもある。

また、『日本国語大辞典』の「よ【余・予】」項目においても、「われ。おのれ。自分。」という自称とされ、明治以降も改まった、あるいは尊大な表現として用いられたと記されており、『角川古語大辞典』にも「予」「余」は同意の文字で、漢語で「われ」を表わすとされているので、「よ」と「われ」の近い関係を示す。明治期では、「よ」は尊大な表現として用いられ、これらの作品の王様キャラクターによる一人称代名詞として選ばれたと考えられる。

ブラウン(1863:xxxvi)では江戸時代の一人称代名詞の以下の記述も見られる。記述からも分かるように、当時では大君や高い地位を持つ貴族は、自分より地位が低い者に対して「よ」を用いた。さまざまな先行研究によって「よ」の尊大さや身分高い人物に使われた一致があるため、シェイクスピア劇の近代訳の「よ」使用とも一致していると考えられる。

³¹『国史大辞典』の「ちん【朕】」項目でが、日本においても『日本書紀』の中で詔の自称としてこの語が「我(吾)」と並んで用いられ、『古事記』では序文の中の天武天皇の詔の中にだけこの語がみえるが、『続日本紀』では宣命の中にしばしば用いられていると記されている。はじめは「われ」「あれ」と訓んだものと思われるが、詔勅の多くが宣命体でなく漢文で書かれるようになってから「ちん」と音読されるようになったとも記されている。

The emperor, for the pronoun of the first person, use (朕) Shin, which may signify, subtle, recondite. The Taikun, or any noble man of high rank, would use Yo (余 or 予) when addressing inferiors, and Watak'shi if speaking to a superior. To a friend they would say Sessh's (拙者) meaning. Officers of government would use Sessh's and Watak'shi, in like circumstances. Washi is use by persons of inferior station, when speaking to those under them. The meaning of Watak'shi is still uncertain. It is the word most generally used for the first person. Washi and Ore are used by the common people for I.

そして、「よ」のみならず、「わし」も日本語訳の“royal we”として、特に現代訳でうかがえることが多い。例えば、用例 (12-13) の小田島訳から「わし」が「よ」より使用されるようになり、野島訳の (15-16) まで「わし」が多用されるが、大場訳から (18) で分かるように、“royal we”の一つの一人称として「わし」を使う傾向があり、「よ」も使われる³²。さらに、用例 (17) では「わし」や「よ」でもなく、中立的な「わたし」が尊厳の複数として用いられる。

藤本 (2014:202) では、「わし」は武士の間に広まり、さらにそれが権威のある物言いとして、年配者の話にも用いられるようになり、次第に「わしが知つとる」のように「わし」という一人称は、老人、博士などのキャラクターの特徴となると記されている。さらに、『国語大辞典』の「わし【私】」項目において、「現在では、尊大感を伴って目下の者に対して、男性が用いる」との記述もある。そこで、「わし」は歴史的な使い、権威や老人との関係があるため、現代フィクションの王様キャラクターに多用されると考えられる。上記の「2. 2. 5.」の用例 (34) にも見てきたように、「わし」は権力者の武士の一人称として使われることがある。

また、日本語訳としての“royal we”についてつけ加えて述べれば、必ずしも王様キャラクターが“royal we”を用いるわけではない。例えば、野村訳の『リア王』では、リア王のみならず、グロスター伯も「わし」を用いる。しかし、グロスター伯が「わし」を使うのは自分がその場の発話者の最高位者の時のみであり、原文において尊厳の複数を一度も使わない。リア王あるいは、自分 (グロスター伯) より身分の上のキャラクターが同じ場にいれば、「私」等を用いる。そこで、それぞれの訳の最高位の一人称代名詞があるとして、その場の最高位者によって主に使われるので、“royal we” (尊厳の複数) というより権限の言葉として用いる³³。また、原文では“royal

³² 『ハムレット』と『リア王』において、王様キャラクター以外に“royal we”を用いるキャラクターもいるが、王様キャラクターと同じ一人称を用いない。例えば、野島訳の『リア王』で出て来る王女リーガンは、“royal we”を使う時があり、「私」として訳される。そして、同訳者の『ハムレット』のハムレット王子は、全幕中“royal we”を一度しか用いず、クロードィアス王が“royal we”として使う「わし」ではなく、「予」を使う用例がある。

いいえ、それこそ私がこの方に差し上げたいと願う資格です。

(リーガン、p.266)

予は仰せに従おう、母上が十層倍も予の母であろうと。まだ何か用があるか、予に？ (ハムレット、p.179)

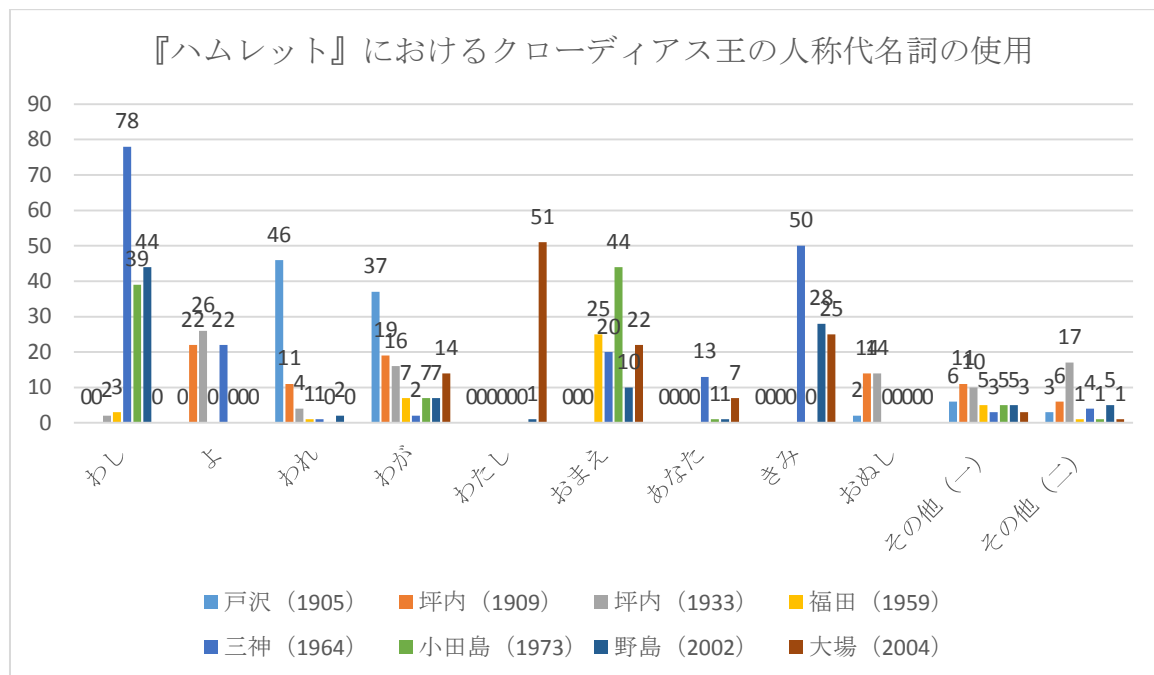
戸沢訳のリーガンは「妾」を使い、坪内訳は「私共 (てまへども)」。大場訳のリーガンは「わたくし」を用いる。戸沢訳では、ハムレットは「拙者」を用い、坪内と大場訳では、“royal we”は訳されていない。典訳では *vi* の尊厳の複数が使用されている。

³³ Brown & Gilman (1972:255) は、「権力の意味論」という章で人称代名詞の上下関係について次のように説明する。ある人は、他の人の行動をコントロール出来るほど権力を持つと考えられる。権力は、二人の関係であり、同じ程度の権力を持つことが出来ないため、対等な関係ではない。権力の意味論 (セマンティック) も同じく対等ではなく、上の者は *T* を用い、*V* を受ける (*T* と *V* については脚注 30 に参照)。

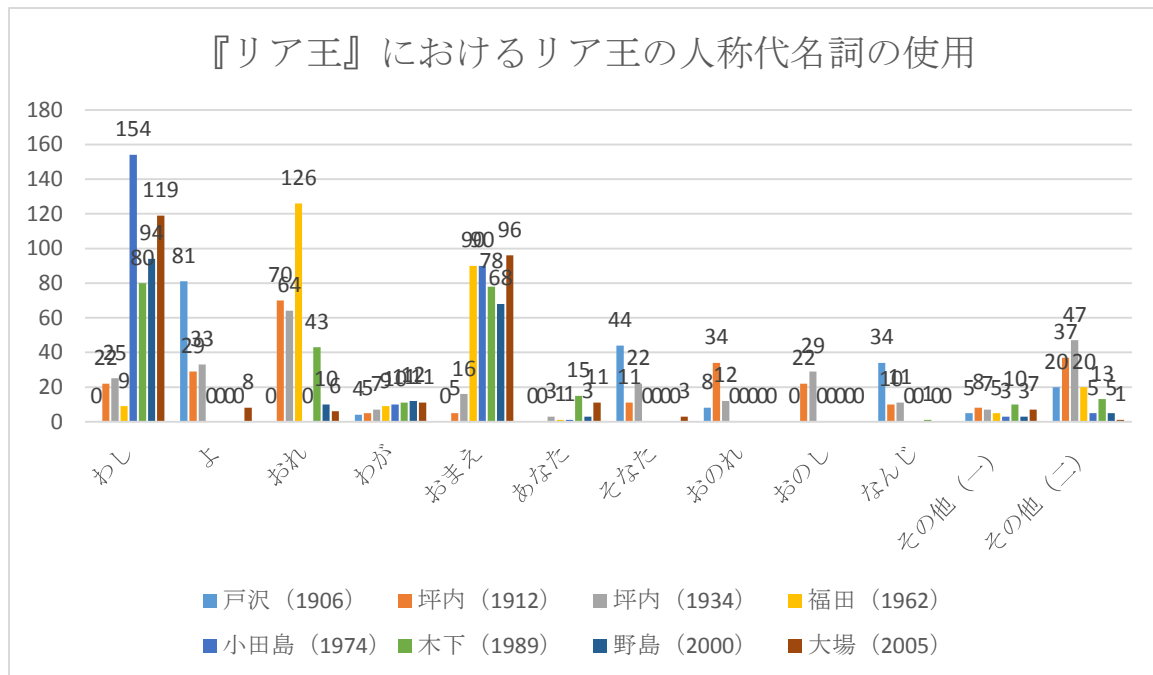
権力のさまざまな基礎がある。その基礎の中で、腕力、財産、年齢、性別、教会で制度化された役割、政府、軍や家族の中等がある。権力の意味論 (セマンティック) の性格は、さまざまな言語の用例において明らかになる。グレゴリー教皇 (590-604) は手紙の中で部下に対して *T* を用いたが、部下は教皇に対して *V* 使用した。封建時代のヨーロッパでは、貴族は基本的に市民に対して *T* を使い、*V* を受けた。家庭の主も奴隷、下部や従者に *T* を使い、必ず *V* と言われた。どの階層の家庭でも両親から子供に対する呼び方も同じであった。15 世紀のイタリアでは悔悟者は神父に *V* を用い、*T* 体で呼ばれた。フロワサール (14 世紀末) では、神様は天子に *T* を用い、

we”が使われていたら、どの訳の王様キャラクターでも自分に指す際に単数形を用いるため、“royal I”（「尊厳の単数」）の方が相応しい呼び方と考えられる。この語法は、Brown & Gilman（1972:254）が述べる西洋で使われる *tu/vos* の使用に似ている。Brown & Gilman 氏は、古代のラテン語では単数の二人称として *tu*（単数）しか存在せず、複数形 *vos* を単数形として使うようになったのは、皇帝に対して話す時から始まったと述べる。どうしてこのようになったのかについては諸説あるが、皇帝に対する複数形の二人称語法は四世紀に始まったとされる。この当時には二人の皇帝がおり、その二人の皇帝は東にいたコンスタンチノープルの皇帝と西にいたローマの皇帝である。二人の皇帝がいたが、行政上に統一されていたため、一人の皇帝に対する言葉は二人の皇帝に対する言葉として見なされた。また、他の意味でも皇帝は複数の意味を表わした。皇帝は、市民の総括な存在であり、彼らの代表として話すことが出来るから、自称として *nos*（複数形一人称代名詞あるいは、尊厳の複数）を用いた。尊敬の *vos* は *nos* の対等として使われたと Brown & Gilman は述べる。方法が少し異なっても、このような語法は、日本と西洋の大きな共通点であり、権力者のキャラクターは、自分に使えない人称代名詞等を使う場合があると知られるであろう。

最後に以下の図表は、日本語訳の『ハムレット』と『リア王』の王様キャラクターによって使われる一と二人称代名詞のまとめである。



Vを受け、全天人は同じく人間に対して Tを使い、Vが返された。また、コルネイユ、ラシーヌやシェイクスピアの劇では主要な貴族は部下に対して Tを用い、Vを受ける。



34

以上の図表によると、現代訳の『ハムレット』と『リア王』において「わし」が尊厳の複数として特に使われていることが分かる。しかし、近代の戸沢訳や坪内訳の場合では文語的な「よ」が使われることが見られる。文語的な「よ」が使われるのは、上記のブラウン（1863:xxxvi）のように、明治以前の江戸時代では「よ」は身分の高い者との繋がりがあったと考えられる。同じ引用の中で「わし」と「おれ」は、身分低い者や一般人によって最も使われた一人称とされており、坪内訳等で一般的な一人称として使われている可能性がある。

また、『リア王』では「わし」や「よ」以外、「おれ」も多用されていることが図表から分かる。『リア王』では、「おれ」が使用されるのは、原文におけるリア王が単数の一人称代名詞を用いる時である。しかし、そうとも限らず、日本語版では単数の一人称としての「おれ」や以上に尊厳の複数（単数）としての「よ」の混用も見られ、小田島や野島訳のように一人称があまり変わらないケースもある。例えば、以上の坪内（1934）による用例（8）では“royal we”は「よ」等に訳されているが、同訳の以下の用例（19）で分かるように単数形の *I* を使っても「予（よ）」と「おれ」の両方に訳される例がある。

(19) Darkness and devils! Saddle my horses. Call my train together. Degenerate bastard, I'll not trouble thee; yet have I left a daughter. (p. 74³⁵)

おゝ、おのれ / \ ! 予（よ）が乗馬に鞍を置け！ 家来共を呼び集めい！……道知らずの妾腹めが！ おのれが厄介にはならんわい。 おれにはまだ一人娘兒があるわい。 (p. 65)

本節の『ハムレット』と『リア王』における二人称代名詞の使用について、福田訳（1959/62）から「おまえ」が多用されるようになる。『日本国語大辞典』の「おまえ」項目によると、「おまえ」は、対等もしくは下位者に対して用いる二人称代名詞であり、江戸後半期に至って生じた。また、現代訳の『ハムレット』では「おまえ」以外に「きみ」もよく使われる。『日本国語大辞典』では「おまえ」と同様な記述があり、「現代語では、同等または目下の相手をさす男性語」とされている。

³⁴ その他（一）＝その他の一人称代名詞

その他（二）＝その他の二人称代名詞

³⁵ 英語の文章は、大場（2005）で使われる原文による用例である。

また、近代の戸沢訳と坪内訳では、二人称がさまざまに用いられている。具体的には、「おぬし（おのし）」、「そなた」や「なんじ」等の使用が認められる。岩田（2014:50）は、「おぬし」とは対等、もしくは目下の者に用いる二人称代名詞だと述べる。また、同種の言葉には「そなた」があり、目下の者の中でも対等に近い人物、親近感のある人物に対して用いられることが多いという。そして、明治時代の小説では、「おぬし」の使用は時代物の小説に使用が偏っているとも述べる³⁶。そして、ブラウン（1863:xxxvi）江戸時代の二人称について以下のように述べる。この引用のように、戸沢訳の特にリア王による「なんじ」の使用が見られる。そして、以下では「おまえ」は一般人が用いる二人称だとされているものの、上記の図表のように、現代では王様という身分が高いキャラクターによって二人称として多用されていることが分かる。

For the second person, the emperor is addressed by the courtiers with Shin, meaning your majesty. Addressing his attendants the emperor uses Nanji, which is derived by contraction from na-mochi, having a name or illustrious. (...) Omae' which is of the same import of Gozen, is used among the common people when addressing each other especially at entertainemnts where the wine flows freely. It is also used as a pronoun of less respectful import than Anata.

王様キャラクターによる現代の「おまえ」や近代の「おぬし」は、両方とも対等もしくは目下の者に対して使われる二人称であり、一人称の「わし」や「よ」とともに使われるのにふさわしいと考えられる。Kraemer（2010:40）によるケーススタディでも、王様キャラクター（Kraemerでは「殿キャラクター」）は、二人称代名詞として「わし・よ」と「おまえ」を使うことが多く、より若い王様キャラクターの話し方に「おれ」も見られる。

上記の西洋の権力者による *tu/vos* や *royal we* の使用のように、『ハムレット』と『リア王』における王様キャラクターは、相手から自分に使えないが、相手に非丁寧な「おまえ」を使用し、会話の最高位者であるなら「よ」や「わし」を尊大な一人称や相手を見下す「おまえ」を二人称として用いる傾向がある。

3. 3. 1. 2. スウェーデン語訳

スウェーデン語における『ハムレット』と『リア王』では原文の英語と同じような一人称代名詞の使用の傾向があった。用例（1-2）では原文における一人称の *royal we*（尊厳の複数）の用例を取り上げ、以下の（20-23）は同じ個所のスウェーデン語訳である。用例（20-21）は Hagberg 訳の『ハムレット』と『リア王』であり、（22）と（23）は、それぞれ Pyk と Ristarp 訳である。特に一人称が使われる個所に注目するため、一人称に当てはめる言葉に下線を引いた。

（20） Ty med en kärlek icke mindre ädel, Än den som nånsin huldrik fader hyst, Jag älskar dig. Men hvad din återresa Till skolan uti Wittenberg beträffar, Så är den på det högsta mot vår önskan. Vi bedja därför dig att dröja qvar Uti vårt ögas blida hägn och trefnad, Vår förste hofman, frände och vår son.
(Konungen, p. 9)

（21） – Nå döttrar, sägen – Då nu vi kläda af oss herrskarmakt Landsherre-rättighet och statsbekymmer – Hvem af er är nu den, som högst oss älskar? På det vår högsta nåd bi dit må sträcka, Der högsta värdet kräver, - Gonneril, Du vår förstfödda, tala först!
(Lear, p. 3)

（22） Må det så ske! Gå och byt om från denna icke anbefallda klädsel, och se oss som din far, så folk förstår att du en gång ska följa oss på tronen, för med en kärlek väl så stor som den en far kan visa sina egna söner har jag i dag beslutat så.
(Claudius, p. 25)

³⁶ 岩田（2014:51）によると、江戸時代後期には一般に使われていた「おぬし」が、明治時代に入り、次第に使用されなくなり、「古くさい言葉」と認識され、この古くささから、その後、〈武士ことば〉や〈老人語〉として使用されるようになったと考えられる。

(23) Så säg mig, döttrar, när nu **vi** ska klä av **oss** all vår makt, och landanspråk och statsbekymmer – vem av er ska **vi** då säga älskar mest sin far, så **vi vår** största givmildhet må räcka just åt den som av natur och av merit förtjänar den. Goneril, **vår** äldsta dotter, du får tala först. (Lear, p. 13)

Nahlbom (2013) は、以上の訳について、シェイクスピア研究の中で訳し方には二つの理想があると述べている。一方は、シェイクスピアを偉大な詩人として見なし、彼のスタイルは欠点のないものであるから原文に近いスタイルを形作ろうとするもの。もう一方は、スタイルを現代の観客に合せたいと考え、劇で使われる言語は現代化するものである。1847-51 年の Hagberg 訳については、当時の現代的な言葉遣いを用い、分かりやすさとリアルさを目指したと述べる。シェイクスピアが使ったメタファー等をより理解しやすくしたかったのだろうが、当時の劇的な習慣にもとらわれていたがため、倒置文や動詞の複数形といったような古風な習慣も見られる。そして 2010 年の Ristarp 訳では翻訳の断続的な訳し方が見られず、古語的と現代的要素が混ざり合っており、慣用的なスウェーデン語と原文に近い意味論とともに使用している³⁷。そこで、前述の時代劇に人気のある現代と古風的な言葉を混ぜることの要素が見られることが分かる。

続いて、以上の用例の下線部では原文と同じ王様キャラクターによる“royal we”に相当する **vi**、**oss** や **vår** 等（英語の *we*、*us*、*our* と同じ）の使用が多く見られ、他のキャラクターは基本的に単数形の **jag** のみを用いる。二人称代名詞の面でも、Brown & Gilman (1972:255) が述べるような、貴族の市民に対する **tu**、市民に **vos** を受け、家庭の主も奴隷、下部や従者に **tu** を使い、必ず **vos** と言われたように、スウェーデン語訳の『ハムレット』と『リア王』における王様キャラクターも基本的に非丁寧な **du** (*tu*) を用い、丁寧な **ni** (*vos*) を受ける。

昔のスウェーデンの王家にも Brown & Gilman (1972) が取り上げるような“royal we”使用の習慣があり、上記例の『ハムレット』と『リア王』で出現する王様キャラクターの発言で分かるように複数形一人称 **vi** を単数形として自分に用いる。特に公開の場における王による勅令

(kungöra=勅令する) では、複数一人称がよく使用され、Bergman (2013:206) によると勅令は **Vi Gustaf Adolf...** (われわれグスタフ・アドルフ) や **Vi Oscar...** (われわれオスカル) で始まることが多い。現在、スウェーデンの在位の王様は、スピーチ内であまり“royal we”を用いないものの、1973 年に行われた即位式のスピーチでは王様は **Vi Carl Gustaf Sveriges konung...** (われわれカール・グスタフ、スウェーデンの王は...) と述べ、宣誓の一人称は尊厳の複数となっており、即位式における決め台詞だったと考えられる。

スウェーデン・アカデミーの辞書にも Bergman (2013) と同じような記述が見られ、自分を指すのに **vi** を用いることは *pluralis majestatis* と呼び、儀式的な場面で使われると記されている

³⁸。

³⁷ 本節にて取り扱わなかった訳について、Nahlbom 氏は、1961 年の Collinder 訳は、保守主義的な翻訳であると述べる。外来語の使用は好ましくなく、国内由来の言葉を使うべきと主張した。そのため、Hagberg 訳のように、テキストはかなり古語的である。また、1983 年の Hallqvist 訳には古語的要素をできるだけ少なくし、劇場で台詞がより順調に流れるように翻訳を行った。言語は、現代的であったから、以前に触れた翻訳と異なり、話し言葉や文法的な要素が強かった。

³⁸ 王様は、親しい人と話す際に、複数形の一人称 **vi** ではなく、基本的に単数形 **jag** を用いた。複数形の一人称を用いても（以下の用例における一段落目の **vår** 等）、自分のみならず複数人に指す際に用いる。王様が単数形の一人称を用いる用例として、カール 12 世から妹エレオノラへの手紙が取り上げられる。内容として、一段落目では、王女が病気になるため、連絡したと王は言う。二から三段落目は、友人との狩りの話である。四段落目は、回りの貴族たちが最近少し病気になる話をしてしている。

Durchleychtigste Princess,
Aldra kiäreste Syster!

Jagh hafwer bekommit min hiertans Systers brefw, waraf **iagh**, gubettre, förnummit, at Dråtningen blifwit illa Siuk. Hoppas medh guds hielp, at dhet blifwer bettre medh henne. **Wår** herre bewara henne och er alla för Cristi skuldh!
Här passerar intet stort i winterquarter, förän lägeligt blir, at man får giöra något. Magnus Stenbock och Axel Sparre erhålla

最後に、『ハムレット』と『リア王』におけるスウェーデン語訳の複数一人称 *vi* は、原文の *we* とほぼ同じ箇所で見られるため、〈王様ことば〉の役割語より、単なる逐語訳として見なすことができる。しかし、複数一人称の *vi* 使用は、現代フィクションの時代小説にも見られるものである。例えば、Guillou (1999) の *Tempelriddaren* (本小説の『十字軍騎士のアーヌ』は 12 世紀末の十字軍騎士に関する話) では (24) の王様と (25) の女王様キャラクターは、自分のみを指して話す際に *vi* を用いる用例がある。さらに、*vi* とともに非丁寧な単数二人称 *du* も目下の話し相手に使用する。以下の用例の設定は、勅令のような王家が話す公開イベントであるため、*vi* を用いるが、同じキャラクターは、友人等と話し際に単数形で一般的な *jag* を用いる。しかし、国の最高位者として、非丁寧な *du* しか使わず、丁寧言葉の *ni* を使うことはない。

(24) "Vi hälsar dig till vårt gästabad här på Gudhem, Cecilia Algotsdotter" (Knut Eriksson, p. 128)

(25) "Du är fru i Guds ordning och vi är bara drottning i jordelivet bland människorna, säger du. Vi kan inte bestämma över Gudhem, det är vad du menar. (Cecilia Blanka, p. 185)

スウェーデン語訳『ハムレット』と『リア王』は逐語訳かどうかはともかく、*vi* が王様の言葉として歴史的に使われる習慣があり、王様キャラクターのステレオタイプの言葉遣いとして捉えられると考える。原文がスウェーデン語である以上の *Tempelriddaren* (『十字軍騎士のアーヌ』) の使用によって、一人称代名詞の *vi* は〈王様ことば〉だと考えられる。

3. 3. 2. 『ハムレット』と『リア王』における命令形

3. 3. 2. 1. 日本語訳

本節の調査対象は、王様キャラクターが用いる言葉である。王様は他人より上の立場に在るため、国の指導者（最高位者）としてよく命令的な発言をされると考えられる。そこで、王様キャラクターの人称代名詞の他にも、『ハムレット』と『リア王』における〈王様ことば〉の命令表現としてどのような特徴があるかを調査した。

王様キャラクターは、上記の『リア王』からの用例 (2) をみて分かるとおり、*speak first* のような強い命令形を用いることが多い。この強い言い方は、日本語訳にも反映されていた。例えば、上記の用例 (4/6/8/14/18) では原文における *speak first* の強い命令形は「申せ」や「答えてみろ」の厳しい命令表現に翻訳されている。そして、「申せ」等のほどではないが、王しか他人に使えない「～がいい (よい)」の上からの目線の命令表現も見られる。そして、Brown & Gilman (1972) の概念を借りれば、王様キャラクターは、「お～ください」のような *vos* 言葉（尊敬語）で返される。さらに、用例が比較的少ないものの、王様キャラクターも丁寧な (*vos*) の命令表現を用いることがあり、自分の存在より上である神様に「たまえ」や「ください」を使う³⁹。

måhlrohn och har allahanda optogh iblandh.

En gång har här varit Elgiack. Bara iagh, Magnus Stenbock och Wrangel war dherupå och kom sent hem och gjorde tåcke alarm, så at samma mente, att Rytzen war dher, samma begynte ropa effter pistolerna och H. Nils togh till stekspette, effter hans puffertar, som han förde i slaget, wore borta och lagas. Här går alt lustigt the.

Hoffolket, dhe äro wekeliga här och siukna något. H. Nils Camerat, Aronius har/r/ dragi åf. Apetekaren, fast hand hade alla kryddor, ha/r/ och måstta deran och åhtskilliga andra.

Och iagh förblifwer altidh min kiäre Systems underdånigsta tienare och broder Carolus

P.S. Jagh ber om förlåtelse, at dhet här brefwet i hast är något illa skrifwet.

(Bergman 2013, p. 120)

³⁹ リア王は、神々に対して「神々よ、忍耐を与えたまえ、私に必要な忍耐を！ ごらんください、神々よ、このあわれな老人を、年の数ほど悲しみをかさね、押しつぶされております。」(小田島 (1973)、p. 283) を用いることがある。

以下の(26)から(32)の用例ではクローディアス王は、部下のレアティーズと会話し、原文において命令表現を用いているが、あまり強い言い方ではないため、以下の(26)の『ハムレット』からの用例のようなやさしい言い方となる。

(26) **Take thy fair hour**, Laertes; time be thine, and thy best graces spend it at thy will.
(大場、p. 28)

(27) レアチーズよ、此上は世の春はお主のものぢや。心任せに楽しい日を送るがよいぞ。
(坪内(1933)、p. 16)

(28) 気ままに遊んでこい、レアチーズ。来る春はお前のもの、その気性だ、むだにはしまい
(福田、p. 19)

(29) よろしい、では自由に行くがいい、暇をやるから。せいぜい愉快に勉強してくるのだぞ。
(三神、p. 151)

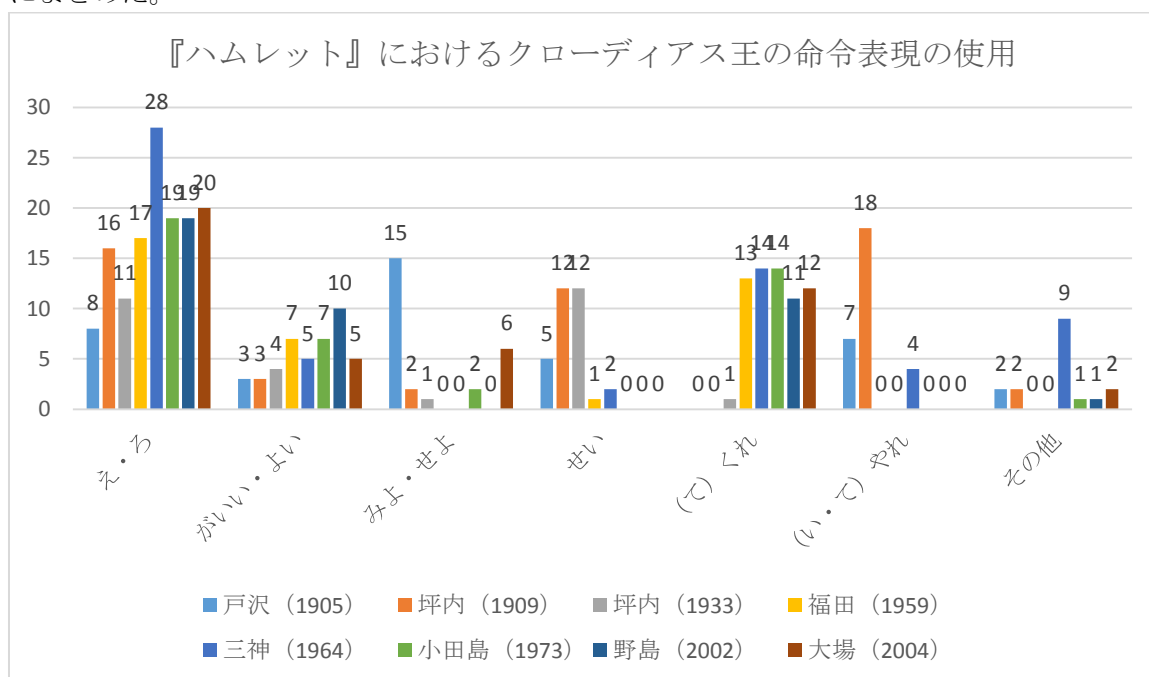
(30) 楽しんでくるがいい、レアチーズ、おまえのことだ、自由気ままにすごしても時をむだにはしないだろう。
(小田島、p. 223)

(31) では、レアチーズ、青春を楽しむがよい。好きなだけ滞在するがいい。
(野島、p. 30)

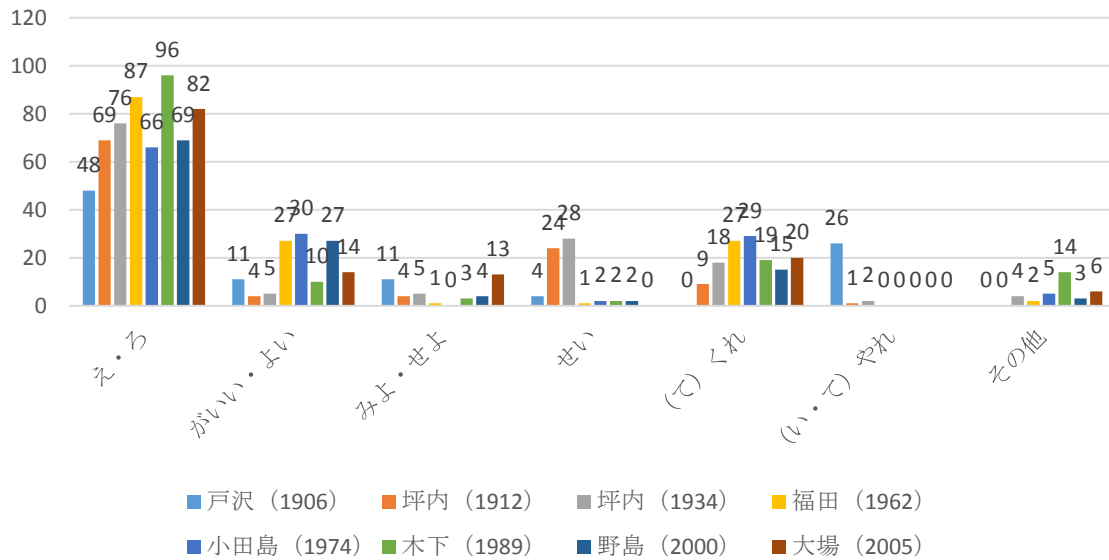
(32) 楽しんでくるがよいレアチーズ、二度とない青春だ、お前の美質を発揮して思う存分にな。
(大場、p. 29)

以上の用例から分かるように、あまり強い命令表現を使わなくとも、日本語版では人称代名詞のように、王様キャラクターは自分に使えない「～がいい/よい」の命令表現を他人に用いる。

そして、王様キャラクターによる命令表現の使用傾向を示すため、命令形の語法を以下の図表にまとめた。



『リア王』におけるリア王の命令表現の使用



図表を見て知られるように、『ハムレット』と『リア王』では王様キャラクターが使う命令形は、断固とした言葉遣いが多い。両作品にも、本節で「え・ろ」と呼ぶ命令形に偏っている。この命令形は「行け」「来い」や「しろ」等の語法に指すものであり、どの訳でも圧倒的に使用されている。「え・ろ」以外、特に「(て) くれ」と「～がいい(よい)」の使用が多い。

命令形の「(て) くれ」は他の命令表現の使用と異なり、上から下のみならず、同士の間にも使用されることもある。佐藤(1992:128)によると、話し手が「してくれ」の文を選んで発話する条件にはさまざまな条件があり、その条件は複雑に絡み合っていると述べる。一つの条件として、話し手は相手と自分の関係に配慮しながら、誘い掛け文を使い分けると佐藤氏は述べる。さらに、佐藤(1992:129)によると「してくれ」は、同一の発話場面における同一の聞き手に対して、異なる形の誘い掛け文を共存させて用いることがある。例えば、「してくれ」の文の後に「しろ」の命令形が現れたりすると述べる。また、「してくれ」の文と共存が可能な命令や依頼表現との間には、聞き手に対する関係(＝待遇性)の上で共通な点があると述べる。

佐藤(1992:134)は、「してくれ」を用いることのできる話し手と聞き手との間の関係を用例から取り出すと以下になると述べる。

友人同士、職場の同僚同士、軍隊の同僚同士、上等兵から二等兵へ、夫から妻へ、男からその恋人へ、兄から弟へ、父から娘(息子)へ、叔父が甥へ、先生から生徒へ、会社の上司から部下へ、検察官から検察署長へ、医者から看護婦へ、駅長から駅員へ、会社員から給仕へ、客から店員へ、店の主人から小僧へ、宿泊客の男から女中へ、男から宿の女将へ、男から運転手へ、刑事が容疑者へなど。

これらの用例から分かるのは、「してくれ」を主に用いるのは聞き手より上位にある男性だということであり、本節で取り扱う王様キャラクターに相応しい言葉遣いだということだ。

命令表現の「～がいい(よい)」も多用される。金水(1995)は『浮世床』における述語に関する調査をし、「～がいい」を取り上げる。『浮世床』では「スルガイイ」「シタガイイ」や「シネエガイイ」という文型が現れ、次のような行為の妥当性の「悪くいたづらをするなら叱るがいゝ」を表わす表現だと金水(1995:83)は述べる。さらに、この「～がいい」の表現は、多分に慣用的な使い方であり、助詞「の」のない作用性名詞句の一種だと考えられようと述べる。封建時代やフィクションにおける王様とは、国のトップとしてどの行動が正しいか、他人に決め

つける権利があるから、「行為の妥当性」を表わす「～がいい」という表現も王様キャラクターの話し方に適していると考えられる。そして、命令や促し等が必要であるが、「やれ」や「しろ」のような乱暴な命令形が必要ない時、より優しい言い回しの命令形の代理として「～がいい」が使われると考えられる。

3. 3. 2. 2. スウェーデン語訳

スウェーデン語版の『ハムレット』と『リア王』における命令形は、相当に強い表現で表せる。以下の(33)と(34)は、それぞれ上記の(21)と(23)に相当する用例である。これらの用例のスウェーデン語版では日本語版と似たような傾向が見られ、注目したい部分に下線部を引いた。用例(33)は Hagberg 訳であり、(34)は Ristarp 訳からの引用である。スウェーデン語では命令の活用形があまり変わらず、*tack (please)* 等を追加することで「～てください」のような命令形になるものの、一応以下のように使われている。

(33) – Nå döttrar, sägen – Då nu vi kläda af oss herrskarmakt Landsherre-rättighet och statsbekymmer – Hvem af er är nu den, som högst oss älskar? På det vår högsta nåd bi dit må sträcka, Der högsta värdet kräfver, - Gonneril, Du vår förstfödda, tala först! (Lear, p. 3)

(34) Så säg mig, döttrar, när nu vi ska klä av oss all vår makt, och landanspråk och statsbekymmer – vem av er ska vi då säga älskar mest sin far, så vi vår största givmildhet må räcka just åt den som av natur och av merit förtjänar den. Goneril, vår äldsta dotter, du får tala först. (Lear, p. 13)

用例(2)で取り上げたように、下線部における原文の命令形は、それぞれ *Tell me* と *speak first* となっている。最初の *Tell me* は「(私に) 教えてくれ」というニュアンスを持つ依頼表現である。用例(34)の Ristarp 訳にも同じニュアンスが入っており、*säg mig (tell me)* も「私に教えてくれ」という逐語訳的な意味だと考えられる。しかし、(33)と(34)にも *tala först* (最初に言え) という命令の基本形が見られるが(34)では *du får (you may)* という許可を与える台詞も追加されており、「最初に話してもいい・話すがいい」を和らげたようなニュアンスがある。このような和らげは Ristarp 訳で現れるものの、この訳の次の台詞ではリア王はまた *Tala*⁴⁰ (言え) の強い命令形を用いている。

用例(33)の Hagberg 訳では「言え」という強いニュアンスがある上で、聖書語的な要素も見られる。下線部の *sägen* のように、聖書からの影響として「2. 2. 2.」で取り上げた二人称複数を表わす命令形の末尾 *-en* 形が付けられている。この命令形の末尾は複数を表わしており、1526年の新約聖書で使われたが、Hagberg 訳の当時では動詞の複数形は、既に廃れた語法であった。そして、上記の用例で見てきたように、末尾 *-en* 等は、〈神様語〉(「2. 2. 5. の用例(25)等」)として使われたり、現代作品で古典的なスウェーデン語(「6. 2. 3.」の用例(10))を表わしたりするのに用いられた。しかし、王様や神様の話し方に特徴をつけるより、話全体に古語的な雰囲気をつけるのに用いられていると考える。なぜなら、リア王以外、他のキャラクターもこの古語的な言葉を次のように用いるからである。*Nå väl, men svärjen.*⁴¹ (日: この剣にかけて誓え。〔二人、柄に手をのせる〕、野島(2002:76))、このようにハムレット等も複数の話し相手に命令する際に、当時の1900年代の廃れた命令形を用いる。

3. 4. 第3節のまとめ

本節でシェイクスピアの『ハムレット』と『リア王』の日典訳において、王様キャラクターは、どのような人称代名詞と命令形の使用傾向があるかを調査した。明らかになったことは以下の点のごとくまとめられる。

⁴⁰ p. 13

⁴¹ p. 26

- 原文における『ハムレット』と『リア王』の王様キャラクターは、両方とも一人称としえ *we*、*us* や *our* のような“royal we”（尊厳の複数）を用いることが分かる。“Royal we”とは、複数形の一人称を一人の自分のみに指して使う一人称であり、王様や女王様のような王家に使われる尊大な語法である。しかし、日本語訳における王様キャラクターは、自分に指すのに複数形の一人称代名詞を用いず、単数形を用いるため、本稿では「尊厳の単数」と呼ぶ。
- 明治期の『ハムレット』と『リア王』における尊厳の単数は次のようである。戸沢訳では、文体の書き言葉的な要素が強い文語文が使われるから、クローディアス王は「朕（われ）」を用い、リア王は「予（よ）」を用いると考える。クローディアス王以外、「われ」を用いるキャラクターがいるものの、クローディアス王の表意文字は「朕」であり、他は基本的に「我」で表される。坪内訳にも「予（よ）」と「予（われ）」の使用が見られ、坪内による改訳でもほとんどの一人称は、「予（よ）」となっている。
- 三神訳にも同じ使用傾向の「余」が見られ、より古い訳では王様キャラクターは、尊厳の単数として「よ（余/予）」を使うことが多いように見える。
- 現代訳では、「よ」のみならず、「わし」も尊厳の単数として、用いられることが多い。特に小田島訳から「わし」が「よ」より使用されるようになり、野島訳まで「わし」が多用される。しかし、大場訳では、一つの一人称として「わし」が使われ、「よ」の使用もある。さらに、大場訳の『ハムレット』では「わし」や「よ」でもなく、中立的な「わたし」がクローディアス王によって一人称として用いられる。
- 『リア王』では「わし」や「よ」以外、「おれ」も多用されていることが分かる。『リア王』では、「おれ」が使用されるのは、原文におけるリア王が単数の一人称代名詞を用いる時である。しかし、野島訳のような、ほぼずっと同じ一人称（「わし」）の使用を保つ訳もある。
- 二人称複数使用の面では、近代の戸沢と坪内訳において「おぬし（おのし）」、「そなた」や「なんじ」等の使用が多い。そして、福田訳（1959/62）から現在にかけて「おまえ」が多用されるようになる。
- スウェーデン語における『ハムレット』と『リア王』では原文の英語と同じような一人称代名詞の使用の傾向があり、王様キャラクターによる“royal we”に相当する *vi*、*oss* や *vår* 等（英語の *we*、*us*、*our* と同じ）の使用が多く見られ、他のキャラクターは基本的に単数形の *jag* のみを用いる。しかし、王様キャラクターも親しい人と話す際に、複数形の一人称 *vi* ではなく、基本的に単数形 *jag* を用いる。
- 複数一人称の *vi* 使用は、現代フィクションの時代小説にも見られ、Guillou (1999) の *Tempelriddaren*（本小説の『十字軍騎士のアーヌ』は12世紀末の十字軍騎士に関する話）では王と女王様キャラクターも自分のみに指して話す際に *vi* を用いる用例が見られる。
- スウェーデン語訳の『ハムレット』と『リア王』における王様キャラクターは、基本的に非丁寧な二人称 *du* を話し相手に用い、丁寧な二人称 *ni* を受ける。
- 『ハムレット』と『リア王』の王様キャラクターが使う命令形は、断固とした言葉遣いが多い。日本語版のどの訳でも「え・ろ」という命令形が特に多い。この命令形は「行け」「来い」や「しろ」等の語法に指すものであり、「え・ろ」以外、「(て) くれ」と「～がいい (よい)」の命令表現も多かった。「してくれ」を主に用いるのは、聞き手より上位にある男性だと分かり、本節で取り扱う王様キャラクターに相応しい言葉遣いだと考えられる。そして、「～がいい」の表現は、「行為の妥当性」を表わし、慣用的な使い方である。そこで、封建時代やフィクションにおける王様とは、国のトップとしてのどの行動が正しいか、他人に決めつける権利があるので、「行為の妥当性」を表わす「～がいい」という表現も王様キャラクターの話し方に適していると考えられる。
- スウェーデン語では命令の活用形があまり変化せず、*tack* (*please*) のような言葉を追加することで「～てください」のようにニュアンスを変えて命令形になる。現代の Ristarp 訳にも同じニュアンスが入っており、*säg mig* (*tell me*) の *säg* という命令形に *mig* (私) が追加されており、「私に教えてくれ」という和らげた意味になる。また、近代の Hagberg 訳では *tala först* (最初に言え) という強い命令の基本形が見られるが、現代の

Ristarp 訳では *du får* (*you may*) という許可を与える台詞も追加されており、「最初に話してもいい・話すがいい」の和らげなニュアンスになる。このような訳の個所による相違点があったものの、近現代における命令形があまり異ならない。

- 近代の Hagberg 訳の命令形には「言え」という強いニュアンスがある上で、聖書語的な要素も見られる。この訳で現れる *sägen* のように、聖書からの影響として「2. 2. 2.」で取り上げた二人称複数を表わす命令形の末尾 *-en* 形が付けられている。この命令形の末尾は複数を表わしており、1526 年の新約聖書で使われたが、Hagberg 訳の当時では動詞の複数形は、既に廃れた語法であった。そして、末尾 *-en* 等は、〈神様語〉（「2. 2. 5. の用例 (25) 等」）として使われたり、現代作品で古典的なスウェーデン語（「6. 2. 3.」の用例 (10)）を表わしたりするのに用いられた。しかし、王様や神様の話し方に特徴をつけるというより、話全体に古語的な雰囲気をつけるのに用いられたと考える。

4. スウェーデン語から日本語への翻訳と〈時代ことば〉

本節では、主に日本語とスウェーデン語に対訳されている作品を取り上げながら、登場するキャラクターはどのような〈時代ことば〉を使用するかを調査することが目標となっている。例えば、次節では具体的に検討するが、村上春樹の『騎士団長殺し』（典：*Mordet på kommandören*）で出て来る騎士団長というキャラクターは、古風的な話し方をしており、〈江戸ことば〉の一人称代名詞「あたし」、書生や上司キャラクターに使われる威厳のある二人称代名詞を単数形として「諸君」、打消しとして「あらない」や「ん」、老人語動詞の「おる」などを多用する。そこで、騎士団長の話し方には、〈江戸ことば〉的な要素が多いものの、騎士団長の特有の要素はどのように訳されており、他の作品にも似たような古風的な言葉遣いが存在するかを調査する。また、日本語に翻訳されていないが、1998 年に Guillou 氏に執筆された *Vägen till Jerusalem* という騎士に関する小説は時代的要素が表われた作品である。それゆえ、本小説で用いられる古風な言葉遣いについて考察しようと思う。本小説では、1900 年代のスウェーデン語では話し言葉として見なされた言葉遣いは、時代的な言葉として扱われている。そこで、Guillou 氏の小説をを特に 20 世紀初期の劇の言葉遣いと比較し、言葉遣いに関する記述を通して、〈時代ことば〉の有無について調べる。

1900 年代のスウェーデンの社会で使用された言葉遣いを写實的に描写されている『赤い部屋』は、現代スウェーデン語に起源を持つものの、現代から見れば、古風的な言葉遣いも見られる。現代スウェーデン語と〈時代ことば〉を用いる『騎士団長殺し』と *Vägen till Jerusalem* との共通・相違点を示すため、自然主義の本小説と厳粛⁴²な言語の豊かなストリンドベリ劇の『父』（1887）、『令嬢と召使』（1888）や *Ett Drömspel*（『夢の劇』）（1901）の言語と比較する。

4. 1. 先行研究

上記の繰り返しとなるため、簡潔に説明するが、金水（2012:13）は、歴史的なキャラクターの代表は〈武士〉であろうと述べ、武士ことばの中で「拙者」「ござる」「まいる」「いたす」「もうす」等の語彙が見られる。そして、貴族の言葉の中で「まろは〜でおじゃる」等が見られる。従って、本節で扱う『騎士団長殺し』の騎士団長の衣装は、飛鳥時代となっているが、貴族的な言葉遣いより、騎士団長の言葉遣いは江戸時代の要素が強く、その古風な話し方は、スウェーデン語の翻訳では、どのような仕方で翻訳されているかを調査対象の出発点とする。

騎士団長の話し方の主な特徴の中で打消し表現の「あらない」の使用は著しい。金水（2019）は「あらない」について、江戸前期から武家に使われた奴言葉/六法言葉の中で「あらない」は他の奴言葉と自然に溶け込んでいたと述べる⁴³。Lindskog（2020）では、古風的な「あらない」

⁴² Teleman（2007:106）は、カール 12 世聖書を当時の 1900 年代の劇と比較し、劇は厳粛なスウェーデン語を用いる傾向があったが、20 世紀後半では劇の言語をはじめ、厳粛なスウェーデン語で行われた説教、公演やスピーチの言葉遣いも使わなくなっていたと述べるので。

⁴³ Lindskog（2020:8）にも「あらない」についてさらに述べたように、。『日本国語大辞典』によると、「あらない」

は、スウェーデン語訳では騎士団長の話し方に特徴を付ける方法として *ingalunda* に訳されていることが分かったと指摘する。しかし、上記の調査における聖書と劇の中や、以下に取り上げる時代小説では実際にどの程度使われており、古風的な言い方として捉えるのだろうか。また、騎士団長の話し方に古風的な特徴を付けるため、理由を表わす接続詞 *ty* を使わせてはいるが、以下の近現代作品の調査を通して、実際にどのように使われたかを調査する必要があるだろう。

4. 2. 調査結果

4. 2. 1. あらない・*ingalunda* の使用

調査結果として、Lindskog (2020) にもあるとおり、騎士団長が多用する打消し表現「あらない」から翻訳された *ingalunda* は『スウェーデン語辞典』によると、副詞の「決して...でない」「少しも...でない」という意味を持つ言葉であり、*ingalunda* は、古風な会話か日常会話の言葉として使われるかは、記されていない。しかし、スウェーデン・アカデミーの辞書の *ingalunda* に関する項目によると、書き言葉の要素が強く、少し古めかしい印象を与えると記されている。以下の用例 (1) は、『騎士団長殺し』の騎士団長による「あらない・*ingalunda*」の使用である。

- (1) "Vilket ni, mina herrar, också mycket väl vet. Men som jag är nu, har jag *ingalunda* något sår. Se här, visste har jag *ingalunda* något? (中略) (p.287)
「諸君もよく知ってのとおりだ。しかし今のあたしには傷はあらない。ほら、あらないだろう? (中略)」 (p.349)

以上のような *ingalunda* (「あらない」もそうだが) の使用は、本作品の最も特徴的な言葉遣いだと考えられるが、他の作品ではどの程度に使われているのだろうか。カール 12 世聖書 (1917 までの聖書) では、*ingalunda* の使用が見られるものの、書き言葉要素が強いため、同じ当時の他作品ではどの程度使われたのだろうか。騎士団長の打消しは、古い作品にどのように影響されているかを調べるため、話し言葉の資料として有名な 1900 年代劇におけるスウェーデン語の *ingalunda* の使用頻度を調査した。結果として、*ingalunda* の使用回数が少なく、恐らく原文の『騎士団長殺し』の騎士団長の特徴的な「あらない」は本作品にとって特有の言葉遣いだと考えられる。

そして、スウェーデン語訳は、その特有さを反映するため、騎士団長にやや珍しい *ingalunda* を使わせたのであろう。また、*ingalunda* の使用例は、1300 年から見られる⁴⁴ものの、古語的なスウェーデン語を多用するとして知られる聖書⁴⁵さえ *ingalunda* を滅多に使わない。また、調査した限りでは、*ingalunda* は他の打消しと比べ、時代小説や、近代に出版された作品では、あまり使用されない打消し表現である。対象作品の *ingalunda* とその他の打消し表現の使用数をまとめると、次の表 1 のようになる。本節は、〈時代ことば〉に注目を置いているから、以下の表 1 と以後の表の『騎士団長殺し』における言葉使用回数は、騎士団長による使用回数のみ取り上げる。

には二つの種類がある。一つ目は、「ある」が動詞の場合、「ない」は打消しの助動詞として現れる「あらない」である。浄瑠璃の『心中宵庚申』(1722) に「せく事はあらない」のような使用が見られる。二つ目は、「ある」が補助動詞の場合として現れる。用例として、『おあむ物語』(1661-73 頃)「しら歯の首は、おはぐろ付て給はれと、たのまれて、おじゃったが、くびもこはいものでは、あらない」や、『南蛮寺門前』(1909)「このお寺は唯のお寺ではあらない」などがあり、古くから使われている打消しである。

⁴⁴ *ingalunda* 項目、<https://svenska.se/so/?id=22267&pz=7>

⁴⁵ Bergman (2013:88) によると、1526 年に翻訳された聖書の当時にも、使われたスウェーデン語は非常に厳粛に聞こえたと述べる。

表 1 *ingalunda* とその他の打消しの使用回数

作品名	使用数					出版年	ページ数	日本語訳	種類	作品番号
	<i>ingalunda</i>	<i>icke</i>	<i>inte</i>	<i>intet</i>	<i>ej</i>					
<i>Mordet på kommendören</i>	28	28	20	1	4	2017	400	騎士団長殺し	現代小説	①
<i>Vägen till Jerusalem</i> ⁴⁶	0	6	251	8	5	1998	392	無	時代小説	②
<i>Tempelriddaren</i>	0	3	305	5	0	1999	443	無	時代小説	③
<i>Riket vid vägens slut</i>	4	0	428	10	4	2000	464	無	時代小説	④
<i>Fadren</i>	0	44	165	1	6	1887	44	父 ⁴⁷	近代劇	⑤
<i>Ett Drömspel</i>	0	46	19	5	6	1901	51	無	近代劇	⑥
<i>Fröken Julie</i>	0	25	217	10	4	1888	35	令嬢と召使	近代劇	⑦
<i>Röda Rummet</i>	0	14	42	1	1	1879	207	赤い部屋	近代小説	⑧

金水（2019:38）は「あらない」に関して「さて、騎士団長のキャラクターから、この「あらない」および他の表現がどのように関係してくる、考えてみよう。「ある」の打ち消しが一般に「ない」であり、「あらない」という語形が事実上現代日本語の空隙となっている事実気づくことができれば、「あらない」はありそうで実はほとんど存在しない空虚で奇妙な表現であり騎士団長という存在に誠に相応しいものではある。」と述べるように、「あらない」は存在するものの、ほぼ見かけない打消し表現である。以上の表 1 でも分かるように、「あらない」から翻訳された *ingalunda* もほぼ使用されず、他の打消し表現と併用され、原文の「あらない」と同じく騎士団長の話し方に相応しいと考えられる。また、表 1 でも明らかなように、現代と近代の作品にも一般的な *inte* は主な打消しとして使用されるため、打消しとしての役割語はスウェーデン語にはあまり見られないと考える。日本語に翻訳されている⑤-⑧でも特別かつ古語的な打消しがあまり使われていない。例外として⑤の『父』における打消しが増えられ、この劇では「ぬ」という打消しの 4 例が出て来ており、1 例は以下の（2）のラウラという主人公の妻に使用され、3 例は主人公のアドルフに使われる。この 4 例に対して、「ない」の 284 例と「ません」の 77 例が見られ、原文のようにほぼ標準語的に翻訳されている。

（2）いらっしゃいよ。そうしないと愚にもつかぬことをきかれるわ！——無理言わないで！——いやなら、そこにすわってるがいいわ！（p. 27）

⁴⁶ *Vägen till Jerusalem*（『エルサレムへの道』）、*Tempelriddaren*（『クルセダー』）と *Riket vid vägens slut*（『道の果てにある王国』）は、12 世紀のスウェーデンの舞台となっている時代小説の三部作であり、スウェーデンでは大人気を得ている。主人公は十字軍のクルセダー（騎士）の Arn という男である。

⁴⁷ 日本語に翻訳された「父」は、最近発見したものであり、本節で扱う *ingalunda* や *ty* 等ほどの程度で翻訳されているかは、まだ把握していないものの、直訳されている以下のような用例が見られる。

Alldeles så! Ty en sjuk människa kan inbilla vad som helst, just därför att han är mottaglig för allt. (p. 50)

そのとおりです！病人にはどんなことも吹きこめますから。簡単に受け入れてしまいますからね。 (p. 19)

(3) (中略) ずる賢い女め、平和そのもの、虫も殺さぬ顔をして。眼を覚ませ、ヘラクレス、棍棒をとられないように！おまえは俺たちの甲冑を安物の飾りだと言ってだまし取る。 (p. 53)

4. 2. 2. ty の使用

スウェーデン語は日本語と比べ、人称代名詞や文末表現が少ないため、騎士団長が用いるような一人称「あたし」等を古風的に翻訳するのは困難である。そこで、特徴を付け、騎士団長の話し方をより時代的にさせるため、スウェーデン語訳の騎士団長の一つの特徴的な言葉遣いとして、理由を表わす *ty* が挙げられる。*Ty* の用例は以下の (4) のようである。

(4) "*Ty* inte ska väl mina herrar och jag utkämpa någon duell?" (p. 287)
「あたしと諸君とでこれから果たし合いをするわけでもなかりょうに」 (p. 349)

『スウェーデン語辞書』によると、以上の *ty* の形として出始めるのは、1430-1450 であり、ルーン文字時代の 800-1225 年からの古語では *þy* (*thy*) として出る。『スウェーデン語辞典』では、*ty* は、接辞詞の「...だから」を表わす理由の言葉だと記されており、原文で特徴とされなかったが、文末の「なかりょう」に相当する。接辞詞 *ty* は、やや古い言い方を想起させる言葉であり、現代の日常会話で使用されない書き言葉として見なされるので、騎士団長の話し方をやや古めかしくする。翻訳者の Emond 氏は、騎士団長の話し方を古風的に思わせるため、一つの方法として *ty* を使わせるが、原文の騎士団長は、特別な理由を表わす接辞詞を使わず、*ty* は翻訳版の特有な言葉遣いであると考えられる。

Ty は、スウェーデンの近代作品で日常会話としてよく見られるが、現代小説や日常会話では *ty* の類義語 *för* が使われる。そこで、*ty/för* を比較するため、その使用頻度を以下の表 2 でまとめた。

表 2 *ty* と *för* の使用回数

作品名	使用数		出版年	ページ数	日本語訳	種類	作品番号
	<i>ty</i>	<i>för</i>					
<i>Mordet på kommendören</i>	3	0	2017	400	騎士団長殺し	現代小説	①
<i>Vägen till Jerusalem</i>	29	21	1998	392	無	時代小説	②
<i>Tempelridderen</i>	28	21	1999	443	無	時代小説	③
<i>Riket vid vägens slut</i>	23	27	2000	464	無	時代小説	④
<i>Fadren</i>	7	12	1887	44	父	劇	⑤
<i>Ett Drömspel</i>	10	2	1901	51	無	劇	⑥
<i>Fröken Julie</i>	6	12	1888	35	令嬢と召使	劇	⑦
<i>Röda Rummet</i>	5	2	1879	207	赤い部屋	近代小説	⑧

表 2 の作品⑤-⑧を確認すると、*ty* と *för* は、19 世紀末～20 世紀初期の近代作品では同じ程度に使用され、日常会話的な語法だったようである。また、前述のように *ty* は、現代小説や日常会話で使用されない書き言葉だと述べたが、現代に出版された時代小説の②-④では、*ty* は *för* と平等に使用され、古風的な雰囲気を与えさせるため、発話者に使わせていると考えられる。さらに、*ty* は特定のキャラクターのみならず、多くのキャラクターに用いられるため、一人のキャラクターに特徴をつけるより、全体的に話に古風な雰囲気を与えさせるために使用されていると考えられる。

また、①の騎士団長は、現代的な *för* を接辞詞として一切使わず、類義語 *ty* のみ使うことが分かり、彼の話し方に特徴をつけるために使われる。現代の時代小説②-④は日本語訳がないもの

の、①と同じ現象であり、普通の小説（時代小説ではない作品）と比べて *ty* の使用が会話の中で不自然ほどに多い。

また、Nordberg (2013) が現実にもっと近い言語は、恐らく演劇の会話であるものの、芸術作品であるため、会話の純粋な復元ではないと述べる。そこで、⑤-⑦の劇とスウェーデン語の実際を見事に表現する⑧の小説における *ty* は、日常会話の言葉だった可能性がある。日本語訳においても、*ty* の翻訳には、特別な訳し方がなく、以下の用例通りに単なる現代日本語の仮定条件や接続詞として扱われていたらしい。用例 (5) は⑦の『令嬢と召使』と「令嬢ジュリー」、(6) は⑧の『赤い部屋』、(7) は⑤の『父』からの用例である。⑥は日本語に翻訳されていないため、取り上げられない。

(5) (中略) お供しません。そんなことをしたら、みんなにばれてしまう。⁴⁸ (中略)
『令嬢と召使』 (p. 85)

(中略) 私はお伴しませんぜ、そんなことすりゃ、みんなバレてしまいますからね。
(中略) 「令嬢ジュリー」 (p. 83)

(6) 一労働者問題や、私たちの心にあるその他のいろいろの問題での、あなたの稲妻のように輝く論文を読ませていただきました。私たちは今、ローマ帝国風に数えて 3 年目ですね、というのは議会の新しい代表がきまって 3 年目ですから。⁴⁹ (p. 24)

(7) あの子を天才にしようとか、わたしに似た子に育てようとか、そんなことを考えているとは思わないで下さい。わたしは、あの子を男に取り持つ女衞役にはなりたくないんです。結婚のためだけに教育するのはいやなんです。結婚しないままじゃ、そりゃ、つらいでしょうけどね。 (p. 13)

接辞詞 *ty* は、「...だから」等を表わす理由の言葉であり、以上の「したら」や「から」で分かるように原文と同じような意味に訳されている。表 2 を確認すると、*ty* と *för* は大体平等的に使われるから、両方とも会話における言葉として使用されていたと考えられる。さらに、同じ程度に使われた会話の言葉として捉えられるから、日本語訳では特に区別されないと思しい。また、*ty* の翻訳に関してもう一つの興味深い点があり、*ty* は訳されないことも多い。例えば、『令嬢と召使』では 6 つの *ty* の用例の中では、1 例のみ理由を表わす言葉に訳されている。また、『赤い部屋』ではより多く、5 つの中の 3 例が訳されている。これがなぜ、翻訳されないかは不明であると言わねばならないが、少なくとも『令嬢と召使』(8-9) と『父』(10) における *ty* の省略例は以下のとおりである。下線部には *ty* が用いられているが、日本語訳における該当本文を見出すことができない。

(8) (中略) 放火だっていう人もいた。ちょうど火事が起こったのが保険が切れた次の日だった。
(p. 76)
och det under särdeles egna omständigheter som läto misstänka mordbrand, *ty* olyckan inträffade dagen efter assuranskvartalets utgång (p. 25)

(9) 大丈夫！ さて、わたしたち一家は宿無しになり、駐車の中で寝た。家を建てようにも、お金を工面するあてがない。昔からのお父様のお友達はみんな知らん顔。 (p. 76)

⁴⁸ スウェーデン語訳：

(中略) Jag följer er ej, *ty* då allt är förlorat, utan ni måste resa ensam (中略) (p. 28)

⁴⁹ スウェーデン語訳：

-Jag har läst era ljugande artiklar i arbetarfrågan och i alla andra frågor, som ligga oss om hjärtat. Vi räkna nu vårt Anno III med romerska siffror, *ty* det är nu tredje året som den nya representationen sammanträder, (中略) (p. 25)

Vi stodo på bar backe och måste sova i vagnarna. Min far visste icke var han skulle få pengar till husens uppbyggande, **ty** sina gamla vänner hade han måst försumma, så att de glömt honom. (p. 25)

(10) おまえのやったことは大成功さ。今や上官から料理番にいたるまで俺が正気だと思うやつは一人もない。 (p. 35)

Och du har lyckats i dina bemödanden, **ty** nu finns det inte mer än en enda som tror mig vara klok, från chefen ner till köksan. (p. 65)

スウェーデン語における現代小説では〈時代ことば〉を表わすため、キャラクターに **ty** を使わせるのは方法の一つだと考えられる。表 1 の①（『騎士団長殺し』）や②-④では古風な話し方を思わせるため、登場するキャラクターに **ty** が多用されるのであろう。『騎士団長殺し』では、騎士団長に使わせており、彼の古風な話し方とキャラに特徴を付ける。しかし、②-④の時代小説では、さまざまな人物に使用され、特定のキャラクターより、描かれている昔の設定に特徴付けるために用いられていると推測される。さらに、**ty** は、現代の話し言葉として用いられない上、書き言葉的な要素も強いから、古い雰囲気と思わせるために相応しい言葉遣いと思われる。『赤い部屋』や『令嬢と召使』等が執筆された当時の時点では役割語の観点から見れば、役割語の〈時代ことば〉として、「2. 2. 5.」で見た *Ett Drömspel*（『夢の劇』）等では聖書からの特徴的な言葉が使用された。しかし、当時の **ty** は、そのような〈時代ことば〉ではなく、会話の話し言葉として使われていた。そして、ある時点では書き言葉的で古語的な言葉として見なされるようになり、②-④の時代小説や翻訳作品の①の『騎士団長殺し』における騎士団長によって〈時代ことば〉として使われることが見られる。

4. 2. 3. 書き言葉的要素

現代の時代小説のキャラクターの言葉遣いをより古めかしくする方法として、動詞の話し言葉ではなく、書き言葉の形式を使うことがある。例えば、話し言葉 *ska*（英語の単純未来/意志未来等を表わす *shall* と同じく）という動詞の代わりに、書き言葉 *skall* が多用される。*Ska* と *skall* の近現代における使用傾向は以下の表 3 で見られる。

表 3 *ska/skall* の使用回数

作品名	使用数	出版年	ページ数	日本語訳	種類	作品番号
<i>Mordet på kommendören</i>	1/0	2017	400	騎士団長殺し	現代小説	①
<i>Vägen till Jerusalem</i>	31/63	1998	392	無	時代小説	②
<i>Tempelriddaren</i>	7/145	1999	443	無	時代小説	③
<i>Riket vid vägens slut</i>	0/175	2000	464	無	時代小説	④
<i>Fadren</i>	48/23	1887	44	父	劇	⑤
<i>Ett Drömspel</i>	0/29	1901	51	無	劇	⑥
<i>Fröken Julie</i>	48/33	1888	35	令嬢と召使	劇	⑦
<i>Röda Rummet</i>	8/7	1879	207	赤い部屋	近代小説	⑧

Ska/skall の使用傾向は、上記の接続詞 *för/ty* に似ている。例えば、*skall* 使用に偏っている⑥以外、⑤-⑧の劇では話し言葉の *ska* は、現代に書き言葉として見なされる *skall* と平等に話し言葉として現れる。上記通り、現実にもっと近い言語は、恐らく演劇の会話であるものの、芸術作品であるため、会話の純粋な復元ではないと Nordberg (2013) が述べる。そこで、*ska/skall* の両方は当時の話し方として使われたと考えられる。現代では *ska* のみ会話の話し言葉として用いられるのに対し、*skall* はほぼ書き言葉の使用に限定される。現代の小説や翻訳された作品にも *ska* は使用され、以下の (11) は『騎士団長殺し』にある *ska* の用例である。また、『騎士団長殺し』の

騎士団長の話し方に特徴をつける接続詞の *ty* が使用されるものの、*skall* は会話の言葉として一切出て来ない。しかし、騎士団長の話し方には *ska* の使用数が少ないため、その使用数が増加から *skall* が用いられるかどうかは不明である。

(11) "Ty inte ska väl mina herrar och jag utkämpa någon duell?" (p.287)

また、Teleman (2007:106) は、1900 年代におけるフィクションの特に劇では、厳粛なスウェーデン語を用いる習慣があり、20 世紀の後半になった際に、劇の言語を含め、厳粛なスウェーデン語で行われた公園やスピーチの言葉遣いも使わなくなっていたと述べる。そこで、以上の調査した劇等で見てきたように、聖書等では *skall* しか使わない習慣があったことから、*skall* の話し言葉としての役割は、次第に古語的なものと見なされるようになった可能性があるといえる。そして *ty* は、なぜ話し言葉として使われなくなったかは不明だが、*skall* のように書き言葉として見なされるようになり、上記の日本語とスウェーデン語に関する〈時代ことば〉の調査で見てきたように、書き言葉は古語的な言葉として使われる傾向があるためにあまり使われなくなったと考えられる。

また、表 3 の資料②-④は、現代に書かれた時代小説であり、聖書の古風的な動詞の使い方をまさに倣うために、*skall* を多用すると考えられる。②-④の *skall* 使用数が徐々に増え、④では話し言葉 *ska* は会話中に全く使われていないことが分かるので、〈時代ことば〉的な雰囲気付けの方法の一つとして使用されていたか。

4. 3. 第 4 節のまとめ

本節で〈時代ことば〉を調査する目的として、『騎士団長殺し』の騎士団長の話し方やスウェーデン語の時代小説や翻訳された劇等で用いられる言葉を調査した。明らかになったことを以下の表 4 と点でまとめた。

表 4 対象作品における打消し、接続詞と動詞使い

打消し	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	備考
ingalunda	28	0	0	4	0	0	0	0	ingalunda 使用は①以外にあまり見られず、本作品にとって特有の〈時代ことば〉だと考えられる。様々な打消しが見られるものの、やはり一般的な inte が最も使用される。
icke	28	6	3	0	44	46	25	14	
inte	20	251	305	428	165	19	217	42	
intet	1	8	5	10	1	5	10	1	
ej	4	5	0	4	6	6	4	1	
接続詞									翻訳者は古風な話し方を思わせるため①の騎士団長に <i>ty</i> を使わせる。②-④も古風的に思わせるため <i>för</i> との併用を多く見られる。⑤-⑧の <i>för/ty</i> は日常的に使われたと考える。
för	0	21	21	27	12	2	12	2	
ty	3	29	28	23	7	10	6	5	
動詞									以上の②-⑧の <i>för/ty</i> と同じ使い方だと考える。
ska	1	31	7	0	48	0	48	8	
skall	0	63	145	175	23	29	33	7	

*①=『騎士団長殺し』、②=Vägen till Jerusalem、③=Tempelriddaren、④=Riket vid vägens slut、⑤=『父』、⑥=Ett Drömspel、⑦=『令嬢と召使』、⑧=『赤い部屋』

- 騎士団長に多用される「あらない」から翻訳された *ingalunda* の使用例は、1300 年から見られるが、現段階の調査したわずかな範囲で *ingalunda* の使用が非常に少なく、時代キャラクターの話し方に特徴つけるため、あまり使用されないと考える。スウェーデン語から日本語に翻訳された作品にも標準語的な打消ししか見られない。
- 騎士団長の話し方には、多くの特徴があるものの、スウェーデン語では多くの人称代名詞等が存在しないことから、*ty* 使用で補われていると考える。*Ty* の類義語の *för* も見られない上、スウェーデン語訳の騎士団長に特徴をつけ、話し方を古語的にするため、書

き言葉の *ty* 等が使用されていると考えられる。また、*ingalunda* と異なり、*ty* は *för* と共に、調査対象の現代に出版された騎士に関する時代小説のキャラクターによって多用される。また、*skall* は *ty* と同じ使用傾向があり、書き言葉要素が強いため、言葉遣いに古語的な印象を付ける方法の一つとして使われる。

- *Ty* は、日本語版で翻訳されないことがあるが、なぜそのようなになっているのかは、いまだ不明である。仮説として、*ty* は、*skall* のように書き言葉として見なされるようになり、上記の日本語とスウェーデン語に関する〈時代ことば〉の調査で知られたように、書き言葉が古語的な言葉として使われる傾向があることから使われなくなったことを想定している。
- 現代の時代小説のキャラクターの言葉遣いをより古語的にする方法として、動詞の話し言葉ではなく、書き言葉の形式を話し言葉として使う傾向がある。例えば、話し言葉として一般に使用される *ska* という動詞の代りに、書き言葉 *skall* が多用される。しかし、近代の劇と小説では、*ska/skall* 動詞や *ty/för* 接続詞の話し書き言葉の形式が併用された。

5. 日本語からスウェーデン語への翻訳と〈時代ことば〉 (1)

上記の「1. 3.」で取り上げた『海辺のカフカ』のように、現代スウェーデン語の使用が少し古く感じ捉える作品として、村上春樹の『騎士団長殺し』を取り上げる。本作品では、現代キャラクターのみならず、「騎士団長」というような飛鳥時代の服装を着ており、古めかしい言葉遣いをする時代キャラクターもいる。そこで、本節では『騎士団長殺し』のキャラクターを中心に、現代と時代キャラクターの話し方は、日本語からスウェーデン語にどのように翻訳されているかを調査し、日本語とスウェーデン語におけるキャラクターの言語的な特徴付けにどのような相違点・共通点があるかを調査する。また、本調査は、金水（2019）が担当した『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書（3）』の論者によって行われた「『騎士団長』のキャラクターのスウェーデン語への翻訳の仕方について」に基づく調査である。

スウェーデン語訳の *Mordet på Kommendören* は、Vibeke Emond（2019）に村上春樹の『騎士団長殺し』から翻訳された作品。『騎士団長殺し』のキャラクターの言葉遣いを中心に、話し方がどのように翻訳されているかを調査した。特に原文における騎士団長は、二人称代名詞「諸君」を単数形として使うことや、打消しとして「あらない」等を用いることという古語的な話し方をする。この話し方がスウェーデン語訳においてこの話し方は、普通の話し方をしているキャラクターとどのように区別されているかは翻訳の問題点となる。上記の調査では、〈時代ことば〉として聖書や書き言葉からの要素が強く、本作品で似たような傾向が見られるかを調べる。

5. 1. 先行研究

リンドソグ（2018）では、『海辺のカフカ』で登場するキャラクターの日本語とスウェーデン語の言語的な相違点・共通点の調査が行われた。結果として、一人称代名詞について、日本語とは異なり、スウェーデン語では、人称の一致があるため、日本語のように人称代名詞が省略できない場合がある。またスウェーデン語では、日本のような展開した敬語が存在していないため、『海辺のカフカ』の主人公であるナカタの「丁寧さ」がどのように翻訳されたかを調べることも試みた。その結果として、ナカタは、原文と同様にスウェーデン語における翻訳文でも、話し相手との人間関係に関わらず敬語を多用することが明らかになった。そして「1. 3.」節にも取り上げたものの、スウェーデン語の敬語を表すため、ナカタは、ほぼ誰に対してでも敬称 *fru/fröken/herr*⁵⁰や、複数二人称代名詞 *ni/er* を単数形として使うことが多かった。しかし、原文の話し方とは異なり、ナカタは親友のホシノにのみより親しい話し方をする。例えば、ホシノの名前に敬称をつけず、丁寧な二人称代名詞 *ni* の代りに非丁寧で親しみを示す *du* を用いることも分かった。

⁵⁰ *Herr* は男性に対して用いる敬称であり、*fru* は既婚で、*fröken* は未婚の女性に対して使う敬称である。

また、『海辺のカフカ』の一人の翻訳者の Yukiko Duke 氏とのやり取りで、ナカタの話し方を翻訳した際に、どのような訳し方を用いたかを伺ったところ、Duke 氏は、以下のように述べている。

（中略）母と私は、作品を翻訳する際に、できるだけ原文に近い言語に翻訳する。（その所為で、英語版を読んだけど、日本語が話せない方から批判をうけた。スウェーデン語版は、英語版のようにヒップではないから。しかし、日本語話者は、スウェーデン語版は原文に近いと思っている。村上は、アメリカ人が翻訳するようにクールではない。）（中略）

ナカタは、少し古めかしい言葉遣いを用いるが、それは彼の丁寧な話し方の奇妙さに注目するためである。ナカタの話し方の古めかしさ以外、スウェーデン語の新しい敬語を作らず、翻訳した。

翻訳者の Duke 氏は、できるだけ原文に近い言語に翻訳したが、日本語が話せない方からかなり批判をうけたと述べている。Duke 氏が『海辺のカフカ』を翻訳して以来、村上春樹作品の翻訳者は、Vibeke Emond に変わった。Emond 氏は、『1Q84』や『騎士団長殺し』を翻訳しているが、翻訳者が変わったことで言語自体は、どのように翻訳されているかを本節で注目したいと考える。

5. 2. 『騎士団長殺し』の調査結果

5. 2. 1. 日本語に影響されたスウェーデン語

スウェーデン語版の『騎士団長殺し』の言語は、日本語の敬語の使用法から影響を受けていると考えられる。現代スウェーデン語では、日本語のようにさまざまな敬語語彙が存在していないのだが、本作品ではどのようなスウェーデン語の敬語が使われているのであろうか。最も特徴的な言葉遣いは、二人称代名詞の *du* と *ni* の使い分けである。この言葉遣いは、上記の『赤い部屋』等における調査にも取り上げたが、二人称の *ni* は、*du* の複数形であり、話し相手に単数形として用いると、敬語に相当する丁寧な二人称代名詞となる。しかし、現代スウェーデン語の日常会話では、*ni* があまり用いられないのに対し、『海辺のカフカ』のように『騎士団長殺し』の会話ではまみ見受けられる。原文における会話の発言者は、「だ体（常体）」「です体（丁寧体）」を話し相手との間柄により使い分けるが、スウェーデン語訳でも間柄による二人称 *du* か *ni* の使い分けがなされている。例えば、『騎士団長殺し』の無名の主人公は、元妻のユズ、既婚の彼女や友人の政彦というキャラクターに対して「だ体」の非丁寧な言葉遣いを用いる。これは以下の用例下線部からも分かるように、*du* と翻訳される。また、前述の聞き手のキャラクターも主人公に対して *du* を用いており、知り合いか他人にせよこのような呼び合いはスウェーデン語では最も一般的である。

(1) ユズ→主人公（元妻）⁵¹

”Det går bra vilket som för min del. Gör som du tycker.” (p. 49)

「私としてはどちらでもいいのよ。あなたの好きにすればいい」 (p. 55)

(2) 雨田政彦→主人公（友人）

”Det gör inte jag alls. Jag tycker bara att operor är långa och långtråkiga. Det finns en massa gamla skivor här, så du får gärna lyssna på vad du vill. (中略)” (p. 56)

「おれはとてもだめだよ。オペラなんて長くて退屈なだけだ。そこに山ほど古いレコードがあるから、好きなだけ聴けばいい。(中略)」 (p. 64)

(3) 主人公→彼女（恋愛関係）

⁵¹ 本論文の用例の書き方として、「話し手→聞き手（聞き手の話し手との関係）」のように統一している。

”Hur är det möjligt? **Du** som har en så vacker kropp” (p. 64)
「どうしてかな。こんなに素敵な身体なのに」 (p. 73)

(4) 主人公→赤の他人の女性（主人公は、旅中で会う女性）
”Är **du** i en besvärlig situation?” (p. 259)
「何か面倒なことに巻き込まれているの？」 (p. 312)

(5) 主人公→まりえ（主人公の生徒）
”Kan **du** sitta där ett tag? **Du** får sitta som du själv vill och röra dig också, bara **du** inte ändrar ställning alltför mycket. **Du** behöver inte sitta alldeles stilla.” (p. 390)
「しばらくそこに坐っていてくれるかな。すきなかつこうでいいし、大きく姿勢を変えなければ、適当に動いてかまわない。とくにじっとしている必要はない」 (p. 481)

(6) 彼女→主人公（恋愛関係）
”Tack. När **du** säger så, känns det som om jag har blivit återvunnen.” (p. 64)
「ありがとう。そう言われると、なんだかリサイクルでもされているような気がしてくるけど」 (p. 73)

(7) 免色→まりえ（赤の他人）
”Tycker **du** om tavlor, Marie?” (p. 36)
「まりえさんは絵が好きなんですか？」 (p. 44)

(8) 赤の他人の女性→主人公（主人公は、旅中に会う女性）
”Ser **du** något bakom mig? Är det någon där?” (p. 259)
「私の後ろに何か見える？誰かいる？」 (p. 312)

以上の会話の例から分かるように、**du** を親しい人に使うことが多く、特に主人公の発話では (3) の彼女に対する **du** や、(2) の雨田政彦の主人公に対するような用例が見られる。しかし、用例 (5) と (7) では、主人公と免色は **du** を、知人で子供のまりえに対しても使用している。用例 (5) は、「だ体」となっているため、スウェーデン語訳では **du** が使用されると考えられるものの、(7) は丁寧な「です体」であるのに対して、**du** と翻訳されている。(7) の発話者は大人の免色であり、聞き手は子供のまりえであるためか、大人から子供に対して丁寧な二人称 **ni** を使うのは不自然な言い方だと考えられたのであろうか、**du** が使われている。現代スウェーデン語では、親しい人か知人かにも関わらず、多くの者がほぼ誰に対してでも **du** を用いるのが一般的である。しかし、『騎士団長殺し』では、知人に対して **du** の複数形で単数形として丁寧な **ni** という二人称代名詞の使用が不自然なほどに多く見られる。Bergman (2013) は、1836 年の資料によると、**ni** は主に知り合いや、発話者より階級が低い者に対して使用され、親しい人に単数形二人称代名詞 **du** と単数形として用いられた複数二人称代名詞 **I** が使われていると述べる。また、Teleman (2013) によると現代のスウェーデン語では、二人称代名詞として単数形の **du** または、複数形の **ni** を用いるものの、1960 年代の終わりから始まった「あなた改革」(**du-reformen**) によって、人は階層や関係を問わず、他人に二人称代名詞 **du** を主に使うようになったとされている。そして、1980 年代に **ni** は、知人に対する丁寧な呼称として復活し、主に若者は年上の人使用されはじめるようになったと Teleman (2013:155) は指摘する。

しかし、以下の (9-16) では、必ずしも若者から年上に対してではなく、『騎士団長殺し』における丁寧な **ni** は、単なる丁寧な二人称として使用されていると知られる。そして、以下の用例 (16) 以外、原文における「ます体（丁寧体）」と丁寧言葉の **ni** との関連が認められる。

- (9) 主人公→免色 (知人)
 "Jag har hört att ni också bor här i trakten, herr Menshiki." (p. 104)
 「免色さんもこの近くにお住まいと聞きましたが」 (p. 119)
- (10) 主人公→騎士団長 (知人)
 "Så ni talar alltså inte om för mig sådant som det är bäst att jag förblir ovetande om?" (p. 296)
 「つまり、ぼくが知らないでいた方がいいことは教えてもらえないということですね」 (p. 361)
- (11) 主人公→秋川笙子 (知人)
 "Vad är det för en bok ni läser?" (p. 23)
 「何の本を読んでおられるのですか？」 (p. 28)
- (12) 免色→主人公 (知人)
 "Vill ni se mitt hus?" (p. 104)
 「うちをご覧になりますか？」 (p. 119)
- (13) 免色→秋川笙子 (知人)
 "Ni får sitta i bilen så mycket ni vill. Ni får gärna köra den också om ni vill." (p. 39)
 「いくらでも乗ってみてください。もしよかったら、運転なさってもかまいませんよ」 (p. 47)
- (14) 秋川笙子→主人公 (知人)
 "Men ni är en mycket skicklig lärare. Det har jag hört från många håll." (p. 386)
 「でもご指導がとてもお上手だとうかがいました。たくさんの方々の口から」 (p. 476)
- (15) 秋川笙子→免色 (知人)
 "Jag har hört att ni bor på berget på andra sidan dalen" (p. 32)
 「向かい側の山の上にお住まいとうかがっていますが」 (p. 39)
- (16) まりえ→主人公 (指導者)
 "Bilderna ni ritade av mig innan var mycket fin." (p. 390)
 「このあいだ、わたしを描いてくれた絵はとてもよかった」 (p. 481)

用例 (9-15) の各発話者の共通点は、話し相手はただの知人であることと、その知人に対する丁寧な日本語、いわゆる「です体」や敬語が用いられていることである。この丁寧な日本語は、二人称代名詞の *ni* に翻訳されることが多く、『赤い部屋』が出版された 1879 年の当時なら自然な言い方だったものの、*ni* がこのように多用されることは、現代のスウェーデン語では違和感がある。何故なら、現代スウェーデン語では知人や赤の他人と話しても *ni* ではなく、非丁寧な二人称 *du* を主に使うからである。Teleman (2013) が述べる 1980 年代に復活し、主に若者に使用される *ni* と最も近い用例は (16) であり、少女のまりえは、年上の主人公に対して *ni* を用いるものの、まりえの原文の言葉遣いとは対立している。原文のまりえは、「だ体 (常体)」を用いるため、丁寧な *ni* の使用は原文の言葉遣いを反映していないと考えられる。「だ体=*du*」と「です体=*ni*」の翻訳時の訳し方でいえば、まりえの話し方は、主人公と会話した (8) の無名の女性と同じような非丁寧な言葉遣い (*du* 使用) に翻訳されるべきではなかったか。また、『騎士団長殺し』のほぼ全てのキャラクターは、「だ体=*du*」「です体=*ni*」のように、その言葉が翻訳されるが、この在り方から外れている人物は少女のまりえのみである。

続いて、丁寧な *ni* 以外に、『騎士団長殺し』において現代スウェーデン語であまり使われない敬称の制度が見られる。例えば、『騎士団長殺し』では敬称「さん」等が多用され、翻訳版のスウェーデン語は、この敬称の多用から影響を受けていると推察される。前述のようにスウェーデン語では敬語を表すため、敬称 *fru/fröken/herr* を使うことがあり、その用例は以下の (17-20) のとおりとなっている。

(17) 主人公→免色 (知人)

"**Herr Menshiki**, jag har en fråga." (p. 105)

「免色さん、ひとつ質問があるのですが」 (p. 121)

(18) 主人公→免色 (知人)

"Även om vi båda två målar tavlor, är det en enorm skillnad i nivå mellan **herr Amada** och mig. Jag känner mig alldeles för ringa för att nämnas jämte honom." (p. 133)

「同じ絵描きとはいっても、雨田具彦さんとぼくとではレベルが違います。同列に並べられると、恐縮するしかありませんが」 (p. 158)

(19) 彼女→主人公 (恋愛関係)

"**Bor herr Menshiki** där?" (p. 117)

「メンシキさんがそこに住んでいる」 (p. 137)

現代のスウェーデン語では、以上の用例のように赤の他人や目上にでも *herr* (さん) などをあまり用いず、前述の *ni* 使用も珍しい。例えば、用例 (17) で見られる *herr Menshiki* (「免色さん」の意味) は、本人と直接会話する際にもあまり用いれない。(18) の主人公と話し相手の免色の丁寧な場面でも、(19) の主人公と彼女の話している非丁寧な場面でも、話題の人物の名前に *herr* をつけているが、本人がいても敬語があまり使用されないスウェーデン語では、本人がいない時に敬称が使われるとは考えにくく、スウェーデン語訳の発話者の言葉遣いは、原文の敬称使用の有り様に相当影響されているのではないかと予測される。

5. 2. 2. 不自然な日常会話 (書き言葉要素)

『騎士団長殺し』の翻訳文では、必ずしも原文の日本語に影響されていないものの、スウェーデン語として不自然な言葉遣いが見られる。そのスウェーデン語として不自然な響きを与える用例は、以下の (20-22) であり、下線部を引いたものである。

(20) 主人公→免色 (知人)

"**Varför** frågar ni mig om **något sådant**?" (p. 174)

「しかし、どうしてそんなことをぼくにお訊きになるのですか？」 (p. 207)

(21) 主人公→雨田政彦 (友人)

"Jag måste ju köra tillbaka till Odawara **sedan**" (p. 85)

「これから運転して小田原まで帰らなくちゃならないからね」 (p. 112)

(22) 彼女→主人公 (恋愛関係)

"Och så är det **något** du vill veta om den där herr Menshiki, eller hur?" (p. 123)

「それでそのメンシキさんについて、あなたは何かを知りたいのね？」 (p. 144)

以上の用例 (20-22) の下線部は、日常会話として不自然である。Teleman (2013:87) が述べるように、日常的な感じを表わすために、語彙をさまざまに省略する場合があるが、そのような日常会話で省略される語彙の用例として 1. *någon*→*nån* (誰か)、2. *sådan*→*sån* (その/あのよう

な)、3. *sedan*→*sen* (後で) を挙げることができる。しかし、以上の用例の下線部は話し言葉ではなく、書き言葉の少し堅苦しい話し方である。

用例(20)は知人の会話であるため、会話の堅苦しい雰囲気を与えるため、*något/sådant* は日常的な *nåt/sånt* に翻訳されていないのではないかと考えられるかもしれないが、そうであるとするれば、なぜ用例(21-22)のような日常的な場面では *något/sådant* は *nåt/sånt* の形態になっていないのだろうか。親しい人の間の会話では(21-22)の *sedan/något* は、基本的に *sen/nåt* という視覚方言となるものの、この Emond 氏による翻訳では言葉の基本形が使われるため、その文章は書き言葉的な印象を持つといえよう。しかし、Emond 氏の他の訳では、『1Q84』のふかえり等は、*någon/något* 等を一切使わず、省略形の *nån/nåt* のみを用いる。この言葉遣いは、なぜか『騎士団長殺し』では活かされていないのである。

5. 2. 3. 騎士団長の話し方

最後に取り上げるのは、『騎士団長殺し』の中でも、最も特徴的な話し方を持つ「騎士団長」というキャラクターである。原文の騎士団長は、話し方には古風的な要素があり、二人称代名詞の使い方も特徴的であり、「だ体」を用いる。騎士団長は、主人公以外のキャラクターとあまり話さないため、話し相手は基本的に同じである。原文の騎士団長の特徴的な話し方とその翻訳の用例として、以下の(23)を取り上げる。

(23)

”Vilket ni, mina herrar, också mycket väl vet. Men som jag är nu, har jag ingalunda något sår. Se här, visste har jag ingalunda något? (中略) (p. 287)

「諸君もよく知ってのとおりだ。しかし今のあたしには傷はあらない。ほら、あらないだろう? (中略)」 (p. 349)

騎士団長の特徴的な日本語表現の一つとして、打消しの「あらない」の使用を挙げることができる。『日本国語大辞典』によると、「あらない」には二つの意味がある。一つ目は、「ある」が動詞の場合、「ない」は打消しの助動詞として現れる「あらない」であり、浄瑠璃の『心中宵庚申』(1722)等に「せく事はあらない」のような使用が見られる。二つ目は、「ある」が補助動詞の場合として現れる。用例として、『おあむ物語』(1661-73頃)「しら齒の首は、おはぐろ付て給はれと、たのまれて、おじゃったが、くびもこはいものでは、あらない」や、『南蛮寺門前』(1909)「このお寺は唯のお寺ではあらない」等があり、古くから使われている打消し表現である。さらに、金水(2019)は「あらない」について、江戸前期から武家に使われた〈奴言葉・六法言葉〉の中で「あらない」は他の〈奴言葉〉と自然に溶け込んでいたと述べる。また、「あらない」を直接方言に求めるのは困難であるが、神奈川方言において「仕方がない」という意味の「ショーガンネー」という表現に「あらない」の痕跡を認めうると述べる。

原文における打消しの「あらない」は *ingalunda* に訳されており、『スウェーデン語辞典』によると、*ingalunda* は、副詞の「決して...でない」「少しも...でない」という意味の言葉である。*Ingalunda* は、古めかしい言葉か日常会話の言葉として使われるかが記されていないものの、少し堅苦しいまたは、書き言葉的な印象を与えるため、騎士団長の話し方に相応しい言葉遣いであると考えられる。また、「4. 2. 1.」にも述べたように、打消し「あらない」は、一応存在するものの、日本語ではあまり見られない語である。同じく、「あらない」から翻訳された *ingalunda* もあまり使用されない打消し表現であり、騎士団長の奇妙な話し方に相応しいと考えられる。騎士団長による特有の言葉遣いであるので、特定のキャラクターに結び付けられる役割語より、「臨時的キャラクター⁵²」の言葉として見なすべきであろう。

⁵² 金水(2011:14)は「臨時的キャラクター」について、フィクションでキャラクタを特徴つけるために、予測される役割語と異なる表現をわざと使いさせることに指すと述べる。

続いて、原文の騎士団長は、一人称代名詞として「あたし」を用いる。依田（2014）の「あたし」の項目によると、役割語としては、一般的な女性像を表す〈女ことば〉であり、特に活発やお転婆な女性等を想起させると述べる。さらに、〈江戸ことば〉の一部として江戸の町人男性を表し、青年層からご隠居まで、主に大人が用いるとも述べている。騎士団長は、古風な話し方をしており、これは後者の〈江戸ことば〉に当てはまると考えられる。スウェーデン語では、単数形の一人称代名詞がそれぞれ一つしかないことから、騎士団長の「あたし」は単なる *jag*（文法によって *mig*（目的格）や *min*（所有格）等も）に訳され、「あたし」のような古い響きを持たない。

そして、二人称代名詞として「諸君」を用いているのだが、これは金水（2014）によると、「諸君」は複数の話し相手を指し示す二人称代名詞の用法を持ち、「読者諸君」「代議士の諸君」のように、属性を表わす名詞の後ろに付加して二人称または三人称複数代名詞のように用いる用法もあるとされている。明治時代の学生言葉である〈書生語〉に起源を持つとも述べられており、この人称代名詞の使用も古めかしいものと考えられる。しかし、本来の「諸君」は、複数の相手に用いる二人称であるが、騎士団長は「諸君」を一人の相手に、いわゆる単数形として用いている。また、原文において単数形として使用される複数形二人称「諸君」は、*ni, mina herrar* に訳されている。日本語に直訳すれば、「（私の）紳士たち/諸君のあなた方」に相当し、二人称代名詞 *ni* に属性の *mina herrar* が追加されていると判断できる。以上、で見てきたように、単数形の *ni* は丁寧な二人称として使われることが多く、「諸君」のように単数形として使うことじたいは不思議ではないため、騎士団長が二人称を使っていることをより明確にし、これを特徴付けるため、*mina herrar* という属性の言葉が加えられたと考えられる。さらに、上記の丁寧な話し方をするキャラクターも *ni* を多用し、この単数形の *ni* と区別して複数形であることを強調するため、*mina herrar* が追加されたと推測されよう。

また、騎士団長の単数形として使われる「諸君」は、*ni, mina herrar* に訳されると述べたものの、実は翻訳の中で *ni, mina herrar* のさまざまな組み合わせのバリエーションがある。その *ni, mina herrar* のさまざまな組み合わせは、たとえば以下の用例（24）のごときものである。

（24）

”Det finns ytterligare en sak som jag i korrekthetens namn bör förtälja. Det gäller *mina herrars* förtjusande flickvän... hm, den gifta damen, som kommer i den röda Minin. Jag beklagar, men jag åser faktiskt allt vad *ni* företar er här. Det som så livligt utspelar sig i sängen när *ni* klätt av er.” (p. 296)

「ああ、それからひとつ礼儀上の問題として、念のために今ここで申し上げておかなくてならないのだが、諸君の素敵なガールフレンドのことだが……、うむ、つまり赤いミニに乗ってくる、あの妻のことだよ。諸君たちがここでおこなっておくことは、悪いとは思いますが、残らず見物させてもらっている。衣服を脱いでベッドの上で盛んに繰り広げておくことだよ」

(p. 361)

用例（24）で分かるように、「諸君」は必ずしも *ni, mina herrar* に翻訳されず、二人称の *ni* が省かれ、*mina herrar*（（私の）紳士たち/諸君）のみに翻訳されることがある。逆に、下線部のように、二重複数の「諸君たち」が使われ、*ni* しか残されない例もあり、決まった訳し方がないようである。また、日本語では人称の一致がなく、名詞句の主語や目的語の省略が可能であるため、省略されたとしてもさほど違和感がない自然な文章となる。しかし、スウェーデン語では、人称の一致があるため、日本語のように人称代名詞が省略できない場合がある。そこで、スウェーデン語版の騎士団長の台詞では、原文の日本語で使われていない二人称本文についていえば、「諸君」がないところに二人称 *ni* で埋められている⁵³

⁵³ 以下の用例で分かるように、原文では二人称代名詞が使われておらず、スウェーデン語訳では、その空間は *ni* で埋められている。

上記の「4. 2. 2.」にも取り上げたように、原文の日本語では特別な接続詞が使われないものの、スウェーデン語訳の騎士団長は、特徴的な言葉遣いとして、理由を表わす *ty* を用いる。騎士団長による *Ty* 使用の用例は以下の (25) のとおりである。

(25)

“(…) *Ty* för att på detta vis möta er, mina herrar, måste jag ha en gestalt. För bekvämlighetens skull lånade jag därför kommendörens. Det spelar väl ingen roll, eller hur?” (p. 287)

「(中略) こうして諸君と向かい合うためには、何かしらの姿かたちは必要だからね。だからあの騎士団長の形体を便宜上拝借したのだ。それくらいかまわんだろうね」

(p. 350)

『スウェーデン語辞書』によると、上述 *ty* の形として見え始めるのは、1430-1450 であり、ルーン文字時代の 800-1225 年からの古語では *þy* (*thy*) として現れる。更に、『スウェーデン語辞典』では、*ty* は、接辞詞の「...だから」を表わす理由の言葉だと記されており、原文も「だから」や「4. 2. 2.」の用例 (4) の「なかろう」等に訳される。接辞詞の *ty* は、やや古い言い方を想起させる言葉であり、近代の日常会話で仮定法 *för* とともに用いられ、現代の日常会話で使用されないこと、既に「4. 2. 2.」において述べたとおりである。また、これらは書き言葉として見なされるため、騎士団長の話し方をさらに古めかしくするものであると考えられる。*Ty* の類義語は、話し言葉の *för* だが、騎士団長の言葉遣いには、接辞詞としてこの言葉が見られない。また、騎士団長は、理由を表わす言葉として *eftersom* を用いるが、このとき当該語は接続詞として使われておらず、現代的な仮定法として用いられている。さらにいえば、騎士団長以外、他のキャラクターも仮定法としての *för* しか現れず、接続詞 *ty* が一切出てこない。原文の騎士団長は、特別な理由を表わす表現を使わず、スウェーデン語では多くの人称代名詞等が存在しないことから、翻訳版における騎士団長を古風的にするために、*ty* でその要素を補った考えられる。ちなみに騎士団長の話し方について、メールで直接に翻訳者の Emond 氏にお伺いしたところ、以下のような回答を得た⁵⁴。

日本人のキャラクターはどのようなものであるかを示すため、スウェーデン語訳では出来るだけ原文の言語を反映させた。原文のキャラクターの言語を反映させるため、スウェーデン語では普段より丁寧な言語を使わせている。場合によって、呼称として *ni* 及び、*herr* か *fru* を使わせたり、たまには日本語の呼称、いわゆる名前+「さん/先生/君/ちゃん」等を残したりした。

騎士団長の言葉遣いについてだが、小説の中で彼の話し方の古めかしいところを強調しながら (*ty* の使用によって等)、騎士団長にとって特有な話し方で、日本語でも不思議に聞こえる言葉遣いを示したかった (*ingalunda* となった「あらない」等)。指摘した通り、原文のように、騎士団長は一人の話し相手に向けて *ni, mina herrar* (諸君) を使っており、言葉遣いに特徴を付ける。このような場合ではキャラクターの話し方の奇妙な特徴を残すようにした。騎士団長の言葉を反映するため、なぜこれらの言葉 (*ni, mina herrar*) を選んだかは、覚えていないが、基本的に原文と同じスタイルや表現の仕方に適応させることを試みる。

“I morgon kväll kommer *ni* att få ett telefonsamtal.” (p. 367)

「あくまでささやかなことだが、明日の夜に電話がかかってくるであろう。」 (p. 452)

⁵⁴ 日本語における答えは、執筆者による翻訳である。そして、原文は以下のようなものである。

Jag försöker därför behålla en artighetsnivå som liknar den japanska även om den är mindre vanlig på svenska. I vissa fall använder jag “*ni*” som tilltal eller “*herr*” och “*fru*” i andra fall har jag behållit japanska tilltal som namn + san/sensei/kun/chan etc. Vad gäller kommendörens språk i Murakamis roman ville jag få fram både det gammalmodiga i hans tal (till exempel genom att använda gammalmodiga ord som “*ty*”) och det som var säregnet och typiskt för honom och som lät märkligt på japanska också (som till exempel “*aranai*” som fick bli “*ingalunda*”). Som du påpekar säger kommendören “*ni, mina herrar*” i plural när han vänder sig till en enda person, och det är något han gör i det japanska originalet också och som även där låter egendomligt. I sådana fall låter jag det märkliga i en karaktärs sätt att tala vara kvar i översättningen. Jag kommer inte exakt ihåg nu hur jag valde ord som skulle återge just kommendörens sätt att tala men rent allmänt försöker jag anpassa stilnivån och uttryckssätten efter originaltexten.

Emond 氏の引用や上記の「4. 2. 2.」で取り上げた時代小説における用例でも分かるように、キャラクターの話し方に古風的な雰囲気を与えさせる一つの方法として **ty** が使われると考えられる。翻訳者は、騎士団長になぜ **ty** 等を使わせたかを覚えていないと述べるものの、**ty** はほぼ書き言葉に限って用いられ、日常会話で使われない言葉である。それゆえ、一般人にとって古く感じる言葉と想定されうるものといえる。日本語でも言語を古く感じさせる方法の一つとして、文語文のような書き言葉的な要素を発話キャラクターに使いわせる傾向がある。

最後に、前述のように、騎士団長は、「だ体（常体）」を用いており、主人公や免色と比べ、あまり丁寧には話さない。そして、『騎士団長殺し』の多くのキャラクターは、免色と会話する際に、または免色について話す際に、彼の名前に敬称「さん」を付ける。しかし、以下の(26)の下線部からも分かるように、騎士団長は、免色を「免色くん」と呼び、「くん」は、敬称「さん」より非丁寧で、親しい意を持つ敬称ではあるものの、スウェーデン語訳では、「くん」は丁寧な **herr** に訳されている。なぜこのような翻訳がなされたかは不明だが、**herr** の使用により、原文の騎士団長の非丁寧な話し方とは異なる印象を与える⁵⁵。

(26)

”Ni måste ringa till **herr Menshiki**, mina herrar, och höra om inbjudan till tisdag kväll fortfarande gäller. (p. 297)

「諸君はこれから**免色くん**に電話をかけ、火曜日の夜の招待はまだ有効かどうかを確かめなくてはならない。」 (p. 363)

5. 3. 第5節のまとめ

本節では、村上春樹の『騎士団長殺し』で登場するキャラクターの特徴的な話し方がスウェーデン語においてどのように翻訳されているかを調査し、日本語とスウェーデン語におけるキャラクターの言語的な特徴にどのような相違点・共通点があるかを調査した。本小説のキャラクターの中で、特に騎士団長の言葉遣いを分析し、『騎士団長殺し』の翻訳の仕方について明らかになったことは、表1と以下に掲げる四点のようにまとめることができる。

表1『騎士団長殺し』におけるキャラクターの特徴のまとめ

	スウェーデン語		日本語		備考
	騎士団長殺し		騎士団長殺し		
	現代キャラクター	騎士団長	現代キャラクター	騎士団長	
人称代名詞	ni/er, du	ni, mina herrar (ni/mina herrar)	あなた、名前、省略等	諸君（単数）	多くのキャラクターは、 du の複数形 ni を丁寧な言葉として使う。騎士団長のみ、聞き手は一人なのに、 ni を複数形として用いる。
敬称	herr, fru, fröken, chan 等	herr, mästare	さん、先生、ちゃん等	くん、先生	
仮定法・接辞詞	för	ty	だから等	だから等	騎士団長は理由を表わす接辞詞 ty 以外、仮定法 eftersom も使うことがある。

⁵⁵ 敬称「ちゃん」との比較のため、『騎士団長殺し』の第2部の原文では、まりえは叔母さんの秋川笙子に「ちゃん」と呼ばれ、典訳ではそのまま **chan** に訳されている。

「どれもとても生き生きしている。写真なんかより、ずっと本物のまりえちゃんみたいに見える」(pp.10-11)
 ”De är mycket levande allihop. Man ser verkligen **Mari-chan** som hon är mycket mer än på foton.” (p.10)

- 原文における会話の参加者は、「だ体（常体）」「です体（丁寧体）」を、その間柄により使い分けている。スウェーデン語訳のキャラクターに二人称代名詞 *du* か *ni* を使い分けることで、原文の文末表現の違いを表現している。例えば、『赤い部屋』の *du*=親しい関係と *ni*=知人関係のように、『騎士団長殺し』の主人公は、友人の政彦等に対して「だ体」を用い、*du* に翻訳されるのに対し、知人の免色に「です体」を使用し、その丁寧さは、*ni* に訳される。Emond 氏もこのような使い分けは、現代にあまり使われていないと述べていることから、日本語の敬語の有り様に強く影響されたものと予測される。また、原文の騎士団長は「だ体」を用いるものの、*du* ではなく、二人称 *ni* (*mina herrar*) を使う。しかし、他のキャラクターの一人の相手に使う丁寧な *ni* と異なり、複数の相手に使う非丁寧な *ni* を一人の相手に対して用いるため、「だ体」の非丁寧な形として相応しいといえよう。
- 現代のスウェーデン語では、赤の他人や目上に対してでも *herr* のような敬称があまり使用されないものの、『騎士団長殺し』では多くのキャラクターに使用される。これは原文の丁寧な言葉遣いに影響されているためと考えられる。
- 『騎士団長殺し』の翻訳文では、スウェーデン語として不自然な言葉遣いが見られる。例えば、親しいキャラクターの間の会話で使われるような *sedan/något* は、現代スウェーデン語では基本的に *sen/nåt* の形態で用いられるが、これが省略されていないため、会話がやや堅苦しいものとなっている。
- スウェーデン語では、一人称代名詞が一つしかないことから、騎士団長の「あたし」は単なる *jag* に訳されている。そして、打消し表現の「あらない」は少し堅苦しい *ingalunda* に訳されていることが分かった。単数形として使用される「諸君」は、相当自由に翻訳されるものの、*ni, mina herrar*（「(私の) 紳士たちのあなた方」に相当する）に訳されることが最も多かった。また、*ni* や *mina herrar* のみ使われる用例も見られる。そして、騎士団長の話し方をより古めかしくするために、理由を表わす接辞詞の *ty* が多用された。さらに、騎士団長以外の現代キャラクターは、類義語の *för* しか用いられず、*ty* の使用は一切出て来ない。

6. 日本語からスウェーデン語への翻訳と〈時代ことば〉(2)

本節の調査は、リンドソグ (2021) に基づく研究である。その目的は、『1Q84』で登場する深田絵里子（通称「ふかえり」）という少女の話し方を調査することである。村上春樹作品の中には特有の話し方を持つキャラクターが多く現われる。稿者は以前、『海辺のカフカ』のナカタや『騎士団長殺し』の騎士団長というキャラクターの発話分析を行ったが⁵⁶、本稿でも改めて、その再調査を行う。ナカタは、自称する際に「ナカタ」を用い、非常に丁寧な話し方をする老人であり、騎士団長は、単数形として二人称代名詞「諸君」や、打消し表現として「あらない」を用いるキャラクターであり、これらの特徴的な言葉遣いはスウェーデン語では、どのように翻訳されたかについては既に論じたとおりである。

本節の調査対象の『1Q84』で登場するふかえりの話し方にも、さまざまな特徴が見られるが、これにどのような特徴があるかをここでは検討する。ふかえり特有の言葉遣いは日本語では豊富なバリエーションがあり、多彩な話し方になっているものの、日本語のような豊富な言語のバリエーションを持たないスウェーデン語に翻訳される際に、ふかえりの話し方がどのように訳されるのかは大きな問題となる。原文の『1Q84』では古語（日本語）が使われる部分もあるため、本節の目的は、古語を含めて原文におけるふかえりの言葉遣いが、スウェーデン語にどのように置き換えられているかを調査することである。

⁵⁶ リンドソグ (2018) と Lindskog (2020)

6. 1. 先行研究

リンドソグ (2018) では、村上春樹の『海辺のカフカ』で登場するキャラクターの日本語とスウェーデン語の言語的な相違点・共通点に関する調査を行った。本調査の結果として、一人称代名詞について、日本語と異なり、スウェーデン語では、人称の一致があるため、日本語のように人称代名詞が省略できない場合があるという結論に至った。また、現在のスウェーデン語では、日本のように数多くの敬語が存在しないため、『海辺のカフカ』のナカタの「丁寧さ」がどのように翻訳されたかを調べた。その結果として、ナカタは、原文と同様にスウェーデン語による翻訳文でも、話し相手との人間関係に関わらず敬語を多用することが明らかになった。スウェーデン語の敬語を表すため、翻訳者は、さまざまな方法を用いた。例えば、現代スウェーデン語ではあまり使用されないが、ナカタは、ほぼ誰に対してでも敬称 *fru/fröken/herr*⁵⁷ や、複数二人称代名詞 *ni/er* を単数の丁寧言葉として多用することが分かった。しかし、原文の話し方と異なり、ナカタは親友のホシノのみにより親しい話し方をする。例えば、ホシノの名前に敬称をつけず、丁寧な二人称代名詞 *ni* の代りに非丁寧な *du* を用いることも分かった。

また、『海辺のカフカ』の翻訳者の一人である Yukiko Duke 氏とのやり取りで、ナカタの話し方を翻訳した際に、どのようにお考えであったかを伺ったところ、Duke 氏は、以下のように回答してくださった。

(i) (中略) 母と私は、作品を翻訳する際に、できるだけ原文に近い言語に翻訳する。(その所為で、英語版を読んだけど、日本語が話せない方から批判をうけた。スウェーデン語版は、英語版のようにヒップではないから。しかし、日本語話者は、スウェーデン語版は原文に近いと思っている。村上は、アメリカ人が翻訳するようにクールではない。) (中略)

ナカタは、少し古めかしい言葉遣いを用いるが、それは彼の丁寧な話し方の奇妙さに注目するためである。ナカタの話し方の古めかしさ以外、スウェーデン語の新しい敬語を作らず、翻訳した。

翻訳者の Duke 氏は、できるだけ原文に近い言語に翻訳を目指したが、日本語が話せない方から相当な批判を受けたと述べている。

Duke 氏が『海辺のカフカ』を翻訳して以来、村上春樹作品の翻訳者は、Vibeke Emond に変わった。Emond 氏は、『1Q84』や『騎士団長殺し』を翻訳しており、Lindskog (2020) では『騎士団長殺し』で登場する騎士団長の話し方を分析した。上記の「5. 2. 3.」等でも用例を通して示したが、騎士団長の特有な言葉遣いの中で、打消し「あらない」、二人称「諸君」と接続詞の訳し方は特徴的であった。また、騎士団長の話し方について、直接、メールで直接に翻訳者の Emond 氏にお伺いしたところ、以下のような回答を得た⁵⁸。

(ii) 日本人のキャラクターはどのようなものであるかを示すため、典訳では出来るだけ原文の言語を反映させた。原文のキャラクターの言語を反映させるため、スウェーデン語では普段より丁寧な言語を使わせている。場合によって、呼称として *ni* 及び、*herr* か *fru* を使わせたり、たまには日本語の呼称、いわゆる名前+「さん/先生/君/ちゃん」等を残したりした。

⁵⁷ *Herr* は男性に対して用いる敬称であり、*fru* は既婚で、*fröken* は未婚の女性に対して使う敬称である。

⁵⁸ 返事は、執筆者による翻訳である。原文は以下のとおりである。

Jag försöker därför behålla en artighetsnivå som liknar den japanska även om den är mindre vanlig på svenska. I vissa fall använder jag "ni" som tilltal eller "herr" och "fru" i andra fall har jag behållit japanska tilltal som namn + san/sensei/kun/chan etc. Vad gäller kommandörens språk i Murakamis roman ville jag få fram både det gammalmodiga i hans tal (till exempel genom att använda gammalmodiga ord som "ty") och det som var säregnet och typiskt för honom och som lät märkligt på japanska också (som till exempel "aranai" som fick bli "ingalunda"). Som du påpekar säger kommandören "ni, mina herrar" i plural när han vänder sig till en enda person, och det är något han gör i det japanska originalet också och som även där låter egendomligt. I sådana fall låter jag det märkliga i en karaktärs sätt att tala vara kvar i översättningen. Jag kommer inte exakt ihåg nu hur jag valde ord som skulle återge just kommandörens sätt att tala men rent allmänt försöker jag anpassa stilnivån och uttryckssätten efter originaltexten.

騎士団長の言葉遣いについてだが、小説の中で彼の話し方の古めかしいところを強調しながら（*ty* の使用によって等）、騎士団長にとって特有な話し方であり、日本語にも不思議な言葉遣いを示したかった（*ingalunda* となった「あらない」等）。指摘した通り、原文のように、騎士団長は一人の話し相手に向けて *ni, mina herrar*（諸君）を使っており、言葉遣いに特徴を付ける。このような場合ではキャラクターの話し方の奇妙な特徴を残すようにした。騎士団長の言葉を反映するため、なぜこれらの言葉（*ni, mina herrar*）を選んだかは、覚えていないが、基本的に原文と同じスタイルや表現の仕方に適応させることを試みる。

Emond 氏と Duke 氏の返事からも分かることだが、村上春樹の作品を訳す際に、原文とできるだけ近い翻訳を試みる理念がある。このような理念が、『1Q84』のふかえりの話し方にはどのように反映されているかを明らかにするのが、本節の目的である。

6. 2. 調査結果

6. 2. 1. 原文（日本語）におけるふかえりの特徴

本節では、ふかえりの話し方にどのような特徴があるかを示す。まずは、『1Q84』の主人公の一人である天吾のふかえりの話し方に関する描写を取り上げる。

(iii) 彼女の話し方にはいくつかの特徴があった。修飾をそぎ落したセンテンス、アクセントの慢性的な不足、限定された（少なくとも限定されているような印象を相手に与える）ボキャブラリー。
(Q1-1-107⁵⁹)

「センセイでショウセツを書いている」とふかえりは言った。どうやら天吾に向かって質問しているようだった。疑問符をつけずに質問をするのが、彼女の語法の特徴のひとつであるらしい。

(Q1-1-109)

上記の描写によると、ふかえりの特徴として「修飾をそぎおとしたセンテンス」「アクセントの慢性的な不足」と「限定されたボキャブラリー」があり、「疑問符をつけずに質問をする」も大きな特徴となっている。ふかえりの話し方には、さまざまな特徴的がある。以下の (1-3) の下線部はその一つの「アクセントの慢性的な不足」の用例である。

(1) 「センセイでショウセツを書いている」 (Q1-1-109)

(2) 「セキブンのはなしはおもしろかった。」 (Q1-1-110)

(3) 「センセイがいつもきいている」 (Q1-1-111)

本小説では、アクセントの不足の用例の一つとして、本来漢字で記された言葉は片仮名表記で表されることが取り上げられる。上記の用例のように、漢字語彙は、アクセントの不足の主な代表格となっており、このような片仮名表記は、他の村上春樹の作品にも見られる。用例として『海辺のカフカ』を取り上げるが、片仮名表記は発話者の言葉に対する理解度と繋がっている（脚注 7 に参照）。本小説のナカタという老人は、片仮名表記の言葉を多用し、彼の言葉への不理解を表わす。そこで、上記のふかえりの話し方も「限定されたボキャブラリー」があるとされていることから察するに、片仮名表記にはふかえりの言葉への不理解を表わす意味があると考えられる。そして、小説の話が進むにつれ、ふかえりは、ディスレクシアの持ち主であり、読み書きが困難であるとの性質が明らかになるため、語彙の不理解を表わす方法として漢字語の片仮名化や発言全体の平仮名化で表していたと考えることができる。

⁵⁹ 107 はページ番号を表わし、『1Q84』は三部作であるため、Q1 はその一冊目という意味を表わしている。更に、『1Q84』の文庫本版には前編 (1) と後編 (2) もあるから、Q1 の後に記されている 1 とは、「前編」を意味しており、「後編」は 2 と記す。

また、ふかえりの話し方には、用例（1）の「書いている」のような漢字表記が少し見られるものの、一つ以上の熟語のような言葉となれば、基本的に片仮名で表記される。また、ふかえりのアクセントの不足をさらに強調するため、用例（2-3）で分かるように、形容詞「おもしろかった」や動詞「きいている」は単に平仮名で表記されることが多い。

ふかえりに認められる大きな特徴として「疑問符をつけずに質問をする」という言葉遣いがある。以下の用例（4）のように「どうして」の疑問詞が使われているものの、質問をしているにもかかわらず、ここには疑問符が付けられていない。

（4）「どうしてショウセツをかく」

（Q1-1-113）

小説を読む読者として「疑問符が付けられて」いないことが分かりやすいものの、「疑問符をつけずに質問をする」ことが実際に聞いている方（以上の用例の天吾等）にとって分かりかねると思われる。ふかえりは、「か」や「の」のような疑問の助詞の使用も非常に少ない。それゆえに、既に取り上げた「どうやら天吾に向かって質問しているようだった」という文章が何を指しているものなのか、判然としないのである。可能性として、普段の日常会話では「の」や「か」の疑問詞を用いない際に、文末の音調をより高く強調するが、ふかえりの話し方には「アクセント不足」があるという設定になっていることから、恐らく同じ音調を保つため、質問をしていることが分かりにくいと考えられる。

イーヴァソン（2019:53）は、用例として大人と子供の会話を取り上げ、大人のキャラクターは「主婦」と発言し、子供のキャラクターは答えとして「しゅふってなに」を出す。イーヴァソン氏は前述の発言について、「しゅふってなに」には幼児語の音声的な特徴である語音の「省略・置換・付加・倒置」等が一切含まれておらず、日本語の発音として誤りなく記載されているが、一読して、幼児のあどけない音声とたどたどしさを持った発話であるかのような印象を受ける読者が多いのではないだろうか述べている。そこで、子供キャラクターの発言が平仮名化されているのは、語に対する理解度に繋がっており、ふかえりも「限定されたボキャブラリー」を持ち、言葉遣いが限定されているため、平仮名化され、彼女の話し方の幼稚さを強調すると考えられる。

6. 2. 2. スウェーデン語版におけるふかえりの特徴

原文のふかえりの話し方が特有であることは、前節の用例からも分かる。このふかえりの奇妙な話し方に大きく貢献している要素の一つに、彼女の言葉の平仮名化を挙げることができる。イーヴァソン（2019:48）が述べるように、基本的に漢字仮名混じり文で書かれる日本語の文章を読みこなすには、まず平仮名 46 字・片仮名 46 字および仮名遣いのルールを身につけなければならない。それに加えて、2000 を超える漢字を学びつつ、内容語（名詞、動詞・形容詞の語幹等）は主に漢字で、機能語（助詞、活用語尾等）は平仮名で、外来語は片仮名で書く、といった混交の基本ルールを習得する必要があるとも述べる。また、レベルが進むにつれ、文脈や想定読者層に応じた使い分けという対応も必要となり、*cherry tree* や *cherry blossom* 等を意味する /sakura/ という語を書く際、一般的な文脈では漢字で「桜の名所」、理系寄りの文章では片仮名で「サクラの品種改良」、幼児向けの絵本では平仮名で「さくらがさいた」というような書き分けが、日常的に行われているとイーヴァソン氏は述べる。日本語は、三種類の文字表記で成り立っており、文字の組み合わせによってさまざまな効果を生み出せる。ふかえりの発言を平仮名のみで表す、その表現効果は、やや幼稚的なキャラクターに見える効果を生み出すと考えられる。しかし、スウェーデン語を含めての西洋語は、基本的にローマ字のみで記されるため、ふかえりの幼稚的さを日本語のように表すことが出来ない。そこで、ふかえりの特徴的な話し方を表わすために、別の方法を使わなければならない。その方法は、たとえばスウェーデン語訳の『1Q84』では以下の用例（5-6）のように表現されている。

- (5) Du pra-ta-de om in-te-gra-ler som nåt vik-tigt. (Q1-74)
 (6) A-za-mi. (Q1-149)

用例 (5) を見れば、スウェーデン語版のふかえりの話し方に視覚的な特徴を与えるため、翻訳者は、ふかえりを音節的に話させていることが分かる。その音節的な話し方の効果を生み出すため、音節の間に「ー」（ダッシュ）が挿入されている。用例 (6) のような音節文字を使う日本の名前（固有名詞）等が使われる際に、ふかえりによる音節的な発音がより明らかとなる。

「ー」が挿入されている結果として、ふかえりはまさに拍子を取っており、話すテンポも遅く感じるから、彼女のアクセント不足が強調されると考えられよう。

しかし、ふかえりの話し方は、ほぼ視覚的に「ー」のみで表されているがゆえに、彼女の特徴的な話し方が伝わらない場合もある。例えば、以下の用例 (7) のように一音節の語彙が用いられていたら、ふかえりの話し方には、特徴を見出すのは難しく、まさに標準語を使っているように見える。原文の日本語では以下の用例 (7) は「じゃあ、なにかホンをよんで」となっており、ふかえりの単純な話し方は、平仮名・片仮名化の働きで上手く表されている。しかし、スウェーデン語版では語彙が短いほどにその特有さも失われる。

- (7) Läs nån bok då. (Q1-371)

以上の発言のような「ー」が入らない短い（一音節）言葉が使われるほど、ふかえりの特徴的な話し方を活かすこともより困難になり、他のキャラクターの言葉遣いとの区別をつけにくくなる。

6. 2. 3. 日典訳におけるふかえりの例外的な言葉遣い

原文の『1Q84』では、ふかえりの普段の話し方から外れた例外的な言葉遣いもあり、スウェーデン語版にもその言葉遣いが反映されている。例えば、以下の (8) の箇所は日本語とスウェーデン語訳では同じであり、特に日本語では印象的であるため、原文からの用例を取り上げる。

- (8) Buß und Reu'
 Buß und Reu'
 Knirscht das Sündenherz entzwei
 Buß und Reu'
 Buß und Reu'
 Knirscht das Sündenherz entzwei
 Knirscht das Sündenherz entzwei
 Buß und Reu'
 Buß und Reu'
 Knirscht das Sündenherz entzwei
 Buß und Reu'
 Knirscht das Sündenherz entzwei
 Daß die Tropfen meiner Zähren
 Angenehme Spezerei
 Treuer Jesu, dir gebären (Q1-2-125-126)

本用例でふかえりは、ドイツ語でバッハの *Buß und Reu*（『マタイ受難曲』）を歌っている。ドイツ語自体は、ローマ字で記されており、ふかえりの完璧なドイツ語の発音を表わしている。特に日本の表記文字とは大きく異なることから、その異常に完璧な発音がさらに強調される。

先にも述べたとおり、ふかえりにはディスレクシアがあり、ドイツ語の意味がどれほど通じているかは作中では不明であるものの、記憶力が強いようで何回も聴いた経験をとおして外国語で

歌われる歌の歌詞まで覚えられる人物として語られている。また、スウェーデン語版は、元々ローマ字で記されているため、ふかえりの発言をローマ字で表わしたところで、そこに特別な意味が付与されない。しかし、上記の通り、ふかえり特有の話し方を表わすのに、音節の間に「ー」が普段に挿入されているものの、歌には「ー」が使われていないことは、結果としてふかえりが、まさに標準的な言葉で話し手（歌って）いるように見える。

続いて、ふかえりの尋常ならざる記憶力がさらに強調されるのは、以下の用例（9）によってである。本用例のふかえりは、カセットテープで暗記した『平家物語』の「壇ノ浦の合戦」からの読み上げを行っている。下記は、ふかえりの通常の発言とは異なり、その言葉遣いは平仮名/片仮名化をしていないことが分かる。

（9）源氏のつはものども、すでに平家の舟に乗り移りければ

水手・梶取ども、射殺され、切り殺されて

舟をなほすに及ばず、舟底に倒れ臥しにけり。

新中納言知盛卿、小舟に乗って、御所の御舟に参り

「世の中は今はいかにと見えてさうらふ。見苦しからんものども

みな海へ入れさせ給へ」とて、ともへに走りまはり、掃いたり、のごうたり

塵ひろひ、手づから掃除せられけり。

女房たち、「中納言どの、戦はいかにや、いかに」と口々に問ひ給へば

「めづらしき東男をこそ、ごらんぜられさうらはんずらめ」とて

からからと笑ひ給へば、「なんでうのただいまのたはぶれぞや」とて

こゑごゑにをめき叫び給ひけり。（省略⁶⁰）

（Q1-2-235-238）

⁶⁰二位殿は、このありさまをご覧じて、日頃思し召しまうけたることなれば

鈍色のふたつぎぬうちかづき、ねりばかまのそば高くはさみ

神璽をわきにはさみ、宝剣を腰なさし、主上をいだきたてまつて、

「我が身は女なりとも、かたきの手にはかかるまじ。

君の御もとに参るなり。おんこころざし思ひまゐらせ給はん人々は
急ぎ続き給へ」とて、舟ばたへ歩みいでられけり。

主上、今年は八歳にならせ給へども

御としのほどより、はるかにねびさせ給ひて

御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかりなり。

御くじ黒うゆらゆらとして、御背中すぎさせ給へり。

あきれたる御さまにて、

「尼ぜ、われをばいづちへ具してゆかむとするぞ」とおほせければ

いとけなき君にむかひたてまつり、涙をおさへて申されけるは

「君はいまだしろしめされさぶらはずや。

先世の十善戒行の御ちからによって、

いま万乗のあるじと生まれさせ給へども、悪縁にひかれて
御運すでに尽きさせ給ひぬ。

まづ東にむかはせ給ひて

伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ

そののち西方浄土の来迎にあづからむとおぼしめし、

西にむかはせ給ひて御念仏さぶらぶべし。

この国は粟散辺地とて、こころうきさかひにてさぶらへば

用例（9）の大きな特徴として発言は、古い資料の読み上げであるため、古語で唱えられていることを挙げることができる。下線部は、古典日本語でよく見る表現であり、ふかえりは普段使わない言葉遣いを用いていると知られる。例えば、用例としてさまざまな古典日本語が使われており、その中には助辞の類いも数多く見出され、それはたとえば「^{たは}ふしにけり」では用言の連用形に付く「けり」という過去の助動詞や「^{たま}入れさせ給へ」の「給へ」という「与える」「くれる」の意の尊敬語で、その動作の主を敬う補助動詞等も見られる。更に、現代の日本語では使われておらず、『国語学大辞典』の項目によると「文中の連用語をうけ、その被修飾語である述語用言との結び付きを強める」の「こそ」という係助詞も見られる。他の用例も多数あるものの、ふかえりは、完璧に古典日本語を唱えている。ここにふかえりの尋常ならざる記憶力を示していると考えることができよう。また、普段の話し方との間に認められる大きな相違点として、ふかえりは「^{たは}ふしにけり」ではなく、「倒れ臥しにけり」と発言し、言葉遣いが平仮名化していない点を挙げることができる。そして、上記の（1）の「ショウセツ」のように、漢音言葉は、基本的に片仮名化する傾向があり、ふかえりの奇妙な発音を表わす方法の一つとして使われるものの、以上の用例ではその方法が全く用いられていない。それゆえ、これは彼女の完璧な発音を表わしたものと考えている。さらに、ふかえりの言葉遣いとして、基本的に短い発言をしたり、一言で答えたりするものの、以上の用例は読み上げだからか、ふかえりにしては非常に長い発言となっている。ふかえりの読み上げを聞いている主人公の天吾は、彼女の話し方について以下のように述べる。

（iv）目を閉じて彼女の語る物語を聞いていると、まさに盲目の琵琶法師の語りに耳を傾けているような趣があった。『平家物語』がもともとは口承の叙事詩であったことに、天吾はあらためて気づかされた。ふかえりの普段のしゃべり方は平板そのもので、アクセントやイントネーションがほとんど聞き取れないのだが、物語を語り始めると、その声は驚くほど力強く、また豊かにカラフルになった。まるで何かが彼女に乗り移ったようにさえ思えた。（Q1-2-238）

ふかえりは、『平家物語』からの読み上げが終わると、普段の話し方に戻る。しかし、ふかえりは、恐らく普段の日常会話等にあまり自信がないため、ほぼ一言で話すが、以上のバツハや『平家物語』の読み上げに大きな自信を持っているから、その実、古典日本語や外国語まで完璧に覚えらるる存在であると予測される。

スウェーデン語版では、先に確認した箇所は以下のように翻訳されている。特に注目したい箇所へは下線部を引いた。

（10） Då Minamotoklanens mannar äntrade Tairaklanens skepp, blevo båtsmän och befälhavare dräpta av pilar eller hugna till döds, skeppen drevo vind för våg, och ombord lågo männen fallna.
Den nye mellerste rådgivaren Tomomori steg i en liten båt och begav sig till det kejserliga skeppet.

極楽浄土とてめでたきところへ具しまゐらせさぶらふぞ」
となくなく申させ給ひければ、
^{やまばと}
山鳩色の御衣に、びんづらゆはせ給ひて
御涙におぼれ、ちいさく美しき御手をあはせ
まづ東をふしをがみ
伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ
その後西にむかはせ給ひて、御念仏ありしかば
二位殿やがていただき ^{たてまつ}奉り、「浪の下にも都のさぶらふぞ」と
なぐさめたてまつて、ちいろの底へぞ入給ふ。

”Slik ter sig världen nu. Kasta dem som plågar vår syn överbord!” sade han, varpå han hastade omkring på skeppet och med egna händer begynte sopa, putsa, damma och röja upp.

Damerna ropade i mun på varandra: ”Ers excellens, Mellersta Rådgivare, hur avlöper slaget?”

”Nu skola ni få bekanta er med förunderliga män från öst”, sade han med ett rungande skratt.

”Hur kan Ers Excellens behaga skämta i en slik belägenhet?” ropade damerna högröstat om varandra.

Nunnan av andra rang var sedan åtskilliga dagar beredd på att denna dag skulle stunda. Hon svepte om sig sin dubbla dräkt med kåpa i sorgens mörkgrå färg, rullade upp benkläderna av blanksiden och med den heliga juvelen vid sin sida samt det heliga svärdet vid höften slog hon sina armar om Hans Kejserliga Höghet.

”En kvinna jag är, dock ämnar jag ej falla i fiendens hand. Jag går med Hans Höghet. Ni som hava samma vilja, följen mig skyndsamt”, sade hon och gick mot skeppets reling. (省略⁶¹)

(Q1-371-373)

原文の日本語は、非常に古典的であり、スウェーデン語版は、その古典的な言語を反映するためにさまざまな手段を使っている。また、『平家物語』の正確な成立時期は未詳だが、恐らく13世紀に成立され、用例(9)で見たように、古典日本語で記されている。しかし、スウェーデン語版では古典言語があまり使われておらず、現代スウェーデン語と廃れている言葉遣いの併用が見られる。13世紀初期のスウェーデン語は、まだルーン文字を使っており、1225年にキリスト教を通してローマ字が紹介されたものの、現代スウェーデン人にとって非常に難しく、あまり読めない言語であったため、以上の用例で用いられなかったものと推察される。そこで、読みやすくするため、現代スウェーデン語が主に使われ、古風な雰囲気を与えさせる方法として、古語的な要素が追加されたと考える。

古語的な要素として、下線部のような *blevo/drevo/lågo* の動詞が用いられている。これらの動詞は、古語の過去形を使用し、Bergman (2013:109) が述べるように、16世紀では動詞の複数過去形を表わすのに *-o* が語末に追加された。現代スウェーデン語では動詞の複数形が使われず、上記の語彙は一般的に *blev/drev/låg* の *-o* 無しに記される。

命令表現の複数形も現れており、現代スウェーデン語で使われている *följ* は古語的な *följen* (日本語の「急ぎ続き給へ」からの翻訳) に訳されており、*-en* 末尾が追加されていることで複数形となっているが、現在では命令表現の複数形が使われていない。命令形に *-en* 付きは16世紀の聖書等で見られ、Bergman (2013:92) は、その使用について1526年新約聖書の〈聖書語〉と〈官庁ことば〉の共通点もあり、Lukas 23 r. 32 f.で分かるように複数二人称の命令形は、*-er* (*gråter icke*) で終わり、より古い語尾の活用形 *-en* (*gråten icke*) は新約聖書で使われたと述べる。なお、語末の *-en* 付きは、古い起源を持つと考えられているが、現在に使われている文法形に似ていることもあり、現代スウェーデン人が読むこともできる。上記の Hagberg (1847-51) による『ハムレット』と『リア王』でも *-en* 末尾の使用による言葉の古語化が見られた。

⁶¹ Hans Kejserliga Höghet var åtta år, dock tedde han sig långt mognare än vad som brukligt var i hans ålder. Han var vacker som en dag, och allt kring honom glänste. Hans böljande svarta hår räckte honom nedanför skuldrorna. Ängsligt sporde han: ”Ack, mormor, vart för ni mig?”

Nunnan av andra rang vände sig mot hans höghet, gossebarnet, och kvävde sina tårar. ”I din ringa ålder kan du väl ännu ej förstå det. Du föddes till ädel kejsare, tack vare hur du i livet före detta iakttog de tio buden, dock har ett ont karma nu ändat detta öde. Vänd dig först mot öster och tag avsked av Ises helgedom. Sedan åt väster med en bön till Buddha att han må föra dig till paradiset rena land i väst. Vårt land, som kallas det avsides lilla landet, har varit svårt att leva i, nu skola vi dock följas åt till det saliga paradiset”, sade hon med gråt i rösten.

Klädd i grågrön dräkt, och med håret samlat på ynglingars vis, knäppte Hans Höghet sina vackra, små händer, och med tårarna tillrande vände han sig först mot öst och tog avsked av Ises helgedom, därefter åt väst med en bön åt Buddha. Nunnan av andra rang höll Hans Höghet i sin famn, och efter hennes tröstande ord: ”Under vågorna finns också en huvudstad”, sjönko de tillsammans ner i djupet.

言葉の面でも、古めかしい語彙や語形が使用されている。例えば、以上の用例では「そのような」という意の *slik* (現在は *sådan*) が使われている。『スウェーデン辞書』の項目によると、*slik* は、13 世紀に起源を持ち、現代では古語として扱われる言葉である。

続いて、スウェーデン語では動詞の中で話し言葉的な短い形式と書き言葉的な長い形式の言葉がある。長い形式は、会話で短い方より使用が少ないが、上記の用例では短い形式の *ha* ではなく、長い *hava* が用いられている。そのため、僅かな書き言葉であっても、古語的な印象を与える。上記では話し言葉として *ska* (英語の単純未来/意志未来等を表わす *shall* と同じく) という動詞が使われると述べた。そして、書き言葉で古風的な印象を与えるため、長い形式の *skall* が使用される。スウェーデン語訳のふかえりも基本的に話し言葉の *ska* を用いるものの、『平家物語』を引用する際に限って話し言葉として廃れている *skola* を用いる。*Skola* は、*skall* のように書き言葉で全体の文章に古風な印象を与え、スウェーデン語を〈時代ことば〉調にしようとする時に使われることが多いように思われる。

文章を古語的にするのに、もう一つの方法として倒置文を発話者に使わせる用例もある。上記の下線部では *En kvinna jag är* (女です、私は) という発話があるが、このような言葉遣いは珍しく、一般的な会話では *En kvinna jag är* → *Jag är en kvinna* (私は女です) のようになることが多い。この点、翻訳に古い雰囲気を与えることに成功しているといえよう。

上記のように日本語の古典を反映するために、スウェーデン語の古語的な要素が使われている上で、両訳においてふかえりの話し方の普段と変わっている要素がうかがえる。例えば、ふかえりの話し方にほぼ常に現れる「ー」が上記の用例で見られず、原文と同じくより標準的な発音の仕方に見える。ふかえりの話し方は、普段「修飾をそぎ落したセンテンス、アクセントの慢性的な不足、限定されたボキャブラリー」であるが、上記の用例の両訳もそれぞれの方法で彼女の「修飾あるセンテンス、アクセント付き、豊富なボキャブラリー」を表わしていると考えられる。

6. 3. 第6節のまとめ

本節の目的は、ふかえりの話し方における日本語とスウェーデン語の特徴を調べ、古典日本語を含めて原文におけるふかえりの言葉遣いからスウェーデン語にどのように置き換えられているかを調査することである。ふかえりの話し方について明らかになったことは以下のとおりである。

- ふかえりの話し方の特徴として、「修飾をそぎおとしたセンテンス」「アクセントの慢性的な不足」「限定されたボキャブラリー」や「疑問符をつけずに質問をする」が取り上げられ、日本語とスウェーデン語訳ではそれぞれの方法で表されている。
- 日本語は、文字のさまざまな表記法を持っているため、村上春樹は、ふかえりの非標準的な発音を表わすのに、平仮名や片仮名の表記を利用したと考えられる。例えば、ふかえりの話し方には漢字があまり用いられておらず、動詞は基本的に「聞いている」ではなく「きいている」のように表記されることが多く⁶²、熟語は「センセイ」(先生)のような片仮名表記で記されていた。平仮名と片仮名が多用されることで、ふかえりの話し方に少し幼稚的な印象を付与している。
- スウェーデン語は、文字表記としてローマ字しか使わない。それゆえ、原文のようにふかえりの特徴的な言葉遣いを上手く表せない。その代わりに、ふかえりの発言の中に使用される言葉の音節の間に「ー」(ダッシュ)が挿入された。また、「ー」挿入のことでふかえりは、まさに拍子をとっているように見えたと考えられる。しかし、一音節語が多用された文章では「ー」を挿入できず、ふかえりの特徴的な話し方を表わせない用例もあった。このような事例は、一般的なスウェーデン語を話しているかのような印象を与えかねない用例である。
- ふかえりの尋常でない記憶力を示す用例もあった。例えば、ふかえりは、完璧なドイ

⁶² 「書いている」のような漢字で表せる例が的な場合もあったが、平仮名表記より少ない。

ツ語でバッハの *Buß und Reu* を歌う場面がある。ここには彼女の普段の話し方に現れる特徴を見出せなかった。また、外国語だけではなく、古典日本語も完璧に唱えられることが分かった。ふかえりは、『平家物語』の「壇ノ浦の合戦」からの読み上げを行い、普段の話し方の相違点として、文章は平仮名も片仮名化もしていないことを挙げることができる。また、漢字も多用され、それまでの発話形態の在り方とは異なり、その一言は長い発言に変更されていた。

- スウェーデン語版のふかえりは、古典スウェーデン語を用いなかったが、現代語と古語を組み合わせることで、結果として言葉遣いに古めかしい雰囲気を与えた。古語的な要素として、*blevo/drevo/lågo* のような *-o* 末尾がついている古語の過去形の動詞が見られる。また、Hagberg (1847-51) による『ハムレット』と『リア王』にも現れる命令表現の複数形が見られた。例えば、現代スウェーデン語で使われている *följ* は古語的な *följen* に訳されており、*-en* 末尾が追加されているものの、現在では命令表現の複数形が使われていない。言葉の面でも、古めかしい語彙や語形が使用され、現代 *sådan* (そのような) の代りに、古語的な *slik* 等が使われている。また、スウェーデン語では動詞の中で話し言葉的な短い形式と書き言葉的な長い形式の言葉がある。ふかえりによる『平家物語』の引用は、日常会話で一般的に使われる短い形式の *ha* ではなく、長い *hava* が用いられていることから、書き言葉で、かつ古語的な印象を与える。さらに、ふかえりは、基本的に話し言葉の *ska* を用いるが、『平家物語』を引用するときに限って話し言葉として廃れている *skola* を用いる。*Skola* は、書き言葉で全体の文章に古風な印象を与える。文章を古語的にする方法の一つとして倒置文を発話者に使わせる用例もあった。

最後に、翻訳者の Emond 氏は、原文のふかえりの話し方を反映させるために、さまざまな方法を用いたが、いくつかの結果を見出すことができた。例えば、「一」の挿入でふかえりは、一般的な話し方をしないことが十分に伝わったものの、「一」を使えないところもあったことから、その機能を十分に果たせない事例があった。しかし、『平家物語』の読み上げで、それまで用いられ続けた「一」を無くすことで、ふかえりが流暢に話しているさまを上手く表現することに成功している。

第4章 終章

本研究では、〈時代ことば〉を中心に日本語とスウェーデン語の役割語・役割語の使用・役割語の翻訳を比較する調査を行った。日本語の役割語は、非常に発達しているが、スウェーデン語では、日本語のような多様な人称代名詞と文末表現の語彙がないが、それでも一人称および二人称の役割語的な言葉遣いを見出せた。そして、人称代名詞が少ないため、キャラクターの用いた特徴的な言葉遣いを調べ、疑問詞、動詞や接続詞の役割語を発見した。

本研究で得られた成果は以下のとおりである。

1. 村上春樹の作品では、スウェーデン語のかなり古い敬語制度が使われることが分かる。原文の話し手は「だ体（常体）」か「です体（丁寧体）」を使ったかによって、スウェーデン語訳における二人称の使用も変化する。「だ体」のキャラクターは、非丁寧な *du*、「です体」のキャラクターは丁寧な *ni* の二人称代名詞を用いた。しかし、現代スウェーデン語では基本的にこのような使い分けがなく、*du* で呼び合うようになっている。さらに、スウェーデン語訳では敬称も多用されるが、これは普段の日常会話であり使われていないため、ここに原文からの影響を想定することができよう。村上作品における敬語は、現代スウェーデン語より、19 世紀末期頃で使われたスウェーデン語の敬語に似ているため、村上春樹のような現代作品では古風な雰囲気を与える。
2. 1526-1917 年の間に使われた聖書では、さまざまな特徴的な言葉遣いがある。当時のスウェーデン語と比べ、聖書の言葉遣いは既に古風なものであったといえる。この古風的な言葉遣いは 1901 年の *Ett Drömspel* (『夢の劇』) の劇にも見出すことができる。本劇では、アングネスという神の娘は、聖書で多用された二人称 *I/eder*、疑問詞 *(h)vi* や動詞の複数形 *låtom* 等を使用することが知られ、人間からアングネスや神に限って用いた *I* や *(h)vi* の言葉遣いも見られた。聖書で使われる言葉は、当時の人によってよく知られたものであったと考えられ、アングネスによる言葉遣いや人間から神様に対する発話は、スウェーデン語の〈神様語〉または〈聖書語〉として捉えられるといえよう。ストリンドベリの *Ett Drömspel* (『夢の劇』) 以外、Hagberg (1847-51) による『ハムレット』(*Hamlet*) と『リア王』(*Konung Lear*) でも同じような〈聖書語〉の使用が見られた。例えば、古語的な二人称 *I*、疑問詞の *hvi* (どうして) や *togo* という古語の過去形が使用され、使用数が少ないものの、*statt stilla* の古語的な命令形の使用もあった。スウェーデン語に翻訳された村上春樹の『1Q84』でも、『平家物語』を引用するふかえりが古語的な要素として *blevo* のような *-o* 末尾がついている古語の過去形の動詞を用いる。ここにスウェーデン語における作品で、古語的な雰囲気を与えさせたい時に廃れている動詞の複数形を使う傾向を見出しうるだろう。
なお、聖書の古い言葉遣いの共通点として *Ett Drömspel* (『夢の劇』)、『ハムレット』、『リア王』と『1Q84』では *följen* 等の *-en* 末尾が追加されている古語の命令形が使われている。
3. 日本聖書では、書き言葉的な文語体が全体的に使われ、重々しい雰囲気を与えている。スウェーデン聖書でも話し言葉の *ska* ではなく、*skall* 等の書き言葉が全体的に使われるという共通点が見られ、聖書全体に重々しい雰囲気を与える。そして、『ハムレット』と『リア王』は古い劇 (1603 と 1608 年) であり、Hagberg (1874-51) はこれらの劇により古い雰囲気を与えさせるために、聖書のようにキャラクターに書き言葉的で重々しい語彙を使わせたと考えられる。例えば、話し言葉 *ska* が一切使われず、書き言葉 *skall* のみが用いられるのも、このためであろう。Guillou (1998-2000) による三部作の時代小説では、*ska* の使用数が次第に少なくなり、三部作目では *skall* しか使われていない。*Skall* ではないが、『1Q84』のふかえりも『平家物語』の引用で、*skola* (*ska* の辞書形) という重々しい書き言葉を用いる。
4. 1909 年の『少年バック』における少年向けの漫画雑誌の用例では、老僧による「我」「汝」(そち・なんじ) の使用や、戦国と江戸時代の舞台の武士キャラクターから子供に対し

て「我」と「汝」を用いた用例もあった。文語体で記されている戸沢（1905/6）でも、古い時代を表わすのに「われ」や「なんじ」（併用ではなかったが）の使用が多かった。明治期では、特に「汝」は聖書との強い結びつきがあったものの、室町江戸時代の武士や老僧キャラクターによる用例もあったから、〈時代ことば〉としての認識もあったかもしれない。この点に関してはさらなる調査が必要であると考えている。

5. 『騎士団長殺し』の騎士団長に多用される「あらない」から翻訳された *ingalunda* の使用例は、1300 年から見られるが、調査した管見の限りでは *ingalunda* の使用がフィクション作品の中で非常に少なく、時代キャラクターの話し方に特徴づけるものというより、原文の騎士団長の奇妙な話し方を表すために使用された。
6. Guillou 氏による現代の時代小説で登場するキャラクターや騎士団長のような時代キャラクターの話し方を古風的に思わせるため、重々しい書き言葉が用いられていた。例えば、騎士団長の話し方には、人称代名詞の特徴的な使用が認められるが、スウェーデン語では人称代名詞等が少ないため、書き言葉 *ty* という接続詞の使用で、これを補っていたと考えられよう。類義語の *för* は、同作品の現代キャラクターの言葉遣いに見られるものの、騎士団長は *för* を全く使わず、スウェーデン語訳の騎士団長に特徴をつけるため、*ty* が代わりに使用されている。また、*ingalunda* と異なり、*ty* は *för* と共に、調査対象の Guillou 氏の時代小説のキャラクターによって多用され、本時代小説では書き言葉 *skall* という動詞も、普段使われる話し言葉 *ska* の代わりに現れる。*Skall* と *ty* は書き言葉要素が強いため、時代キャラクターの言葉遣いに古風との性格を付与する方法の一つとして、それらが使われると考える。
7. 日本語とスウェーデン語では〈王様ことば〉の役割語が存在していると考ええる。スウェーデンでは、勅令の場面では王様は、一人称として *jag* の複数形 *vi* を用いる傾向があり、*vi* の使用は、調査対象の Guillou（1999）の時代小説の王様と女王キャラクターの話し方にもうかがえた。スウェーデン語における『ハムレット』（*Hamlet*）と『リア王』（*Konung Lear*）でも原文の英語と同じような一人称代名詞の使用の傾向があり、王様キャラクターによる“royal we”（尊厳の複数）に相当する *vi*、*oss* や *vår* 等（英語の *we*、*us*、*our* と同じ）の使用が多く見られ、他のキャラクターは基本的に単数形の *jag* のみを用いる。しかし、王様キャラクターも親しい人と話す際に、複数形の一人称 *vi* ではなく、基本的に単数形 *jag* を用いることも分かった。
8. 日本語における『ハムレット』と『リア王』では“royal we”が単数形となっている。それゆえ、本稿ではこれを「尊厳の単数」と呼ぶ。明治期の『ハムレット』と『リア王』における尊厳の単数は、戸沢（1905/6）でそれぞれ「朕（われ）」と「予（よ）」になっていた。坪内（1909/12）にも「予（よ）」と「予（われ）」の使用が見られ、坪内による改訳（1933/34）でもほとんどの一人称は、「予（よ）」となっている。三神（1964）にも同じ使用傾向の「余（よ）」が見られ、より古い訳では王様キャラクターは、尊厳の単数として「よ（余/予）」を使うことが多い。
9. 現代訳では、「よ」のみならず、「わし」も尊厳の単数として、用いられることが多い。特に小田島（1973/74）訳から「わし」が「よ」より使用されるようになり、野島（2000/2）まで「わし」が多用される。しかし、大場（2004/5）訳では、一つの一人称として「わし」が使われ、「よ」の使用もある。
10. 二人称複数使用の面では、近代の戸沢と坪内訳において「おぬし（おのし）」、「そなた」や「なんじ」等の使用が多く、福田訳（1959/62）から現在にかけて「おまえ」が多用されるようになる。日本語訳の王様キャラクターは、見下すような二人称代名詞を使う傾向がある。
11. 日本語訳における『ハムレット』と『リア王』の王様キャラクターが使う命令形は、堅い言葉遣いが多い。どの日本語訳でも「え・ろ」という命令形が特に多い。「え・ろ」は「行け」「来い」や「しろ」等の命令形を指すものであり、「え・ろ」以外では「(て) くれ」と「～がいい（よい）」の命令表現も多かった。「してくれ」を主に用いるのは、聞き手より上位にある男性だと分かり、王様キャラクターに相応しい言葉遣いだと考えられる。そして、「～がいい」の表現は、「行為の妥当性」を表わし、慣用的な使い方である。そこで、封建時代やフィクションにおける王様とは、国のトップとしてどの行動が

正しいか、他人に決めつける権利があるので、「行為の妥当性」を表わす「～がいい」という表現も王様キャラクターの話し方に適していると考えられる。

日本語の〈時代ことば〉には長い歴史があり、現代のフィクション作品において〈武士ことば〉や〈神様語〉等の数多く用いられている。本稿の検討結果として、スウェーデン語で使われる古風な言葉を〈時代ことば〉と呼べるかは正直難しいものがある。

役割語とは特定のキャラクターに特定の話し方と結び付けられる時に役割語と呼ぶ。しかし、原文およびスウェーデン語に翻訳された作品において、古風な言葉遣いは作品全体に古めかしい印象を与えさせるために、使用されることが多かった。その用例としてシェイクスピア劇、Guillou 氏の時代小説と『1Q84』のふかえりによる『平家物語』の引用を挙げることができる。全体の話に古風な雰囲気をもとわせるため、書き言葉（*ska*、*ty*、動詞の複数形等）が多用された。

また、特定のキャラクターを特徴づけるために、特定の語彙が用いられる用例もあった。例えば、ストリンドベリによる 1901 年の *Ett drömspel*（『夢の劇』）の主人公アングネスは、神の娘で聖書の特徴的な言葉を用いるため、その言葉は〈神様語〉だと考えられる。しかし、本作品以外、キャラクターが〈神様語〉を用いる用例を未だ発見し得ていない。さらなる検討が必要である。

スウェーデン語訳における『騎士団長殺し』の騎士団長も特有な語彙を用いるものの、原文のように騎士団長にとって特有な語彙であるため、これは役割語に当てはまらないと思しい。しかし、役割語で〈時代ことば〉と呼べる言葉遣いはあったと考える。その言葉遣いは、王様キャラクターによる〈王様ことば〉であり、特に一人称 *vi* という尊厳の複数に指す。そして、スウェーデン語で〈時代ことば〉として使われる語彙をまとめると、以下の個人と集団的役割語のようになる。

個人的役割語

1. 〈王様ことば〉→尊厳の複数 *vi*
2. 〈神様語〉→二人称 *I*、疑問詞 *hvi*、複数形の動詞（*blevo*、*följen* 等）

集団的役割語

1. 書き言葉→動詞 *skall*（*skola*）
2. 複数形の動詞→*blevo*、*följen*、*låtom* 等
3. 特定の語彙→*ty*、*thordön*、*slik* 等

今後の課題として、〈時代ことば〉についての詳細な調査の実施をつうじた分析を挙げることができる。本稿ではシェイクスピアの『ハムレット』と『リア王』の王様キャラクターによる人称代名詞と命令表現について触れたが、他の要素については論じなかった。この点、今後の課題である。本稿では取り上げなかったが、〈王様ことば〉は、〈武士ことば〉と〈老人語〉との共通点を持つと予測されるだけに、その共通点については具体的な考究を企図している。

参考資料と参考文献

参考資料：

阿毛久芳、松田伊作、勝原晴希、下山嬢子(校注) (2001) 「新体詩 聖書 讃美歌集」『新日本古典文学大系 明治編』岩波書店

大場健治 (2004) 「ハムレット」『シェイクスピア選集⑧』研究社

大場健治 (2005) 「リア王」『シェイクスピア選集⑨』研究社

小田島雄志 (1973) 「ハムレット」『シェイクスピア全集 I』白水社

小田島雄志 (1974) 「リア王」『シェイクスピア全集 II』白水社

川端昇太郎 (主筆) (1909) 「鯉の引導」『少年パック』第 3 巻/第 4 号 (p.10)、東京少年パ
ッ

ク社

川端昇太郎 (主筆) (1909) 「七歳の光国」『少年パック』第 3 巻/第 4 号 (p.11)、東京少年
パ

ック社

川端昇太郎 (主筆) (1909) 「森蘭丸の智」『少年パック』第 3 巻/第 11 号 (p.6)、東京少年
パ

ック社

川端昇太郎 (主筆) (1910) 「催眠術」『少年パック』第 4 巻/第 2 号 (p.3)、東京少年パ
ッ

ック社

木下順二 (1989) 「リア王 策には策を」『シェイクスピア VII』講談社

シェイクスピア (作)、野島秀勝(訳) (2000) 『リア王』岩波文庫

シェイクスピア (作)、野島秀勝(訳) (2002) 『ハムレット』岩波文庫

ストリンドベリ編：01 (2008)、笹部博士 (著) 『令嬢と召使』メジャーリーグ、星雲社

坪内逍遙 (1909) 「ハムレット」『シェイクスピア翻訳文学書全集③』2000 年発行、大空社、
早稲田大学出版部

坪内逍遙 (1912) 「リヤ王」『シェイクスピア翻訳文学書全集⑪』2000 年発行、大空社、早稲
田大学出版部

坪内逍遙 (1933) 「ハムレット」『新修シェークスピア全集第二十九巻』中央公論社

坪内逍遙 (1934) 「リヤ王」『新修シェークスピア全集第三十巻』中央公論社

戸沢姑射 (1905) 「ハムレット」『シェイクスピア翻訳文学書全集②』1999 年発行、大空社、
大日本圖書株式会社

戸沢姑射 (1906) 「リア王」『シェイクスピア翻訳文学書全集⑤』2000 年発行、大空社、大日
本圖書株式会社

福田恆存 (1959) 「ハムレット」『シェイクスピア全集 12』新潮社

福田恆存 (1962) 「リア王」『シェイクスピア全集 12』新潮社

三神勲 (1964) 「ハムレット」『シェイクスピア I 世界古典文学全集 41』筑摩書房

村上春樹 (2009) 『1Q84 BOOK 1 〈4 月-6 月〉前編 (1)』新潮文庫

村上春樹 (2009) 『1Q84 BOOK 1 〈4 月-6 月〉後編 (2)』新潮文庫

村上春樹 (2005) 『海辺のカフカ (上)』(平成 27 年 (2015) 48 刷に参照) 新潮文庫

村上春樹 (2005) 『海辺のカフカ (下)』(平成 26 年 (2014) 48 刷に参照) 新潮文庫

村上春樹 (2017) 『騎士団長殺し 第 1 部 顕れるアイデア編』新潮社

村上春樹 (2019) 『騎士団長殺し 第 2 部 遷ろうメタファー編』(上) 新潮文庫

『文語訳 新約聖書 詩篇付』(2014) 岩波文庫

Bibeln eller den Heliga Skrift, Gamla och Nya Testamentet De Kanoniska Böckerna 1917, Stockholm

Carl XII Biblia eller den Heliga Skrift, Gamla Testamentets Canoniska Böcker 1703, Brittiska och Utländska
Bibelsällskapet 1873

Carl XII Biblia eller den Heliga Skrift, Nya Testamentets Canoniska Böcker 1703, Brittiska och Utländska Bibelsällskapet 1873
 Guillou, Jan (1998), *Vägen till Jerusalem*, Finland
 Guillou, Jan (1999), *Tempelriddaren*, Finland
 Guillou, Jan (2000), *Riket vid vägens slut*, Finland
 Murakami, Haruki (förf.)(2009), Emond, Vibeke (övers.)(2011), *1Q84 FÖRSTA BOKEN*, Falun
 Murakami, Haruki (förf.), Duke, Eiko/Yukiko (övers.)2015, *Kafka på stranden*, Norstedts, Stockholm
 Murakami, Haruki (förf.), Emond, Vibeke (övers.) 2018, *Mordet på Kommendören En Idé Uppenbarar sig*, Norstedts, Stockholm
 Murakami, Haruki(förf.) (2019),Emond, Vibeke(övers.)(2019), *Mordet på Kommendören: En Föränderlig Metafor*, Stockholm
 Shakespeare, William (1603), *Hamlet Prince of Denmark*, *The Complete Works of William Shakespeare* (1916), Oxford University Press
 Shakespeare, William (1608), *King Lear*, *The Complete Works of William Shakespeare* (1916), Oxford University Press
 Shakespeare, William (förf.), Hagberg, C.A. (1847-1851), *Konung Lear*, *Shakespeares Dramatiska Arbeten*, Lund
 Shakespeare, William (förf.), Hagberg, C.A. (1847-1851), *Hamlet, Prins af Danmark*, *Shakespeares Dramatiska Arbeten*, Lund
 Shakespeare, William (förf.), Pyk, Sture (2014), *Hamlet*, Modernista
 Shakespeare, William (förf.), Ristarp, Jan (2010), *Kung Lear – Antonius och Kleopatra*, Atrium Förlag
 Strindberg, August (1887), *Fadren*, (2013) Jiahu Books
 Strindberg, August (1888), *Fröken Julie*, (2013) Jiahu Books
 Strindberg, August (1901), *Ett drömspel*, (2013) Jiahu Books
 Strindberg, August (1879) (著)、古城建志 (編訳) 『北欧3ヵ国語で読むストリンドベリーの赤い部屋〈第1章～第3章〉』 (2003) 大学書林
 Strindberg, August (著)、毛利三彌 (訳) (1975) 「父」『ストリンドベリ名作集』白水社
 Strindberg, August (著)、千田是也 (訳) (1975) 「令嬢ジュリー」『ストリンドベリ名作集』白水社

参考文献：

荒井良雄 (2010) 『シェイクスピア劇の翻訳と演出—坪内逍遙と加藤長治』 英光社
 荒井良雄 (2011) 『戦後日本のシェイクスピア—国際化から二十一世紀へ』 英光社
 イーヴァンソン房枝 (2019) 「マンガに現れるヴァーチャル表記～日本語表記の特徴を生かした表現効果～」『言語の流れを自由に泳ぐ』 Göteborgs universitet
 岩田美穂、金水敏 (編) (2014) 「おぬし」『〈役割語〉小辞典』 研究社
 岩田美穂、金水敏 (編) (2014) 「ぬ」『〈役割語〉小辞典』 研究社
 内村世紀 (1990) 『シェイクスピアと現代劇』 関東学園大学
 大槻文彦 (1889 - 91 年刊) 『明治期国語辞書大系 [普 5] 日本辞書 言海』 1998 年、大空社
 尾崎義、田中三千夫、下村誠二、武田龍夫 (1990) 『スウェーデン語辞典 SVENSK-JAPANSK ORDBOK』 大学書林
 金田純平 (2011) 「要素に注目した役割語対照研究—「キャラ語尾」は通言語的なりうるか—」
 金水敏 (編) 『役割語研究の展開』 くろしお出版
 金水敏 (1995) 「日本語史からみた助詞」『月刊言語』 第 24 巻第 11 号 (pp. 78-84)、大修館書店
 金水敏 (2003) 『〈もっと知りたい！日本語〉ヴァーチャル日本語役割語の謎』 岩波書店
 金水敏 (2011) 「日本語史とは何か—言語を階層的な資源と見る立場から—」『早稲田日本語研究』 20 号 (pp. 3-10)、早稲田大学日本語学会

- 金水敏（2011）「現代日本語の役割語と発話キャラクタ」『役割語研究の展開』くろしお出版
- 金水敏（2014）『〈役割語〉小辞典』研究社
- 金水敏（2014）「諸君」『〈役割語〉小辞典』金水敏（編）、研究者
- 金水敏（編）（2014）「たまえ」『〈役割語〉小辞典』研究社
- 金水敏（編）（2014）「ん」『〈役割語〉小辞典』研究社
- 金水敏（2017）「言語—日本語から見たマンガ・アニメ」『マンガ・アニメで論文・レポートを書く—「好き」を学問にする方法—』山田奨治(編)、ミネルヴァ書房
- 金水敏、田中ゆかり（編）、金水敏（編）、児玉竜一（編）（2018）「役割語としての「ヴァーチャル時代語」」『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！—世界観を形づくる「ヴァーチャル時代語」—』笠間書院
- 金水敏（2019）「村上春樹作品と日本語史の「共鳴」—『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考—」『村上春樹における共鳴』中村三春（監）、曾秋桂（編）、淡江大學出版中心
- 佐藤里美（1992）、言語学研究会（編）「依頼文—してくれ、してください—」『ことばの科学 5』むぎ書房
- シュナイダー・B（1970）「人称代名詞の翻訳の問題」『聖書翻訳研究』第4号（pp. 3-6）、日本聖書協会
- ジョアン・ロドリゲス原著；土井忠生訳（1974）『日本大文典』三省堂
- 林巨樹（1970）「日本語の性質、中でも敬語について」『聖書翻訳研究』第9号（pp. 3-9）日本聖書協会
- 藤本真理子、金水敏（編）（2014）「なんじ」『〈役割語〉小辞典』研究社
- 藤本真理子、金水敏（編）（2014）「わし」『〈役割語〉小辞典』研究社
- ブラウン、S. R.（著）（1863）、加藤知己（編）、倉島節尚（編）（1998）『会話日本語：複製と翻訳・研究』三省堂
- 御法川恵子（1965）「聖書和訳とその訳語についての国語学的研究」『日本文学』25号東京女子大学日本文学研究
- 刘璐（2012）『現代の時代もののフィクション作品における「疑似古語」についての日中対照研究』大阪大学大学院言語文化研究科、博士学位申請論文
- リンドソグ、セバ스티アン（2018）「『海辺のカフカ』のキャラクターのスウェーデン語への翻訳について」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書（1）』大阪大学大学院文学研究科
- リンドソグ、セバ스티アン（2021）「『1Q84』のふかえりによる日瑞訳の話し方について」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書（4）』大阪大学大学院文学研究科
- 山口治彦（2007）、金水敏（編）「役割語の個別性と普遍性—日英の対照を通して—」『役割語研究の地平』くろしお出版
- 依田恵美（2014）「あたし」『〈役割語〉小辞典』金水敏（編）、研究者
- 吉野政治（2019）「ヘボン訳福音の訳文の成立—マルコ伝を中心に—」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』同志社女子大学大学院文学研究科
- 『日本国語大辞典』（2001）第二番、小学館
- Andersson, Jonas 2012, *Du/Ni-tilltal i svensk dramadialog -En undersökning om tilltal i fyra pjäser från 1925 till 1997-*, Kandidatuppsats, Linnéuniversitetet
- Bergman, Gösta 2013, *Kortfattad Svensk Språkhistoria*, Studentlitteratur AB
- Brown, R., Gilman, A., Giglioli, P. P. (ed.) (1972), *The Pronouns of Power and Solidarity, Language and Social Context*, Penguin Books, England
- Kinsui, S. & Yamakido, H., 2015. Role Language and Character Language. *Acta Linguistica Asiatica*, 5(2), pp. 29-42.
- Kraemer, Tobias von 2013, *Lord Language and the Influence of Archetypes, A Study on Japanese Role Language*, Bachelor's thesis, Lund University
- Lindskog, Sven Sebastian（2019）『スウェーデン語における聖書語—日本聖書との比較—』博論作成演習

Lindskog, Sven Sebastian (2020) 「『騎士団長殺し』のキャラクターのスウェーデン語への翻訳の仕方について」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(3)』金水敏(編)、大阪大学大学院文学研究科

Nahlbom, Katharina (2013), Stiltrogenhet och kulturell anpassning i fyra svenska King Lear-översättningar, *Översättning, stil och lingvistiska metoder*, (pp. 151-175) Göteborgs universitet

Nordberg, Bengt (2013), Vad är sociolingvistik?, *Sociolingvistik*, Stockholm

Pahlm, Lars Gunnar (2007), *Från kristendom till religionskunskap, En studie av skolans religionsundervisning*, examensarbete, Kalmar högskolan

Sundgren, Eva (2013), Språklig variation och förändring, *Sociolingvistik*, Stockholm

Teleman, Ulf (2007), *Tradis och funkis: svensk språkvård och språkpolitik efter 1800*, 1 uppl. Stockholm: Norstedts ordbok

インターネット文献:

ジャパンナレッジ (JapanKnowledge Lib) <https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/library/> (2020-11-18 確認) :

- ・「あらない」『日本国語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=20020027a443OVD0BO99> (2020-11-18 確認)
 - ・「お - まえ [・・まへ] 【御前】」『日本国語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=200200a8f11d40OYr0rB> (2021-10-06 確認)
 - ・「きみ【君・公】」『日本国語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=20020116e6d1U1IXFc66> (2021-10-06 確認)
 - ・「そ - ち 【其方】」『日本国語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=20020281a3b0RHXTt3Fi> (2020-11-18 確認)
 - ・「ちん【朕】」『国史大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=30010zz322410> (2021-05-23 確認)
 - ・「な - んじ [・・んぢ] 【汝・爾】」『日本国語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=2002032bfb6dgbzi7wU2> (2020-11-18 確認)
 - ・「よ【余・予】」『角川古語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=200375150790000> (2021-05-23 確認)
 - ・「よ【余・予】」『日本国語大辞典』
<https://japanknowledgecom.remote.library.osakau.ac.jp:8443/lib/display/?lid=2002044bf50c49ejWbe3> (2021-05-23 確認)
 - ・「わし【私・儂】」『角川古語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=200375181780000> (2021-05-18 確認)
 - ・「わし【私】」『日本国語大辞典』<https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=200204808e00z5T1J9cs> (2020-11-18 確認)
- スウェーデン教会 (Svenska Kyrkan) <https://www.bibeln.se/visa?q=gen.1@b2k> (2020-11-12 確認)
- 『スウェーデン・アカデミー辞書』 (Svenska Akademiens Ordbok) :
- ・ *icke* 項目 <https://svenska.se/saob/?sok=inte&pz=4> (2020-09-18 確認)
 - ・ *ingalunda* 項目、https://www.saob.se/artikel/?seek=ingalunda&pz=1#U_I451_31030 (2020-07-19 確認)
 - ・ *ty* 項目、https://www.saob.se/artikel/?unik=T_3235-0239.rwib&pz=3 (2020-07-22 確認)
 - ・ *vi* 項目、https://svenska.se/saob/?id=V_0657-0309.Oi12&pz=7 (2021-05-22 確認)
- 『スウェーデン辞書』 (Svensk ordbok)
- ・ *aftonen* 項目、<https://svenska.se/tre/?sok=afton&pz=1> (2020-11-08 確認)
 - ・ *hava* 項目、<https://svenska.se/tre/?sok=hava&pz=1> (2021-01-29 確認)
 - ・ *ingalunda* 項目、<https://svenska.se/so/?id=22267&pz=7> (2020-07-22 確認)
 - ・ *slik* 項目、<https://svenska.se/so/?id=22267&pz=7> (2021-01-25 確認)

• *ty* 項目、<https://svenska.se/so/?id=56564&pz=7> (2020-09-19 確認)
日本聖書協会 <https://www.bible.or.jp/main.html> (2020-11-06 確認)
Du-reformen <https://sv.wikipedia.org/wiki/Du-reformen> (2019-03-06 に確認)
Kyrksamheten år 1927 <https://www.svenskakyrkan.se/kyrkohandboken/gudstjanstkris-i-atminstone-100-ar> (2020-10-19 確認)
Nysvenska <https://sv.wikipedia.org/wiki/Svenska#Nysvenska> (2019-03-06 に確認)